

仙台市文化財調査報告書第348集

# 仙 台 城 跡 9

－平成20年度 調査報告書－



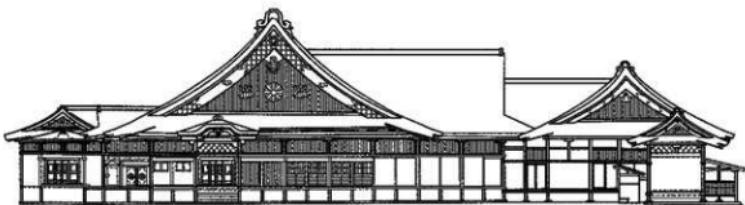
2009年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第348集

# 仙 台 城 跡 9

—平成20年度 調査報告書—

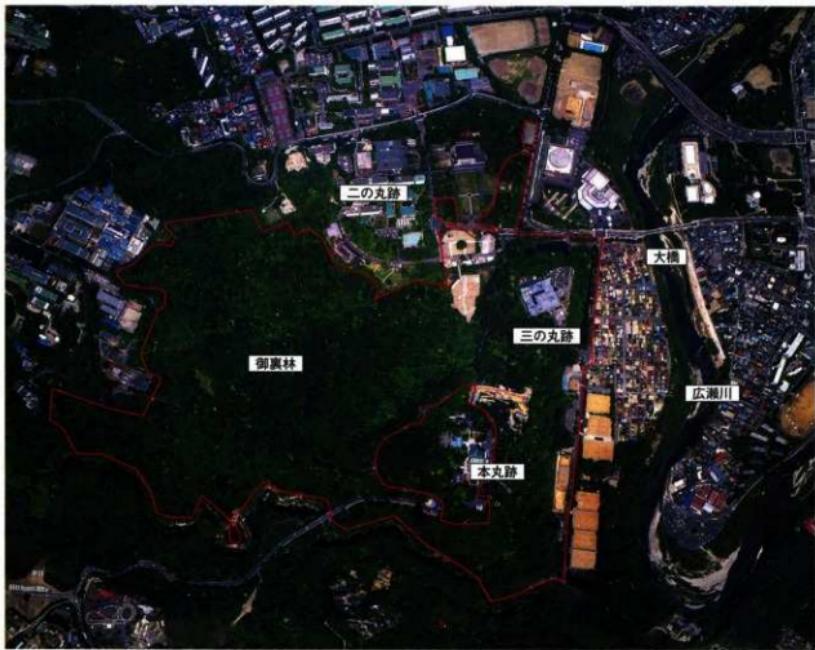


2009年3月

仙台市教育委員会

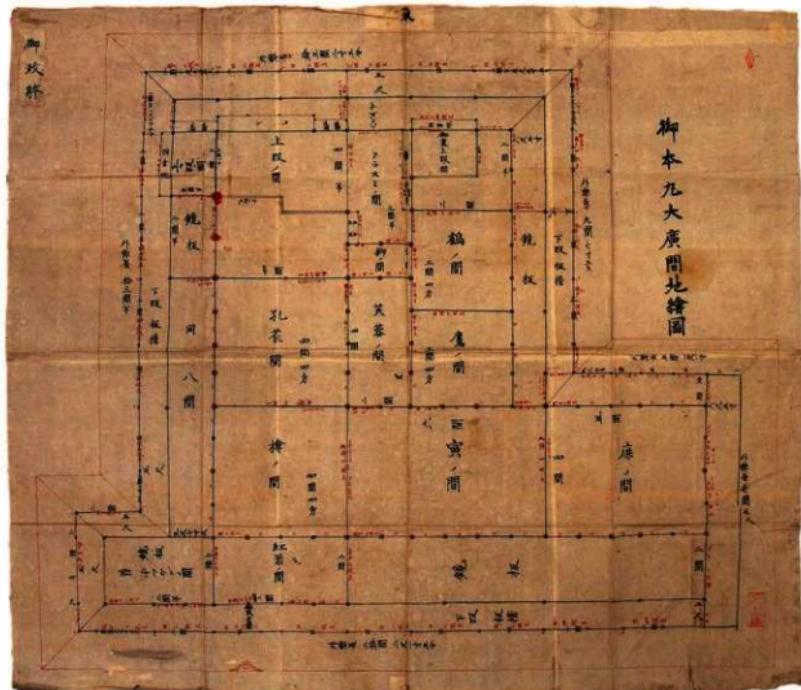


仙台城跡鳥瞰写真（北東より・2005年10月撮影）

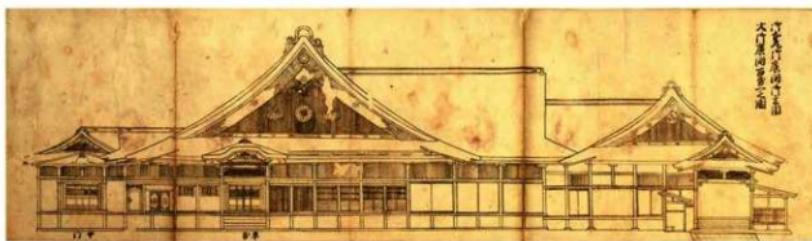


仙台城跡航空写真（北が上・2002年1月撮影・赤ラインは国史跡指定範囲）

御本丸大廣間地繪圖



御本丸大廣間地繪圖 (財) 斎藤報恩会蔵



仙台城及び江戸上屋敷主要建物姿繪図(大廣間部分) 仙台市博物館蔵



第20次 本丸大広間跡調査区全景（東から）



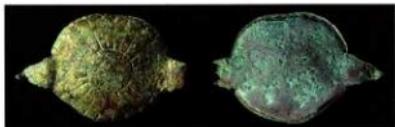
第20次 3区基本層序（北から）



第20次 3区広縁部勾配状況（北東から）



第20次 1区砂礫層検出状況（南東から）



第20次 3区出土金銅金具（No.4）縮尺約1/1



第20次 3区出土銅製飾金具（No.25）縮尺約1/1



第21次 造酒屋敷跡調査区全景（北西から）



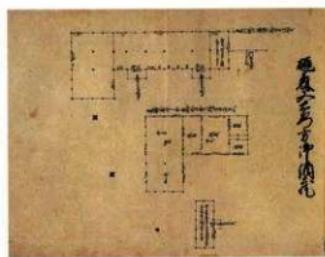
1区全景（南東から）



2区全景（北西から）



第21次 1区基本層序（北東から）



仙台藩内神社仏閣等作事方役所修繕ニ属スル  
場所調（酒蔵部分）宮城県図書館蔵

## 序 文

慶長5年、初代仙台藩主伊達政宗が仙台城の縄張り始めを行い、城下のまちづくりを行ってから、四百年余りが過ぎ、仙台市は人口100万人を超える東北地方の中心都市となりました。市の中心部が、近代的なビルの林立する都市化の波にさらされていく中にあって、仙台城跡は市街地から最も近い緑豊かな場所として、青葉城や天守台といった愛称で、市民から親しまれてきました。

遺跡としての仙台城跡は、平成9年度から15年度まで行われた本丸石垣修復工事に伴う発掘調査や、平成13年度から始められた国庫補助による学術調査によって、中世の山城であった千代城期や、伊達氏の居城期の内容が徐々に明らかとなってきました。

これらの発掘で新たに判明した石垣の変遷や、ヨーロッパ産のガラス器や金銅金具等の貴重な出土品などから、仙台城跡は我が国の近世を代表する城郭遺跡であることが評価され、平成15年8月、国の史跡に指定されました。これを契機として、仙台城跡の保存管理及び整備に向けた、「仙台城跡整備基本計画」が策定される等、仙台城跡の様々な魅力を引き出すための取り組みが始まっております。

こうした中で、平成20年度は本丸御殿の主要な建物である大広間跡を中心とした発掘調査、清水門南側の造酒屋敷跡の発掘調査、本丸北西壁の石垣測量調査が行われました。大広間跡に関する調査は今年度で8年目を迎え、大広間の建物内部における礎石跡を発見し、各部屋の間取りや位置など、大広間の全容を解明する上で大きな成果が得られました。

清水門付近の造酒屋敷跡の調査では、屋敷に伴うと考えられる礎石跡や溝跡などの遺構を発見することができました。

今回の調査事業及び調査報告書の刊行にあたり、多くの方々からご指導、ご協力を賜りましたことを深く感謝申し上げますとともに、本報告書が研究者のみならず市民の皆様に広く活用され、文化財保護の一助となれば幸いです。

平成21年3月

仙台市教育委員会

教育長 荒井 崇

## 例　　言

1. 本書は、仙台城跡の平成20年度遺構確認調査の報告書である。
2. 本調査は、国庫補助事業である。
3. 本報告書の作成にあたり、次のとおり分担した。  
本文執筆は、佐藤洋との協議のもとに、在川宏志が行った。  
陶磁器ほかの観察については佐藤が行った。  
編集は、佐藤・在川がこれにあたった。
4. 土壌サンプル分析は（株）加速器分析研究所、石垣測量は佐野コンサルタンツ（株）に委託した。
5. 本書中の地形図は、国土地理院発行の1：50,000『仙台』と1：10,000地形図『青葉山』の一部を使用している。
6. 遺構図の平面位置図は平面直角座標系X（日本測地系）を用いており、文中で記した方位角は真北線を基準とし、高さは標高値で記した。
7. 遺構略号は、全遺構に通し番号（国庫補助調査による検出遺構番号：KS-）を付した。
8. 本報告書の上色については、『新版標準上色帳』（古山・佐藤：1970）を使用した。

## 目　　次

序　　文		
例　　言		
I はじめに.....	1	
II 仙台城跡の概要.....	3	
III 調査計画と実績.....	6	
IV 第20次調査		
1. 調査目的及び調査経過.....	8	
2. 旧地形及び基本層序.....	9	
3. 検出遺構.....	10	
4. 出土遺物.....	33	
V 第21次調査		
1. 調査目的及び調査経過.....	43	
2. 旧地形及び基本層序.....	44	
3. 検出遺構.....	45	
4. 出土遺物.....	59	
5. まとめ.....	73	
VI 第22次調査		
VII 総括.....	78	

# I はじめに

平成20年度は、仙台城跡遺構確認調査第2次5カ年計画の3年次にあたり、下記の体制で臨んだ。(敬称略、順不同)

調査主体 仙台市教育委員会(生涯学習部文化財課仙台城史跡調査室)

発掘調査、整理を適正に実施するために調査指導委員会を設置し、指導・助言を受けた。

委員長 斎藤 銳雄(宮城県農業短期大学名誉教授 近世史)〔平成20年7月まで〕

岡田 清一(東北福祉大学教授 中世史)〔平成20年10月から〕

副委員長 岡田 清一(東北福祉大学教授 中世史)〔平成20年9月まで〕

平川 新(東北大東北アジア研究センター教授 近世史)〔平成20年10月から〕

委員 西 和夫(神奈川大学教授 建築史)

北垣聰一郎(石川県金沢城調査研究所長 石垣・城郭研究)

藤沢 敦(東北大学特任准教授 考古学)

岡崎 修子(財)仙台ひと・まち交流財団 仙台市片平市民センター館長)

仙台城跡調査指導委員会開催日

第20回：平成20年7月4日 第20次調査中間報告

第21回：平成20年10月10日 第20次調査最終報告・第21次調査中間報告・若林城跡第9次調査中間報告・追廻調査報告・本丸大広間跡調査成果中間報告

第22回：平成21年2月24日 第22次調査報告・若林城跡第9次調査最終報告・本丸大広間跡調査成果報告・平成21年度調査計画

発掘調査及び遺物整理にあたり、次の方々からご協力をいただいた。

宮城県護国神社

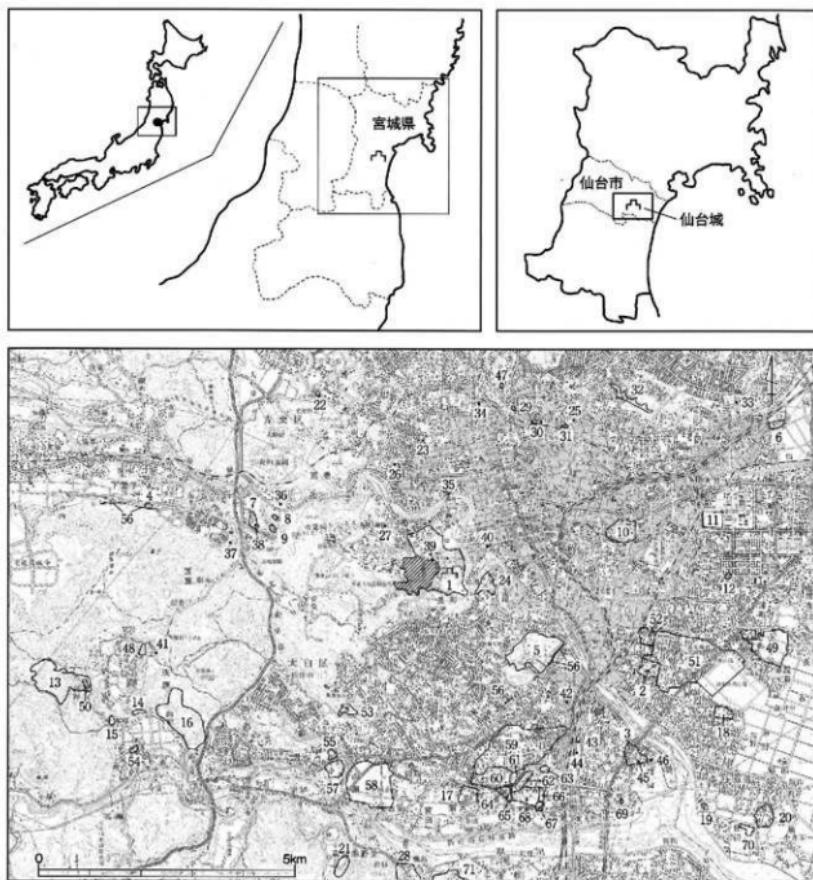
資料提供 (財)斎藤報恩会、仙台市博物館

さらに、下記の諸機関の方々から御教示・御協力をいただいた。

山田見弘(宮城県教育庁文化財保護課)

調査担当	文化財課	課長	田中 则和
	仙台城史跡調査室長	工藤 哲司	
	主任	佐藤 洋	
	主任	熊谷 俊朗	
	主任	佐藤 淳	
	主任	渡部 紀	
	文化財教諭	在川 宏志	

調査および整理参加者 相澤 守、安部文子、大野美津枝、遠藤誠子、小野寺美智子、菅家婦美子、高野誠一、竹内義行、対馬悦子、菱沼みのり、堀内泰子、三鶴典子、結城龍子、吉田綾絵子、渡邊 優



城跡	15	茂根西城跡	16	茂根けんとう城跡	17	宮代城跡	18	沖野城跡	19	北日城跡	20	今泉城跡	21	茂ヶ崎城	22	守山城跡	23	守子下城	24	守伊達城跡	25	東日城跡	26	守山城跡	27	島根八幡宮	28	那智守伊達城跡	
	15	茂根西城跡	16	茂根けんとう城跡	17	宮代城跡	18	沖野城跡	19	北日城跡	20	今泉城跡	21	茂ヶ崎城	22	守山城跡	23	守子下城	24	守伊達城跡	25	東日城跡	26	守山城跡	27	島根八幡宮	28	那智守伊達城跡	
1	守合城跡	15	茂根西城跡	16	茂根けんとう城跡	17	宮代城跡	18	沖野城跡	19	北日城跡	20	今泉城跡	21	茂ヶ崎城	22	守山城跡	23	守子下城	24	守伊達城跡	25	東日城跡	26	守山城跡	27	島根八幡宮	28	那智守伊達城跡
2	石林城跡	16	茂根けんとう城跡	17	宮代城跡	18	沖野城跡	19	北日城跡	20	今泉城跡	21	茂ヶ崎城	22	守山城跡	23	守子下城	24	守伊達城跡	25	東日城跡	26	守山城跡	27	島根八幡宮	28	那智守伊達城跡		
3	北日城跡	17	宮代城跡	18	沖野城跡	19	北日城跡	20	今泉城跡	21	茂ヶ崎城	22	守山城跡	23	守子下城	24	守伊達城跡	25	東日城跡	26	守山城跡	27	島根八幡宮	28	那智守伊達城跡				
4	西船跡	18	沖野城跡	19	北日城跡	20	今泉城跡	21	茂ヶ崎城	22	守山城跡	23	守子下城	24	守伊達城跡	25	東日城跡	26	守山城跡	27	島根八幡宮	28	那智守伊達城跡						
5	茂ヶ崎城	19	北日城跡	20	今泉城跡	21	茂ヶ崎城	22	守山城跡	23	守子下城	24	守伊達城跡	25	東日城跡	26	守山城跡	27	島根八幡宮	28	那智守伊達城跡								
6	小瀬城跡	20	今泉城跡	21	茂ヶ崎城	22	守山城跡	23	守子下城	24	守伊達城跡	25	東日城跡	26	守山城跡	27	島根八幡宮	28	那智守伊達城跡										
7	守山城跡	21	茂ヶ崎城	22	守山城跡	23	守子下城	24	守伊達城跡	25	東日城跡	26	守山城跡	27	島根八幡宮	28	那智守伊達城跡												
8	守山城跡	22	守山城跡	23	守子下城	24	守伊達城跡	25	東日城跡	26	守山城跡	27	島根八幡宮	28	那智守伊達城跡														
9	守伊達城跡	23	守子下城	24	守伊達城跡	25	東日城跡	26	守山城跡	27	島根八幡宮	28	那智守伊達城跡																
10	守伊達城跡	24	守伊達城跡	25	東日城跡	26	守山城跡	27	島根八幡宮	28	那智守伊達城跡																		
11	守伊達城跡	25	東日城跡	26	守山城跡	27	島根八幡宮	28	那智守伊達城跡																				
12	守山城跡	26	守山城跡	27	島根八幡宮	28	那智守伊達城跡																						
13	茂根城跡	27	島根八幡宮	28	那智守伊達城跡																								
14	那智守伊達城跡																												

第1図 仙台城跡と周辺の遺跡

## II 仙台城跡の概要

### 1. 仙台城跡の地理的環境と現況

仙台城跡は仙台市街地の西方に位置し、青葉山丘陵及びその麓の河岸段丘部分を中心に城域が形成されている。青葉山丘陵は東を流れる広瀬川に向かい迫り出し、広瀬川とその支流の竜ノ口渓谷の浸食により高さ70mほどの断崖を形成しており、その丘陵上の平場（標高115～117m）に仙台城の本丸は位置する。本丸の規模は、東西245m、南北267mを計り、南側は落差約40mの竜ノ口渓谷、東側は広瀬川に落ちる高さ約70mの断崖に守られた天然の要害となっており、比較的傾斜の緩やかな本丸北側には約17mの高さを有する石垣が築かれている。尾根続きとなっている本丸西側には「御裏林」と呼ばれた森林が広がり、貴重な自然が残るために国指定天然記念物「青葉山」となっている。御裏林では、3条の大規模な堀切などが確認されている。本丸跡の麓部の河岸段丘には二の丸跡と三の丸跡が位置しており、二の丸跡は仙台上町段丘面、三の丸跡は仙台下町段丘面と高度を下げている。蛇行する広瀬川に西から二本の大きな沢が走り、この沢に挟まれて御裏林を背にした場所に二の丸跡が位置する。二の丸跡の東側に位置する大手門跡付近には、約9mの高さの石垣が残り、その南側には大手門脇櫓が昭和42年（1967）に復元されている。さらに低位に位置する三の丸跡は、外郭を水堀と土塁に囲まれ、門跡付近には石垣が残存している。三の丸跡の東側、河岸段丘の最も低位に位置する追廻地区の広瀬川の岸部分には、260mに及ぶ石垣が残存している。

### 2. 仙台城跡の歴史的背景

仙台城は、初代仙台藩主伊達政宗によって造営された城である。関ヶ原の戦い直後の慶長7年（1600）12月24日、城の縄張りが開始され、翌年1月から普請に着手、工事は慶長7年（1602）5月には一応の完成をみたとされている。築城当初は「山城」である本丸を中心とする城郭であったが、政宗の死後、二代藩主忠宗が山麓部に二の丸の造営を開始する。寛永年間以降はこの二の丸が藩政の中心となり、三の丸・勘定所・重臣武家屋敷などが一体となって城域を形成していた。残された絵図などからみると、本丸への登城路は、大手門を通って中門を経て本丸詰門に至るものと、巽門、清水門、沢門を通るものがある。

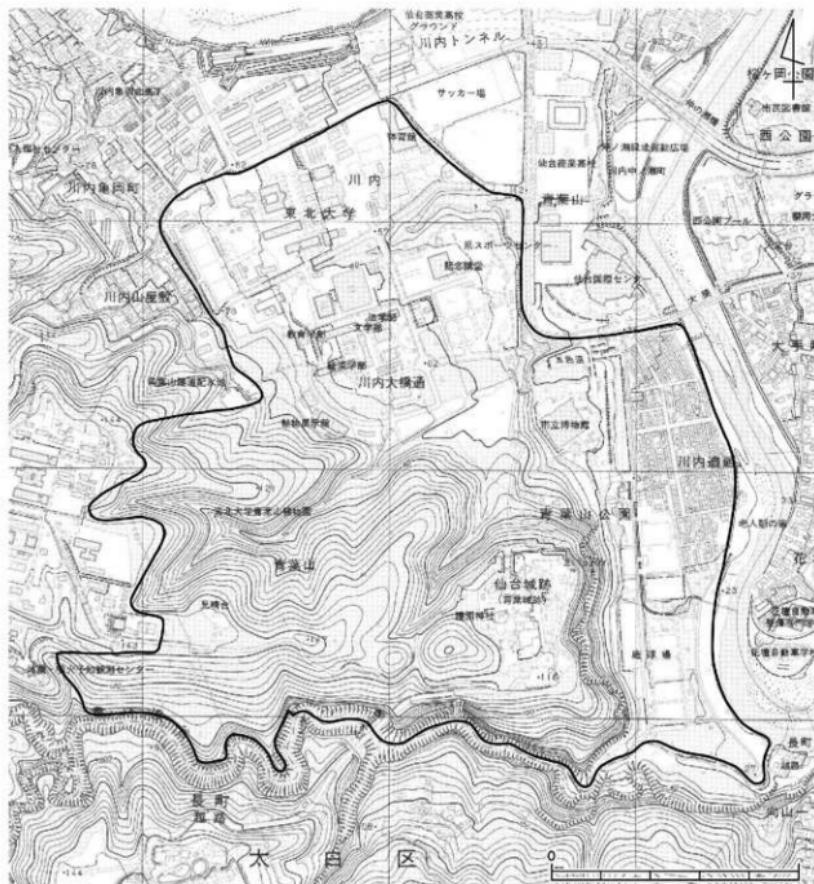
絵図や文献などによれば（註1）、本丸には詰門に入った東側に天皇や将軍家を迎えるための御成門があり、華麗な障壁画や欄間彫刻に彩られた大広間を中心とする御殿建物群が存在していた。東側の城下を見下ろす崖面に造られた懸造、さらには能舞台・書院など、上方から招いた当代一流の大工棟梁・工匠・画工等によって造られた桃山文化の集大成といえる建物群が威容を誇っていたと考えられている。西脇櫓・東脇櫓・長櫓・巽櫓は三重の櫓であったが、正保3年（1646）4月の地震によって倒壊したとする記事がみられ（註2）、以後復興されずに明治を迎えたものとされている。

本丸の建物群は江戸時代の度重なる災害に加え、明治維新後の取り壊しなどにより失われ、二の丸の御殿群も明治15年（1882）の大火によって焼失した。唯一仙台城の面影

を伝えていた国宝の大手門及び脇櫓も昭和20年（1945）7月、太平洋戦争の際の米軍による空襲によって焼失した。現在では、本丸北壁や隨所に点在する石垣、本丸西側の堀切、三の丸の周囲を囲む堀と土塁などが往時の仙台城を偲ぶ貴重な遺構となっている。また、伊達氏による仙台城築城以前にこの地域をおさめていた国分氏の居城「千代城」に関する16世紀代の文献記録も残っており（註3）、中世山城が存在していた可能性も指摘されている。



第2図 燐失以前の大手門と脇櫓（1935年頃）



第3図 仙台城跡（現況地形図と遺跡範囲、1/10,000）



第4図 仙台城本丸現存（Ⅲ期）石垣・  
解体修理工事前（北西から）



第5図 仙台城本丸現存（Ⅲ期）石垣・  
解体修理工事跡（東北から）

### 3. 仙台城跡の発掘調査

仙台城跡のこれまでの調査には、昭和58年（1983）から継続的に実施されている東北大学構内の施設整備に伴う二の丸跡の発掘調査（註4）と、仙台市博物館の新築工事に伴って昭和58・59年（1983・1984）に実施された三の丸跡の発掘調査（註5）があり、本丸跡では石垣修復工事に伴う発掘調査が第1次発掘調査である。

本丸北壁の石垣は昭和30年代から変形が目立ち始め、防災上の観点から石垣修復工事が平成9年（1997）度から実施されている。（註6）この石垣修復工事に伴う本丸1次発掘調査は、平成9年（1997）7月から石垣解体に先行する事前調査と、翌年10月から開始した解体工事と並行する発掘調査からなっている。解体工事は平成12年（2000）9月に石材9,106石と、Ⅱ期石垣124石の解体をもって終了し、石積工事を同年12月から開始し、平成16年（2004）3月に工事が終了した。

石垣解体修復に伴う発掘調査により、現存石垣（Ⅲ期石垣）背面より二時期にわたる旧石垣（Ⅰ期・Ⅱ期石垣）が検出され、石垣基部の調査や石垣断面構造の記録化により、Ⅰ期からⅢ期までの石垣の変遷や構造が明らかになった。石材調査では各種の刻印や朱書き、墨書きなどを多数発見し、矢穴や石材加工の変化も確認されている。石垣は、表面の「石積み」様式の変化とともに、背面の土木工法の変容も顕著であり、石垣背面の土木工事痕跡の考古学的な手法による層位的調査と、盛土の重複関係や遺物の分析からみた石垣変遷を、文献調査との照合により時期区分されている。築城期には、旧地形や中世山城「千代城」の縄張りを利用して斜面を切り土しながら石垣を構築（Ⅰ期）し、元和12年（1616）の地震によりこの石垣が倒壊した後、築城期の石垣形状を一新する修復工事が行われて石垣が再構築（Ⅱ期）され、その後、寛文8年（1668）の地震によりこのⅡ期石垣も倒壊し、現存石垣に全面改築（Ⅲ期）されたと考えられている。（註7）

註1 「仙台城下絵図」（寛文4年（1664）宮城県図書館蔵）や「青山公造制城郭木写之略図」（四代藩主内村時代、17世紀後半（推定）宮城県図書館蔵）には本丸御殿の建物群が描かれ、「貞山公治家記録」にも大広間の記事が散見できる。建物群の考察については、佐藤巧「仙台城の建築」（仙台市教育委員会「仙台城」1967）・「仙台城館および周辺建物復元考」（仙台市博物館「調査研究報告第6号」1986）・伊東信雄「仙台城の歴史」・三原良吉「仙台城年表」（仙台市教育委員会「仙台城」1967）などがある。

註2 義山公治家記録、正保6年（1646）4月28日條

註3 貞山公治家記録、慶長5年（1600）12月24日條

註4 東北大学埋蔵文化財調査年報1～17（東北大学埋蔵文化財調査センター1985～2002）

註5 発掘調査報告書「仙台城三ノ丸跡」（仙台市教育委員会1983）

註6 仙台城跡石垣修復等調査指導委員会（平成13年度に仙台城石垣修復工事専門委員会と改編）資料・議事録（仙台市建設局）1997～2003）

註7 本丸1次発掘調査成果に係る主な参考文献 金森安孝「仙台城本丸跡の発掘調査」（『考古学ジャーナル442号』1999）金森「仙台城本丸の発掘と出土陶磁」（『貿易陶磁研究No.19』1999）金森・我妻仁「仙台城本丸跡 築城期及び修復石垣の発見」（『考古学ジャーナル456号』2000）我妻「仙台城本丸跡石垣の背面構造と変遷」（『宮城考古学第2号』2000）金森「仙台城本丸跡石垣修復に伴う発掘調査」（『日本歴史第626号』2000）我妻「仙台城本丸跡石垣における階段状石列の構造と役割」（『予祭』）（『宮城考古学第3号』2001）金森・我妻「仙台城本丸跡Ⅲ期石垣の発掘調査－現存石垣の構築技術－」（『考古学ジャーナル474号』2001）金森・根本光一「仙台城石垣の石材調査」（『考古学ジャーナル484号』2002）伊藤隆「仙台城石垣の石材調査」（東北芸術工科大学「石垣昔話の風景を読む」2003）



第6図 本丸北壁石垣北東角部  
旧石垣（I・II期）検出状況（北東から）



第7図 本丸北壁石垣背面  
階段状石列検出状況（北西から）

### III 調査計画と実績

平成20年度は、仙台城跡遺構確認調査の第2次5ヵ年計画3年目にあたる。平成17年度までの第1次5ヵ年計画では、国指定史跡仙台城跡の全体像を把握することを目標として、遺構の遺存状況、種類、規模、配置等の確認を目的とする遺構確認調査と、石垣の破損状況や石積みの特徴を確認することを目的とする石垣現況調査、測量調査などを実施してきた。また、本丸大広間跡や巽櫓跡などの発掘調査、本丸での遺構現況調査などを行ってきた。

第1表 これまでの調査実績

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間
第1次	大広間跡（1次）	185m <sup>2</sup>	平成13年9月17日～12月27日
第2次	清水門付近石垣測量	210m <sup>2</sup> （立面）	平成13年11月30日～平成14年2月13日
第3次	大番士手跡・御守殿跡・懸跡	1,400m <sup>2</sup>	平成14年5月20日～平成15年1月31日
第4次	巽櫓跡	110m <sup>2</sup>	平成14年5月20日～8月31日
第5次	大広間跡（2次）	470m <sup>2</sup>	平成14年8月5日～12月20日
第6次	仙台城跡（全域）	約145ha	平成15年5月7日～8月8日
第7次	大広間跡（3次）	258m <sup>2</sup>	平成15年8月4日～12月25日
第8次	登城路跡	58m <sup>2</sup>	平成15年11月12日～12月25日
第9次	広瀬川護岸石垣測量	50m <sup>2</sup> （立面）	平成15年12月9日～平成16年2月5日
第10次	大広間跡（4次）	397m <sup>2</sup>	平成16年7月20日～12月24日
第11次	登城路跡・広瀬川護岸石垣測量	349m <sup>2</sup> （立面）	平成16年12月18日～平成17年3月31日
第12次	大広間跡（5次）	446m <sup>2</sup>	平成17年5月26日～10月19日
第13次	三の丸櫓跡（1次）	86m <sup>2</sup>	平成17年11月1日～12月22日
第14次	中門北側・広瀬川護岸石垣測量	627m <sup>2</sup>	平成18年1月16日～1月20日
第15次	大広間跡（6次）	311m <sup>2</sup>	平成18年6月1日～8月4日
第16次	三の丸櫓跡（2次）	522m <sup>2</sup>	平成18年9月1日～11月30日
第17次	大広間跡（7次）	263m <sup>2</sup>	平成19年5月28日～8月3日
第18次	三の丸櫓跡（3次）	468m <sup>2</sup>	平成19年9月1日～11月26日
第19次	本丸北西壁石垣測量（1次）	425m <sup>2</sup> （立面）	平成20年1月16日～1月18日

第2次5ヵ年計画では、引き続き、国指定史跡仙台城跡における全体像の把握を目的として、遺構確認調査と石垣現況調査、測量調査、絵図等の資料調査などを実施する予定である。今年度は、本丸大広間周辺及び造酒屋敷跡周辺における遺構確認調査、本丸北西壁石垣の測量調査を実施した。発掘調査費については総額20,666千円、国庫補助額10,033千円との内示を受けたことから、以下の調査計画を立案した。

第2表 調査計画表

	調査地区	調査面積	調査期間
第20次	大広間跡（8次）	200m <sup>2</sup>	平成20年5月8日～8月31日
第21次	造酒屋敷跡（1次）	160m <sup>2</sup>	平成20年9月1日～10月31日
第22次	本丸北西壁石垣測量（2次）	448m <sup>2</sup> （立面）	平成20年12月15日～平成21年3月31日

これまで、本丸跡では7次にわたる調査により、仙台城本丸御殿の中心的建物である大広間跡の礎石跡や雨落ち溝跡などを検出し、大広間建物跡の位置及び規模（東西33.5m、南北26.3m）を確認した。また、大広間跡の西側に位置する御成門跡の礎石や、そこから大広間跡に延びる通路跡と考えられる石敷き遺構を検出した。さらに大広間の北側では、大広間跡に先行する、石敷きを伴う礎石建物跡を一棟、確認した。

第20次調査は、大広間跡の内部南半における遺構確認等を目的として実施した。調査では、大広間跡の間取りに関わる礎石跡を検出した。さらに、これまでの調査で確認した礎石跡よりも小さい束柱の礎石および礎石跡も検出した。大広間の間取りや各部屋の配置を検討する上で重要な成果が得られた。また、大広間南東部の整地層直下より、礎石と考えられる遺構を検出した。遺物は、瓦・磁器・陶器・銅釘などが出土した。

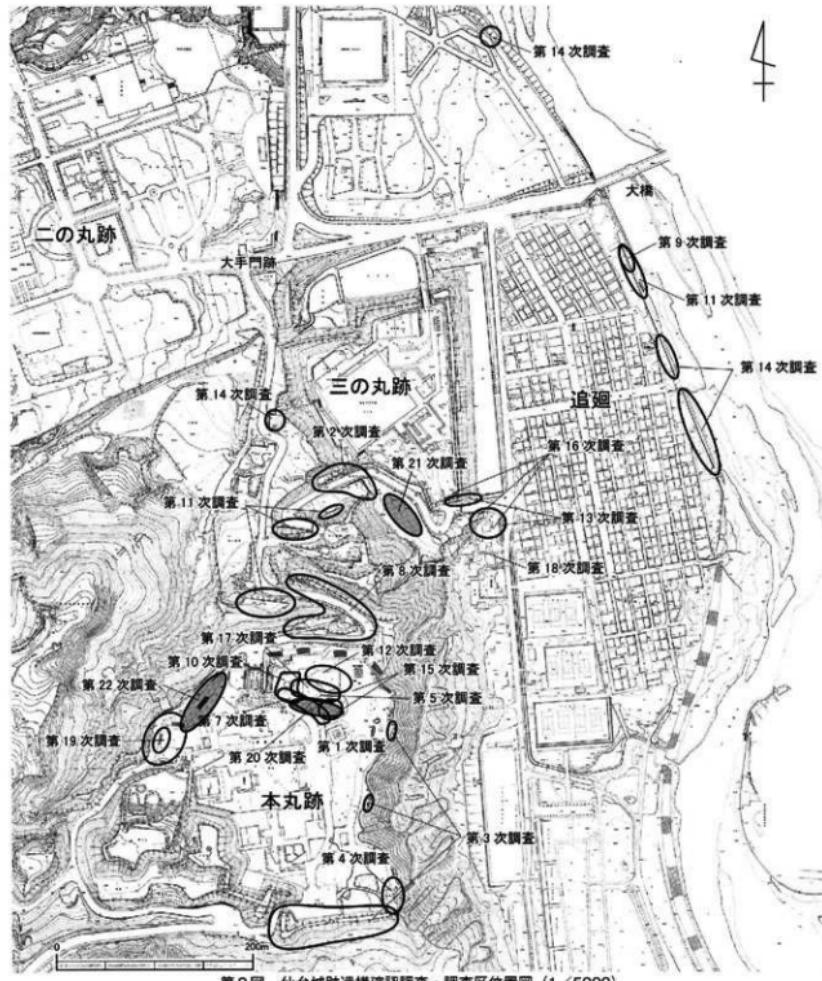
第21次調査は、清水門付近にあったとされる造酒屋敷跡の遺構確認を目的として実施した。屋敷跡の調査（1区・2区）では、屋敷に関わると考えられる礎石や溝跡、炉跡、集石遺構などを検出した。遺物は、瓦・磁器・陶

器・鉄製品などが出土した。

第22次調査は、本丸北西壁石垣E面の測量を行い、石積み状況を調査した。昨年度実施した第19次調査により、C面及びD面を既に測量している。第22次調査では約64mを測量調査し、石垣の固化工業を併せて行った。

第3表 調査実績表

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間
第20次	大広間跡（8次）	248m <sup>2</sup>	平成20年5月8日～7月31日
第21次	造酒屋敷跡（1次）	160m <sup>2</sup>	平成20年8月26日～10月29日
第22次	本丸北西壁石垣測量（2次）	448m <sup>2</sup> （立面）	平成20年12月24日～平成21年1月21日



第8図 仙台城跡遺構確認調査・調査区位置図 (1/5000)

#### IV 第20次調査

## 1. 調査目的及び調査経過

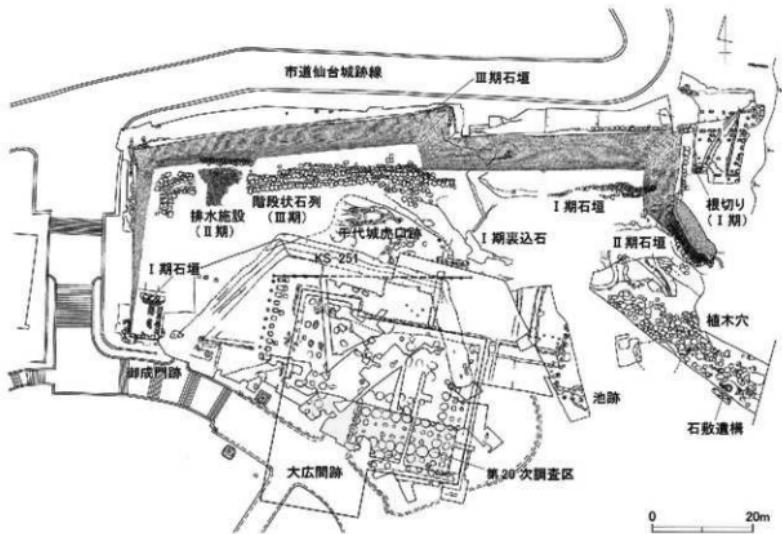
第20次調査は、大広間跡中央部の建物内部における遺構確認を目的として平成20年（2008）5月12日から同年7月31日まで実施した。調査面積は、青葉山公園として管理されている仙台市有地内の248m<sup>2</sup>である。大広間跡に関する調査としては第8次にあたる。

調査目的は、大広間内部における構造確認および大広間に先行する建物跡に関する連携の確認である。

調査区の設定や調査前の現況写真撮影の後、5月7日からフェンスを設置し、5月8日から重機による表土の除去作業を開始した。人力による遺構面の検出作業は5月12日から開始した。電気ケーブルや水道管を埋設した際の掘り方といった極めて新しい時期の擾乱の除去作業を行い、その壁面および平面の精査を行なながら明治時代以降の整地層であるⅡ層を除去した。Ⅱ層の精査時に1区から2区にかけて、南西から北東に延びる近現代の軌跡を検出した。その後、江戸時代の盛土層または整地層であるⅢ層上面で遺構検出作業を行った。調査区内をベルトを挟んで3箇所に分け、西からそれぞれ1～3区と呼称し調査を行った。

調査では、大広間にかかる礎石および礎石跡を新たに45基検出した。このうち、これまでの調査で確認された礎石跡より小さい東柱の礎石および礎石跡を21基検出した。大広間の間取りや各部屋の配置を検討する上で重要な成果が得られた。また、大広間内部の整地層直下より、礎石と考えられる遺構1基を検出した。遺物は、磁器、陶器、土師質土器、銅釘、瓦などが出土した。

第20次調査は、平成20年3月23日の第19回仙台城跡調査指導委員会において、調査箇所や目的、方法について了承を得て実施した。平成20年7月4日の第20回仙台城跡調査指導委員会では、現地においてこれまでの調査成果と今後の進め方について指導を受けた。調査成果については、7月9日に記者発表、7月12日に現地説明会（300名参加）を実施し公表した。その後、調査区の埋め戻しやフェンス撤去等の作業を終え、7月31日に調査箇所を原状



第9図 仙台城本丸跡北部・大広間跡調査区位置図 (1/1000)

に復した。

平成20年10月10日に第21回仙台城跡調査指導委員会を開催し、調査成果の最終的な確認を行った上で、本報告書を刊行するに至った。



第10図 調査前状況（東から）



第11図 調査前状況（南東から）

## 2. 旧地形及び基本層序

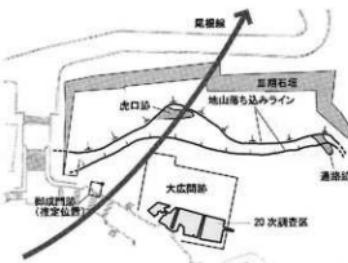
大広間周辺の旧地形をみると、その北側前方に中世千代城の虎口跡が検出された尾根の張り出しがある（第12図）。この尾根線は、御成門跡付近から大広間跡の北西角部を通じ北東方向へ延びるもので、大広間のある平場の地形は、本来東へ向けて緩やかに傾斜していたものと考えられる。

基本層は、I層（現表土）、II層（近代以降の整地層）、III層（近世の整地層）、IV層（地山直上の旧表土層）、V層（地山）に大別される（第4表）。以下、概要を記す。

II層はa～d層に細分した。IIa～c層は、近代以降の盛土層で特に1・2区に分布する。IId層は、大広間庵庭直後の盛土層で、IId層上面およびIIc層上面で近代以降の織跡を検出した。

III層はa～d層に細分した。IIIa層は近世期の最も新しい層で、大広間が廃され、礎石が抜取られるまでの旧表土層である。3区の東側の一部で確認された（第19図参照）。IIIa層上面で礎石の抜取り穴を検出した。IIIb層は礎石および礎石跡の検出面である。第17次調査でのIIIa層に対応する。大広間内部の整地最上層と考えられる。3区東側拡張部で叩土（他の整地層に用いたものとは異なる土）を用い、叩き作業によって形成されたと考えられるIIIb1層（硬化層）を検出した。なお、第17次調査で、IIIa層が礎石抜取り穴の上にも堆積していると報告したが、堆積土についても礎石抜取り後に再堆積したIII層に類似した近代以降の整地土であったので訂正する。IIIc層はIIId層およびV層直上の整地層である。17次調査でのIIIb層に対応する。1区では、同質の土で層を形成し、その下にIIId層が見られるが、2区より東側では複数の盛土によって形成されており、その下はV層となる。大広間の東側は標高が低いことから、地面を平坦にするため、複数回にわたる盛土整地が行われたと考えられる。IIId層は砂砾を主体とする層で、17次調査でのIIId層に対応する。今回の調査区では1区から2区の西側に分布し（第37図参照）、1区南東部と2区では縁をほとんど含まない。2区中央部より東側では確認されなかつた。

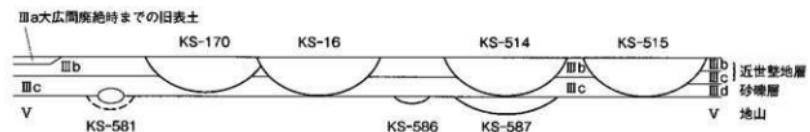
第4表 第20次調査基本層序記表



第12図 本丸跡北部平面模式図（旧地形と検出遺構）

選択番号	透視・剖面	土色		土質	土性	特徴	備考
		上色No	上色				
I	107R4/4	褐色	シルト	有	無	現代の表土。	
IIa	25Y6/3	にほい・黄褐色	粘土	有	有	水分を多く含む。塵を少量含む。近現代の表土。	
IIb	107R3/4	暗褐色	シルト	有	やや有	水分、腐朽物、瓦片を少量に含む。	
IIc	107R4/2	灰褐色	シルト	有	無	塵を少額含む。1・2区で確認。	
IIIa	25Y6/6	褐色	シルト	有	無	塵、粉砂を含む。人伝開拓後直後の初期土。上面に近現代の織紋。	
IIIb	107R4/4	褐色	地盤ゴシルト	有	有	無、松皮を含む。3区東側で確認。大広間跡の礎石抜取りまでの表土。	
IIIb	107R6/6	黄褐色	粘土シルト	有	やや有	無、粉砂を含む。3区東側で確認。大広間跡の礎石抜取りまでの表土。	
IIIc	107R4/4	褐色	シルト	有	有	25層に分布。岩石を含む。地山直上の地盤。	
IIId	25Y5/4	褐色	砂礫	有	無	砂と直径4～6cmの礫を多量に含む。大広間跡の外に分布。17次調査でのIIId層に対応。	
V	107R4/2	にほい・黄褐色	地盤シルト	有	有	炭化物を多量に含む。大広間跡の外に分布。旧表土層。今年度の調査では確認されず。	
V	25Y6/3	にほい・黄褐色	粘土	有	無	4層に分層。無土層。	

IV層はV層（地山）上面に堆積した旧表土層とみられ、第15次調査で大広間の外側で見られたが、大広間内部では確認できなかった。V層は地山層で、風化した砂礫や鉄分を含む粘土層である。



第13図 第20次調査 大広間南東部基本層序模式図

### 3. 検出遺構

#### (1) 大広間跡

今回の調査で新たに確認した礎石跡 (KS-511～556) と以前の調査で確認した礎石跡 (KS-2・3・6・7・16～18・20・170～172・193・210～212・230・480) について記述する。今回の調査で確認した礎石跡はKS-538・551の2基を除いて礎石が無く、根固めもしくは掘り方のみを検出した。根固め・掘り方の検出面はIIIb層上面である。なお、KS-519・520・532・533・541・542・549・550・556ではIIIa層上面で礎石の抜取り穴を検出した。

・KS-480礎石跡 1区の北東角で検出した。17次調査で北側部分を検出しており、平面形は東側を搅乱に切られているが、不整形である。規模は東西130cm以上、南北155cmである。今回の調査で根固め石は確認されなかった。南側で東西67cm以上、南北27cm以上の礎石抜取り穴を確認した。

・KS-193礎石跡 1区北部、KS-518の北約80cmで検出した。平面形は西側を搅乱に切られているが、ほぼ円形であったと推測される。規模は東西116cm以上、南北128cm以上である。根固め石の大きさは径5～15cmである。西側で東西44cm以上、南北76cm以上の礎石抜取り穴を確認した。

・KS-2礎石跡 3区北部、KS-30の西約30cmで検出した。平面形は不整形である。規模は東西117cm、南北53cm以上である。根固め石の大きさは径5～15cmである。東西80cm以上、南北40cm以上の礎石抜取り穴を確認した。

・KS-6礎石跡 3区北部、KS-2の西約40cmで検出した。平面形は円形である。規模は東西206cm、南北143cm以上である。根固め石の大きさは径5～20cmである。東西158cm、南北113cm以上の礎石抜取り穴を確認した。抜取り穴からレンガ片1点出土している。（「仙台城跡I」参照）

・KS-20礎石跡 3区北部、KS-6の西約10cmで検出した。平面形は不整形である。東西61cm、南北75cm以上の礎石抜取り穴である。掘り方と根固め石は確認されなかった。西に隣接するKS-7に切られるが、構築時期に差はないと考えられる。

・KS-7礎石跡 3区北部、KS-20の西隣で検出した。平面形は円形である。規模は東西201cm、南北135cm以上である。根固め石の大きさは径5～15cmである。東西156cm、南北110cm以上の礎石抜取り穴を確認した。西に隣接するKS-511に切られるが、構築時期に差はないと考えられる。

・KS-511礎石跡 3区北部、KS-7の西隣で検出した。平面形は円形である。規模は東西183cm、南北153cm以上である。根固め石の大きさは径5～15cmである。東西44cm以上、南北72cmの礎石抜取り穴を確認した。KS-562より古い。

・KS-512礎石跡 2区北部、KS-511の西隣で検出した。平面形は南側を木の根に覆われているがほぼ円形である。規模は、東西198cm、南北140cm以上である。根固め石の大きさは径5～20cmである。礎石抜取り穴は確認されなかった。KS-562より古い。

・KS-513礎石跡 2区北部、KS-512の西約20cmで検出した。平面形は円形である。規模は東西201cm、南北

193cm以上である。根固め石の大きさは径5~15cmである。東西70cm、南北88cmの礎石抜取り穴を確認した。KS-563より古い。

・KS-514礎石跡 2区北部、KS-513の西約30cmで検出した。検出面はⅢb層上面である。平面形は大部分を搅乱に切られているが、不整円形である。規模は東西173cm以上、南北120cm以上である。根固め石の大きさは径5~15cmである。断面でのみ礎石抜取り穴を確認した。

・KS-515礎石跡 2区北部、KS-514の西約80cmで検出した。平面形は不整円形である。規模は東西212cm以上、南北191cmである。根固め石の大きさは径5~15cmである。東西156cm、南北110cm以上の礎石抜き取り穴を確認した。

・KS-516礎石跡 2区北部、KS-515の西隣で検出した。平面形は円形である。規模は東西200cm、南北196cmである。根固め石の大きさは径5~20cmである。東西55cm、南北80cmの礎石抜き取り穴を確認した。

・KS-517礎石跡 1・2区を挟む、KS-516の西約10cmで検出した。平面形は梢円形である。規模は東西132cm以上、南北95cm以上である。根固め石の大きさは径5~10cmである。礎石抜取り穴は確認されなかった。

・KS-518礎石跡 1区北部、KS-193の南約80cmで検出した。平面形は大部分を搅乱に切られているが、ほぼ円形である。規模は東西90cm以上、南北174cm以上である。根固め石の大きさは径5~15cmである。礎石抜取り穴は確認されなかった。

・KS-3礎石跡 1区西部、KS-518の西約80cmで検出した。平面形は搅乱で大部分を切られているが、不整円形であったと推測される。東西65cm以上、南北72cm以上の礎石抜取り穴である。掘り方と根固め石は確認されなかった。

・KS-519礎石跡 3区東壁の西側で検出した。大広間落縁の東辺に位置する。検出面はⅢa層上面である。平面形は不整円形であったと推測される。東西16cm以上、南北85cm以上の礎石抜取り穴である。掘り方と根固め石は確認されなかった。

・KS-520礎石跡 3区東部、KS-519の西約40cmで検出した。大広間広縁の東辺に位置する。検出面はⅢa層上面である。平面形は不整円形である。東西119cm以上、南北110cm以上の礎石抜取り穴である。掘り方と根固め石は確認されなかった。

・KS-521礎石跡 3区北部、KS-520の西約13mで検出した。平面形は不整円形である。東西25cm以上、南北16cm以上の掘り方の一部である。根固め石と礎石抜取り穴は確認されなかった。

・KS-522礎石跡 3区北部、KS-521の西約1mで検出した。平面形は不整円形である。規模は東西85cm以上、南北90cm以上である。根固め石は確認されなかった。東西65cm、南北80cmの礎石抜き取り穴を確認した。

・KS-523礎石跡 3区北部、KS-522の西約1mで検出した。平面形は、梢円形である。規模は東西54cm以上、南北78cm以上である。根固め石は確認されなかった。東西40cm以上、南北59cm以上の礎石抜取り穴を確認した。

・KS-211礎石跡 3区北部、KS-523の西約1.3mで検出した。平面形は円形である。規模は東西43cm以上、南北69cm以上である。根固め石は確認されなかった。東西33cm以上、南北51cm以上の礎石抜取り穴を確認した。

・KS-212礎石跡 2区北部、KS-211の西約1.3mで検出した。平面形は梢円形である。規模は東西78cm、南北48cmである。根固め石の大きさは径5~20cmである。礎石抜取り穴は確認されなかった。

・KS-524礎石跡 2区北部、KS-212の西約1.6mで検出した。平面形は搅乱に大部分切られているが、円形であったと推測される。東西55cm以上、南北39cm以上である。根固め石は確認されなかった。東西50cm以上、南北35cm以上の礎石抜取り穴を確認した。

・KS-525礎石跡 2区北部、KS-524の西約1.3mで検出した。平面形は梢円形である。規模は東西65cm以上、南北31cm以上である。根固め石は確認されなかった。東西42cm以上、南北20cm以上の礎石抜取り穴を確認した。

・KS-526礎石跡 2区北部、KS-525の西約1.3mで検出した。平面形は搅乱に大部分切られているが、円形であったと推測される。東西35cm以上、南北49cm以上の掘り方の一部である。根固め石と礎石抜取り穴は確認されなかった。

- ・KS-527礎石跡 2区北部、KS-526の西約1.5mで検出した。平面形は不整円形である。規模は東西83cm、南北126cmである。根固め石の大きさは径5~20cmである。礎石抜取り穴は確認されなかった。
- ・KS-528礎石跡 1・2区を挟む、KS-527の西約80cmで検出した。平面形はほぼ円形である。規模は東西145cm、南北151cm以上である。根固め石の大きさは径5~15cmである。礎石抜取り穴は確認されなかった。
- ・KS-529礎石跡 1区西部、KS-518の南隣で検出した。平面形は木の根があるため、一部のみの検出であるが、ほぼ円形であったと推測される。規模は東西51cm以上、南北101cm以上である。根固め石の大きさは径5~10cmである。礎石抜取り穴は確認されなかった。
- ・KS-530礎石跡 1区西部、KS-529の西約1.2mで検出した。平面形は不整円形である。東西97cm、南北80cmの礎石抜取り穴である。掘り方と根固め石は確認されなかった。
- ・KS-531礎石跡 1区西部、KS-530の西約1mで一部検出し、平面形は円形であったと推測される。規模は東西20cm以上、南北30cm以上である。根固め石と礎石抜取り穴は確認されなかった。
- ・KS-532礎石跡 3区東壁で検出した。大広間落線の東辺に位置する。平面形はほぼ円形である。規模は東西127cm以上である。根固め石は確認されなかった。東西112cm以上、南北92cm以上の礎石抜取り穴を確認した。
- ・KS-533礎石跡 3区東部、KS-532の西約30cmで検出した。大広間広線の東辺に位置する。平面形は不整円形である。規模は東西135cm、南北155cmである。根固め石の大きさは径5~15cmである。東西95cm以上、南北32cm以上の礎石抜取り穴を確認した。
- ・KS-534礎石跡 3区中央部、KS-533の西約40cmで検出した。平面形は木の根があるため、一部のみの検出であるが、不整円形であったと推測される。規模は東西102cm以上、南北163cm径50cmである。根固め石の大きさは径5~15cmである。東西39cm以上、南北131cm以上の礎石抜取り穴を確認した。南隣接するKS-543と接している。
- ・KS-535礎石跡 3区中央部、KS-17の北約30cmで検出した。平面形は不整円形である。東西95cm以上、南北52cmの礎石抜取り穴である。掘り方と根固め石は確認されなかった。
- ・KS-210礎石跡 3区中央部、KS-535の西約1mで検出した。平面形は楕円形である。東西70cm、南北70cmの礎石抜取り穴である。掘り方と根固め石は確認されなかった。
- ・KS-536礎石跡 2区中央部、KS-210の西約1.4mで検出した。平面形は搅乱に大部分切られているが、楕円形であったと推測される。規模は東西47cm以上、南北28cm以上の礎石抜取り穴である。掘り方と根固め石は確認されなかった。
- ・KS-537礎石跡 2区中央部、KS-536の西約1.3mで検出した。平面形は楕円形である。規模は東西97cm、南北50cmである。根固め石は確認されなかった。東西65cm、南北30cmの礎石抜取り穴が確認された。
- ・KS-538礎石 2区中央部、KS-537の西約1.1mで検出した。加工の見られない楕円形の自然石で、長軸74cm以上、短軸71cm以上、厚さ30cmである。掘り方は東西100cm以上、南北95cm以上である。根固め石は確認されなかった。礎石上端の標高レベルは116.010mである。
- ・KS-539礎石跡 2区中央部、KS-538の西約3.4mで検出した。平面形は搅乱に大部分切られているが、円形であったと推測される。規模は東西16cm以上、南北44cm以上である。根固め石と礎石抜取り穴は確認されなかった。
- ・KS-540礎石跡 1・2区を挟む、KS-539の西約1.2mで検出した。平面形は楕円形である。規模は東西165cm、南北151cmである。根固め石の大きさは径5~20cmである。礎石抜取り穴は確認されなかった。
- ・KS-541礎石跡 3区東壁の西側で検出した。大広間落線の東辺に位置する。平面形は不整円形であったと推測される。東西25cm以上、南北95cm以上の礎石抜取り穴である。掘り方と根固め石は確認されなかった。
- ・KS-542礎石跡 3区東部、KS-541の西約60cmで検出した。大広間広線の東辺に位置する。平面形は不整円形である。規模は東西115cm以上、南北140cm以上である。根固め石は確認されなかった。東西95cm、南北121cmの礎

石抜取り穴を確認した。

・KS-543礎石跡 3区中央部、KS-542の西約10cmで検出した。平面形は不整円形である。規模は東西203cm、南北193cmである。根固め石の大きさは径5~15cmである。東西133cm、南北128cmの礎石抜取り穴を確認した。北に隣接するKS-534と接している。

・KS-17礎石跡 3区中央部、KS-543の西隣で検出した。平面形は不整円形である。規模は東西243cm、南北246cmである。根固め石の大きさは径5~20cmである。東西131cm、南北97cmの礎石抜取り穴を確認した。大広間跡で検出した礎石跡の中では最大規模のものである。

・KS-16礎石跡 3区中央部、KS-17の西約20cmで検出した。平面形は楕円形である。規模は東西149cm以上、南北242cmである。根固め石の大きさは径5~15cmである。東西124cm以上、南北40cm以上の礎石抜取り穴を確認した。

・KS-171礎石跡 2区南部、KS-16の西隣で検出した。平面形は楕円形である。規模は東西166cm以上、南北220cmである。根固め石の大きさは径5~20cmである。東西94cm以上、南北83cm以上の礎石抜取り穴を確認した。

・KS-544礎石跡 2区南部、KS-171の西隣で検出した。平面形はほぼ円形である。規模は東西188cm以上、南北208cmである。根固め石の大きさは径5~15cmである。東西54cm以上、南北84cm以上の礎石抜取り穴を確認した。

・KS-545礎石跡 2区南部、KS-544の西隣で検出した。平面形は不整円形である。規模は東西151cm以上、南北210cmである。根固め石の大きさは径5~15cmである。東西83cm以上、南北96cmの礎石抜取り穴を確認した。

・KS-546礎石跡 2区南部、KS-545の西隣で検出した。平面形は不整円形である。規模は東西128cm以上、南北193cm以上である。根固め石の大きさは径5~20cmである。東西90cm以上、南北110cm以上の礎石抜取り穴を確認した。

・KS-547礎石跡 2区南部、KS-546の西隣で検出した。平面形は搅乱に大部分切られているが、円形であったと推測される。規模は東西80cm以上、南北175cm以上である。根固め石の大きさは径5~20cmである。礎石抜取り穴は確認されなかった。

・KS-548礎石跡 1・2区を挟む、KS-547の西隣で検出した。平面形は不整円形である。規模は東西190cm以上、南北190cm以上である。根固め石の大きさは径5~15cmである。東西74cm以上、南北102cm以上の礎石抜取り穴を確認した。

・KS-549礎石跡 3区東壁西側で検出した。大広間落縁の東辺に位置する。平面形は楕円形であったと推測される。規模は東西19cm以上、南北60cm以上の礎石抜取り穴である。掘り方と根固め石は確認されなかった。

・KS-550礎石跡 3区東部、KS-549の西約60cmで検出した。大広間広縁の南東角に位置する。平面形は不整円形である。規模は東西110cm、南北95cm以上である。根固め石は確認されなかった。東西32cm以上、南北50cm以上の礎石抜取り穴を確認した。

・KS-18礎石跡 3区南部、KS-550の西約70cmで検出した。大広間広縁の南辺に位置する。平面形は不整円形である。規模は東西116cm、南北91cmの礎石抜取り穴である。掘り方と根固め石は確認されなかった。

・KS-230礎石跡 3区南部、KS-18の西約1.3mで検出した。大広間広縁の南辺に位置する。平面形は不整円形である。規模は東西77cm以上、南北106cm以上である。根固め石の大きさは径5~15cmである。東西58cm以上、南北58cm以上の礎石抜取り穴を確認した。

・KS-170礎石跡 3区南部、KS-230の西約1.2mで検出した。大広間広縁の南辺に位置する。平面形は不整円形である。規模は東西158cm、南北187cm以上である。根固め石の大きさは径5~20cmである。東西126cm、南北127cmの礎石抜取り穴を確認した。北に隣接するKS-16に切られるが、構築時期に差はないと考えられる。

・KS-172礎石跡 2区南部、KS-170の西約1.1mで検出した。大広間広縁の南辺に位置する。平面形は不整円形である。規模は東西134cm以上、南北97cm以上である。根固め石の大きさは径5~15cmである。東西90cm、南北57cmの礎石抜取り穴を確認した。

- ・KS-551礎石 2区南部、KS-172の西約40cmで検出した。大広間広縁の南辺に位置する。加工の見られない方形の自然石で、長軸68cm、短軸57cm、厚さ13cm以上である。掘り方は東西168cm、南北160cm以上である。根固め石は確認されなかった。礎石上端の標高レベルは115.794mである。
- ・KS-552礎石跡 2区南部、KS-551の西隣で検出した。大広間広縁の南辺に位置する。平面形は楕円形である。規模は東西220cm、南北150cm以上である。根固め石と礎石抜取り穴は確認されなかった。
- ・KS-553礎石跡 2区南部、KS-552の西約20cmで検出した。大広間広縁の南辺に位置する。平面形は一部のみの検出であるが、ほぼ円形であったと推測される。規模は東西40cm以上、南北90cm以上である。根固め石と礎石抜取り穴は確認されなかった。
- ・KS-554礎石跡 2区南部、KS-547の南約20cmで検出した。大広間広縁の南辺に位置する。平面形は搅乱に大部分切られているが、不整円形であったと推測される。規模は東西97cm以上、南北43cm以上である。根固め石と礎石抜取り穴は確認されなかった。
- ・KS-555礎石跡 1・2区を挟む、KS-554の西約60cmで検出した。平面形は搅乱に大部分切られているが、不整円形であったと推測される。規模は東西180cm以上、南北40cm以上である。根固め石と礎石抜取り穴は確認されなかった。
- ・KS-556礎石跡 3区南部、KS-550の南約80cmで検出した。大広間落縁の南辺に位置する。平面形は一部のみの検出であるが、不整円形であったと推測される。規模は東西120cm以上、南北20cm以上である。根固め石は確認されなかった。東西110cm以上、南北10cm以上の礎石抜取り穴を確認した。

## (2) その他の近世と考えられる遺構

先述した以外の近世と考えられる遺構を一括して扱う。遺構中の埋土が硬く締まっており、近世の可能性がある。検出面はⅢb層上面である。

- ・KS-557 3区西部より検出した。平面形は楕円形である。規模は東西52cm、南北40cm以上である。
- ・KS-558 3区北部より検出した。平面形はKS-7・20に切られているが、ほぼ円形である。規模は東西45cm以上、南北35cm以上である。KS-7・20より古い。
- ・KS-559 3区北東部より検出した。平面形は楕円形である。規模は東西31cm以上、南北31cmである。
- ・KS-560 3区北東部より検出した。平面形は円形である。規模は東西26cm、南北26cmである。
- ・KS-561 3区北部より検出した。平面形は円形である。規模は東西21cm、南北20cmである。
- ・KS-562 2区北部より検出した。平面形は不整円形である。規模は東西45cm、南北20cmである。KS-511・512より新しい。
- ・KS-563 2区北東部より検出した。平面形は円形である。規模は東西55cm、南北54cmである。KS-513より新しい。
- ・KS-564 2区西部より検出した。平面形は円形である。規模は東西27cm、南北21cm以上である。
- ・KS-565 2区北部より検出した。平面形は円形である。規模は東西23cm以上、南北52cmである。
- ・KS-566 1区北東部より検出した。平面形は円形である。規模は東西26cm以上、南北83cm以上である。
- ・KS-567 1区北東部より検出した。平面形は円形である。規模は東西12cm、南北24cmである。
- ・KS-568 2区北部より検出した。平面形は円形である。規模は東西18cm以上、南北20cmである。
- ・KS-569 1区北部より検出した。平面形は楕円形である。規模は東西94cm、南北65cmである。
- ・KS-570 1区北東部より検出した。平面形は不整円形である。規模は東西46cm、南北45cmである。1.4m東側に加工が見られない長軸50cm、短軸30cmの扁平な石材1点を検出した。東石に使われていた可能性が考えられる。
- ・KS-571 1区西部より検出した。平面形は不整円形である。規模は東西60cm以上、南北12cm以上である。

- ・KS-572 1区北部より検出した。平面形は円形である。規模は東西16cm以上、南北30cmである。
- ・KS-573 1区北東部より検出した。平面形は円形である。規模は東西21cm、南北25cmである。
- ・KS-574 1区北東部より検出した。平面形は楕円形である。規模は東西41cm、南北46cm以上である。
- ・KS-575 1区北部より検出した。平面形は円形である。規模は東西32cm、南北30cmである。
- ・KS-576 1区北部より検出した。平面形は大部分を搅乱に切られているが、ほぼ楕円形である。規模は東西54cm、南北58cmである。KS-577より新しい。
- ・KS-577 1区北東部より検出した。平面形は大部分を搅乱に切られているが、ほぼ円形である。規模は東西65cm以上、南北21cm以上である。KS-576より古い。
- ・KS-578 1区北部より検出した。平面形は大部分を搅乱に切られているが、ほぼ円形である。規模は東西20cm以上、南北30cm以上である。
- ・KS-579 3区北東部、KS-522の北側で断面のみ検出した。規模は上幅14cm以上、深さ32cmである。

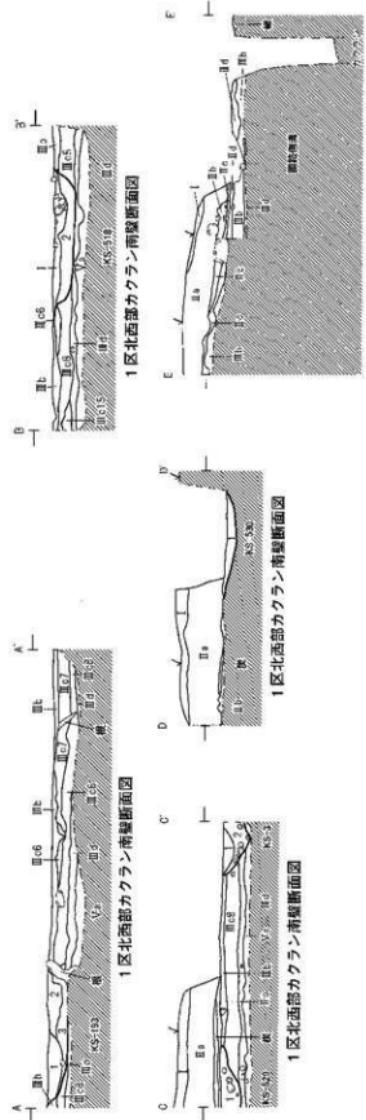
#### (3) 大広間に先行する遺構

- ・KS-580 3区南部より検出した。検出面はV層上面である。平面形は楕円形であると推測される。規模は東西70cm以上、南北15cm以上である。
- ・KS-581 磯石 3区南部、KS-18の南西で磯石と考えられる遺構を1基検出した。検出面はV層上面である。磯石は加工の見られない隅丸方形の自然石で、長軸62cm、短軸38cm、厚さ20cm以上である。掘り方は東西75cm、南北60cm以上である。根固め石は確認されなかった。磯石上端の標高レベルは115.572mである。  
遺構の構築順序は、地山（V層）上面から掘りこまれた掘り方に磯石を据えた後、地山の土で埋めている。磯石上面レベルを見ると、大広間南側の磯石群に比べ約20cm低く、大広間の整地層より下層で検出していることから、大広間に先行するものと考えられる。
- ・KS-582 3区南部、KS-581の東約1.1mで検出した。検出面はIIc5層上面である。平面形は円形であったと推測される。規模は東西53cm、南北21cm以上である。
- ・KS-583 3区南部、KS-581の西約1.5mで検出した。検出面はV層上面である。平面形は円形であったと推測される。規模は東西65cm以上、南北30cm以上である。
- ・KS-584 1区南部より断面のみ検出した。規模は上幅132cm、深さ14cm以上である。
- ・KS-585 1区南部より断面のみ検出した。規模は上幅94cm、深さ28cmである。搅乱溝の両側で確認され、同一遺構の可能性が考えられる。
- ・KS-586 2区北部より断面のみ検出した。規模は上幅113cm、深さ44cmである。搅乱溝の両側で確認され、同一遺構の可能性が考えられる。埋土中より放射性炭素年代測定用サンプルを1点採取した。その結果、層年代補正値で概ね紀元前4～5世紀の年代が得られた（5. 理化学分析参照）。埋土中から近世期と思われる瓦片が1点出土した。  
KS-514より古い。
- ・KS-587 2区北部より断面のみ検出した。規模は上幅102cm、深さ18cmである。
- ・KS-588 2区北部より断面のみ検出した。規模は上幅43cm、深さ14cmである。

#### (4) 近代遺構

- ・轍跡 1区から2区にかけて36条検出した。検出面はIId層上面およびIIId層上面の2面である。おもに南西から北東方向に延びている。規模は、長さ約40cm～3m、上端幅10～15cmである。

第14圖 第20次調查 1區斷面圖 ( $1/50 \cdot SL=116m$ )

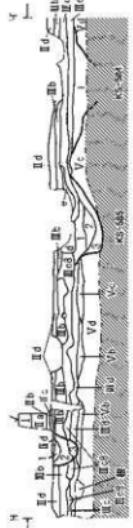


### 1区中央部カクラン壁断面図

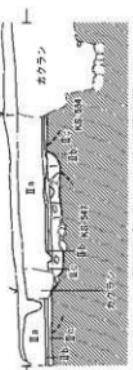
第5表 十層注記表



1区南東部カクラン南壁断面図



1区北東部カクラン南壁断面図



2区北東部カクラン南壁断面図

第15回 第20次調査 1・2区断面図 (1/50・SI=116m)

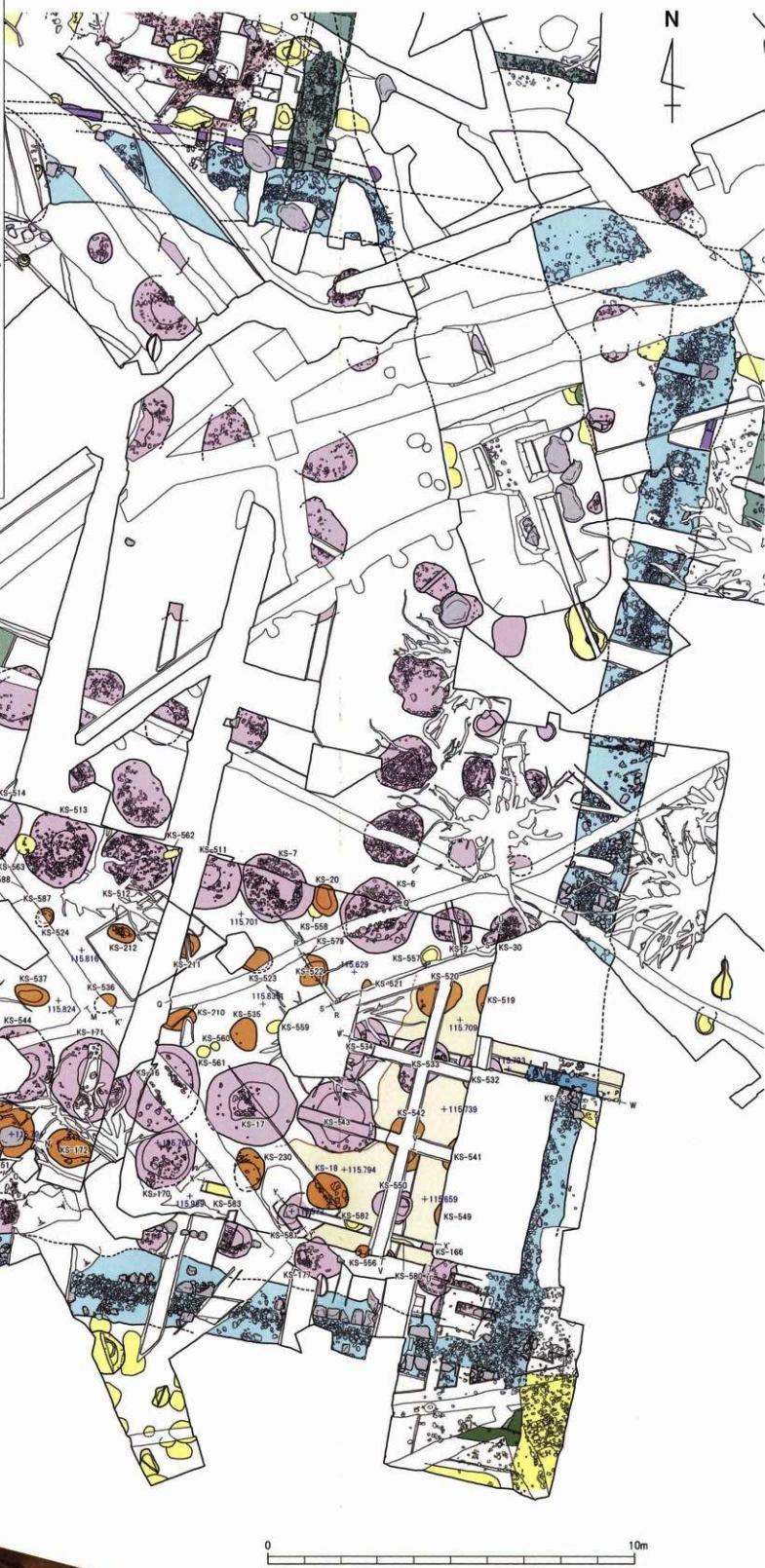
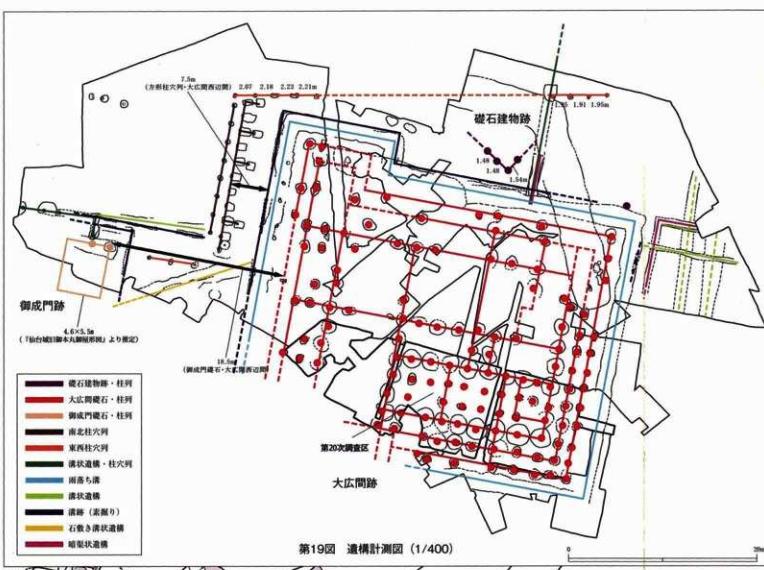
第6表 土層記述表

地層番号	地層名	土壤	土質			固 定	固 定	固 定	固 定	固 定	固 定
			土質	土質	土質						
1	23Y57.2	褐色	褐色	褐色	褐色	シルト	粘	粘	粘	粘	粘
U.a	23Y56.3	二つの黑色				粘土	干	干	干	干	干
U.b	10Y57.4	褐色	褐色	褐色	褐色	シルト	干	干	干	干	干
U.c	10Y56.2	褐色	褐色	褐色	褐色	シルト	干	干	干	干	干
U.d	73Y57.0	褐色	褐色	褐色	褐色	シルト	干	干	干	干	干
U.e	09Y56.6	褐色	褐色	褐色	褐色	粘土	干	干	干	干	干
U.f	10Y57.6	灰色	灰色	灰色	灰色	粘土	干	干	干	干	干
U.g	10Y57.4	灰色	灰色	灰色	灰色	粘土	干	干	干	干	干
U.h	73Y57.8	褐色	褐色	褐色	褐色	粘土	干	干	干	干	干
U.i	73Y57.5	褐色	褐色	褐色	褐色	粘土	干	干	干	干	干
V.a	23Y57.2	褐色	褐色	褐色	褐色	粘土	干	干	干	干	干
V.b	10Y57.4	二つの褐色	褐色	褐色	褐色	シルト	干	干	干	干	干
V.c	73Y57.0	褐色	褐色	褐色	褐色	シルト	干	干	干	干	干
V.d	09Y56.6	褐色	褐色	褐色	褐色	シルト	干	干	干	干	干
V.e	10Y57.6	褐色	褐色	褐色	褐色	粘土	干	干	干	干	干
V.f	10Y57.4	灰色	灰色	灰色	灰色	粘土	干	干	干	干	干
V.g	73Y57.8	褐色	褐色	褐色	褐色	粘土	干	干	干	干	干
V.h	73Y57.5	褐色	褐色	褐色	褐色	粘土	干	干	干	干	干
K.S.317	1	10Y57.5	褐色	褐色	褐色	シルト	干	干	干	干	干
K.S.366	2	10Y57.1	二つの褐色	褐色	褐色	シルト	干	干	干	干	干
K.S.468	1	9H1.1	10Y57.6	褐色	褐色	シルト	干	干	干	干	干
K.S.480	1	73Y57.1	褐色	褐色	褐色	シルト	干	干	干	干	干
K.S.578	1	10Y57.8	褐色	褐色	褐色	シルト	干	干	干	干	干
K.S.579	1	10Y57.6	褐色	褐色	褐色	シルト	干	干	干	干	干
K.S.585	1	10Y57.3	二つの褐色	褐色	褐色	シルト	干	干	干	干	干
K.S.586	1	10Y57.1	10Y57.1	褐色	褐色	シルト	干	干	干	干	干
K.S.587	1	23Y57.4	褐色	褐色	褐色	シルト	干	干	干	干	干
K.S.588	1	10Y57.5	褐色	褐色	褐色	シルト	干	干	干	干	干
K.S.589	2	10Y57.6	褐色	褐色	褐色	シルト	干	干	干	干	干
K.S.590	2	10Y57.6	褐色	褐色	褐色	シルト	干	干	干	干	干









調査区平面合成写真 (1/100)

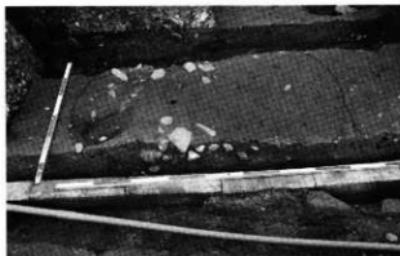
第20図 第20次調査全体構造平面図 (1/100)



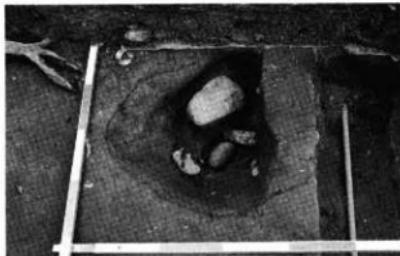
1区 全景（北から）



1区 KS-193検出状況（南から）



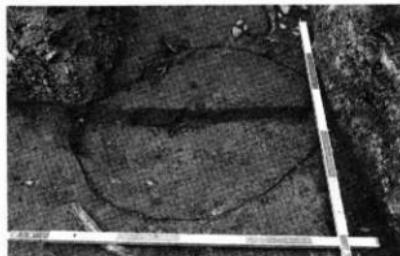
1区 KS-518検出状況（北東から）



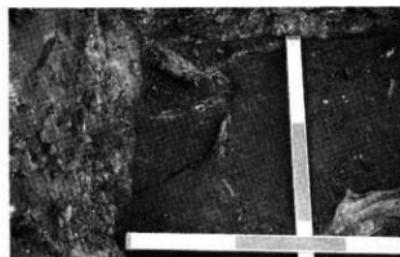
1区 KS-3検出状況（南東から）



1区 KS-529検出状況（南西から）



1区 KS-530検出状況（北西から）



1区 KS-531検出状況（南東から）

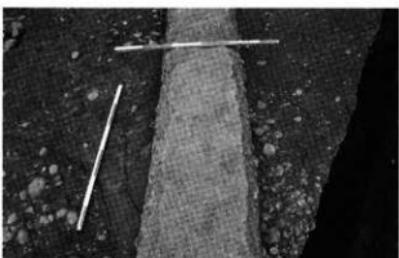


1区 KS-480検出状況（南西から）

第21図



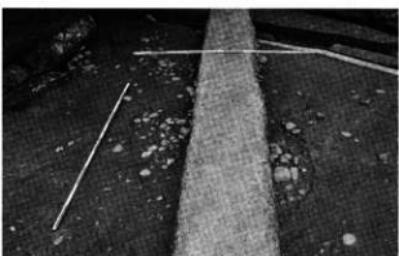
1・2区 Aベルト付近遺構検出状況（北から）



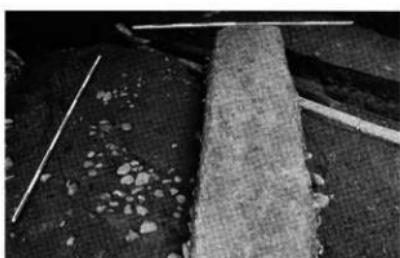
1・2区 KS-517検出状況（北から）



1・2区 KS-528検出状況（北から）



1・2区 KS-528検出状況（北から）



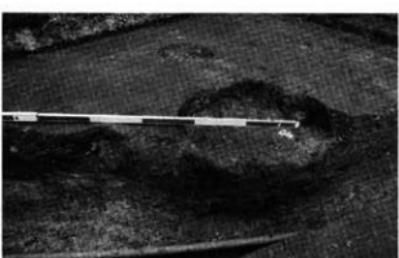
1・2区 KS-548検出状況（北から）



1・2区 KS-555検出状況（北から）



1区 KS-576検出状況（東から）



1区 KS-585検出状況（北東から）

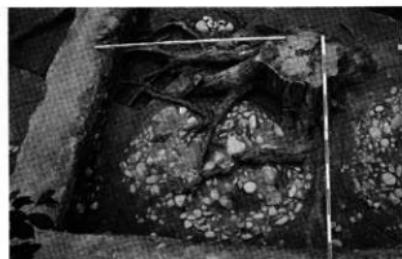
第22図



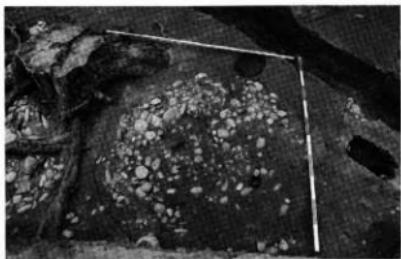
2区 全景（東から）



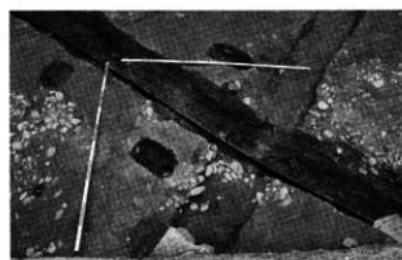
2区 全景（北から）



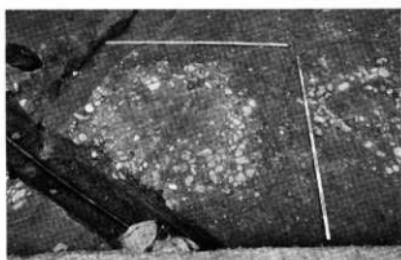
2区 KS-512検出状況（北から）



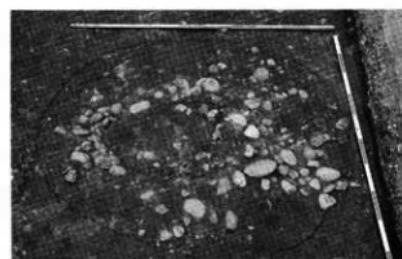
2区 KS-513検出状況（北から）



2区 KS-514・563・564検出状況（北から）



2区 KS-515検出状況（北から）

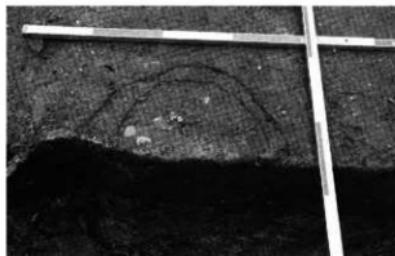


2区 KS-516検出状況（北から）

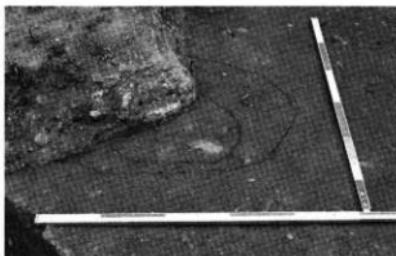


2区 KS-212検出状況（南から）

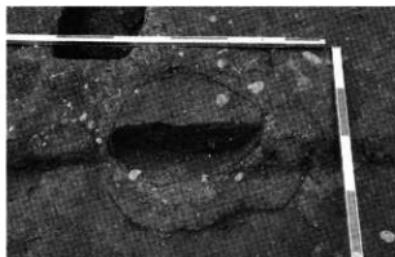
第23図



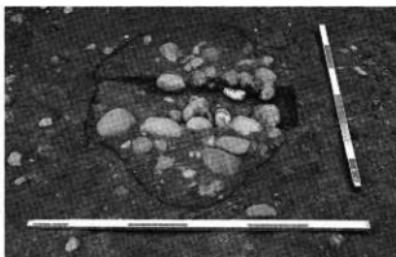
2区 KS-524検出状況（南西から）



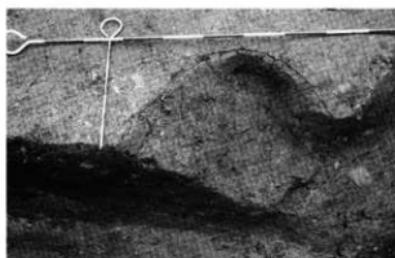
2区 KS-525検出状況（北から）



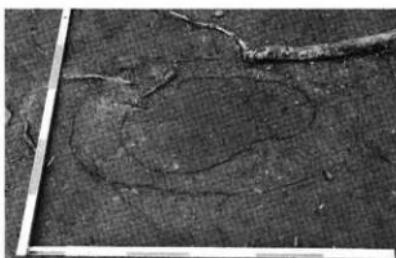
2区 KS-526検出状況（北西から）



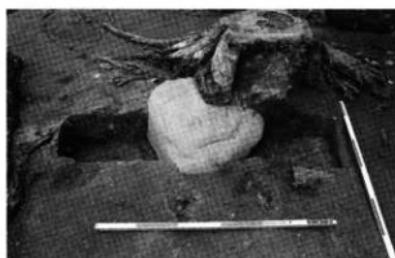
2区 KS-527検出状況（北から）



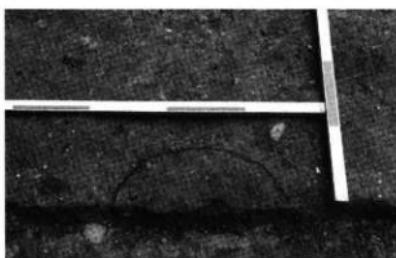
2区 KS-536検出状況（南から）



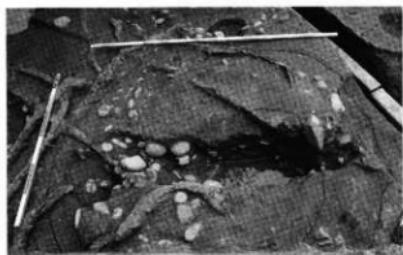
2区 KS-537検出状況（北から）



2区 KS-538検出状況（北西から）



2区 KS-539検出状況（南東から）



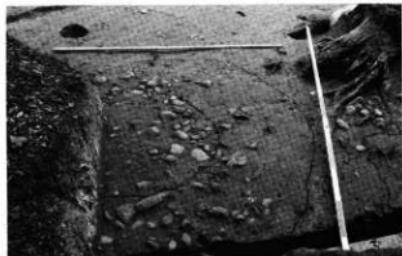
2区 KS-171検出状況（東から）



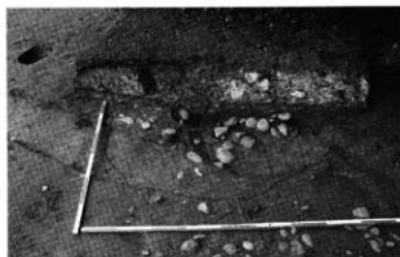
2区 KS-544検出状況（北から）



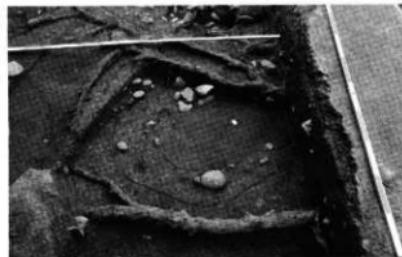
2区 KS-545検出状況（北から）



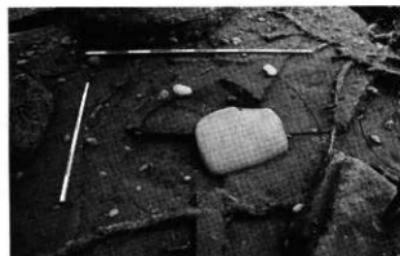
2区 KS-546検出状況（南から）



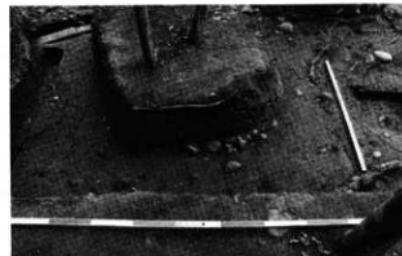
2区 KS-547検出状況（西から）



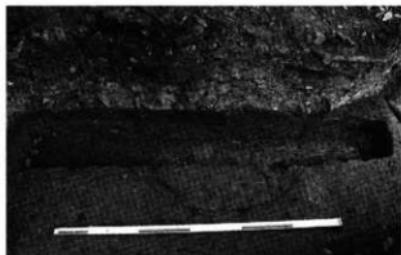
2区 KS-172検出状況（南から）



2区 KS-551検出状況2（南から）



2区 KS-552検出状況（南から）



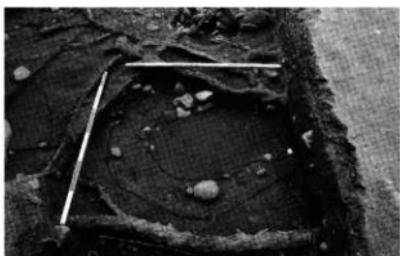
2区 KS-553検出状況（東から）



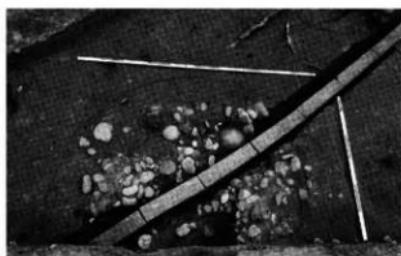
2区 KS-554検出状況（南西から）



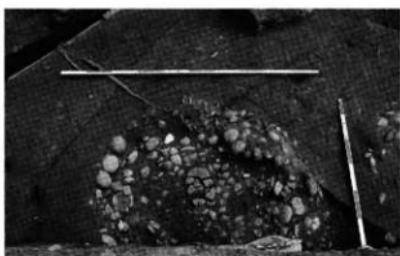
3区 全景（東から）



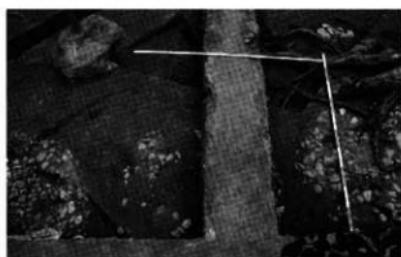
3区 KS-2検出状況（東から）



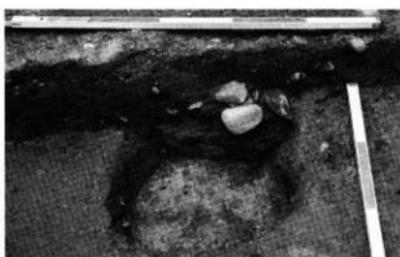
3区 KS-6検出状況（北から）



3区 KS-7検出状況（北から）

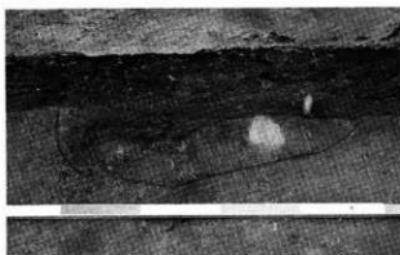


3区 KS-511検出状況（北から）

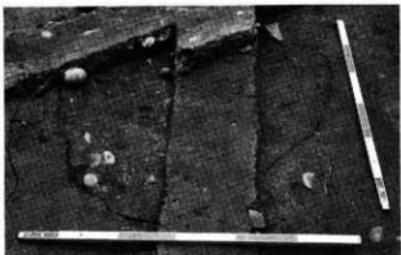


3区 KS-557検出状況（北から）

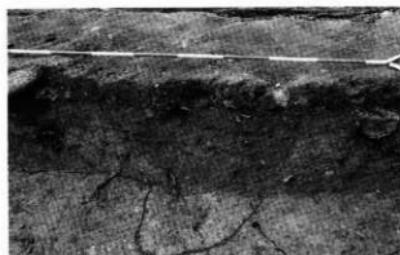
第26図



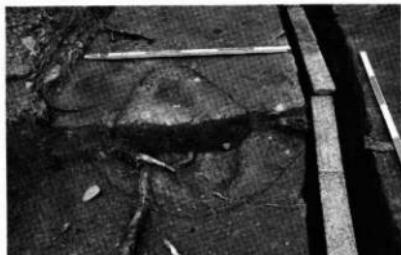
3区 KS-519検出状況（西から）



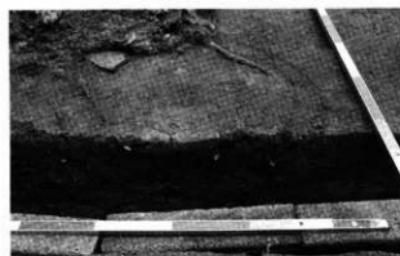
3区 KS-520検出状況（南から）



3区 KS-521検出状況（北西から）



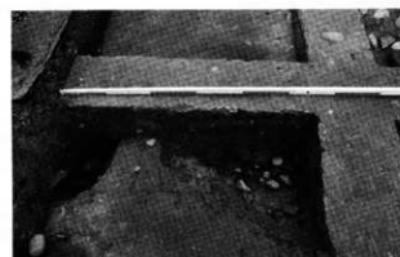
3区 KS-522検出状況（北東から）



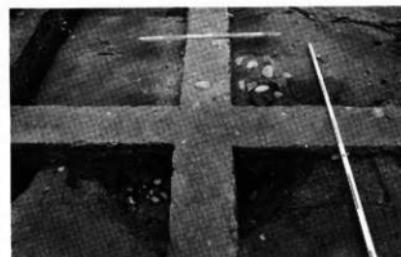
3区 KS-523検出状況（南東から）



3区 KS-211検出状況（南から）



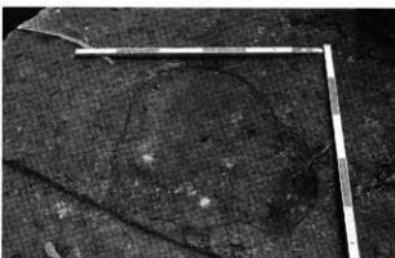
3区 KS-532・533断面状況（北から）



3区 KS-533検出状況（北から）



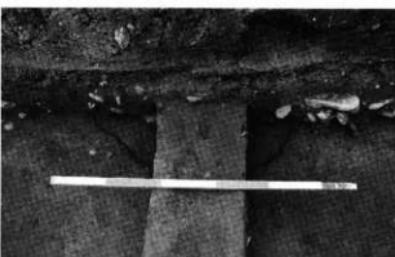
3区 KS-534検出状況（北から）



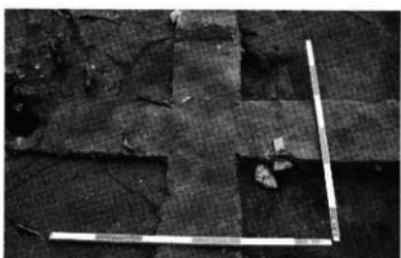
3区 KS-535検出状況（南から）



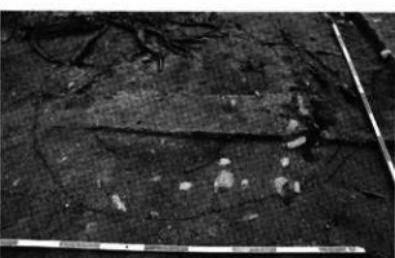
3区 KS-210検出状況（南から）



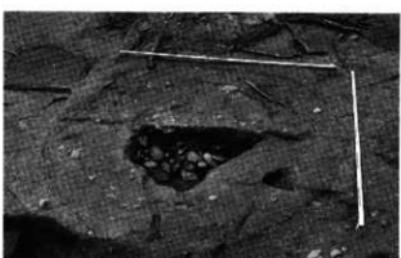
3区 KS-541検出状況（西から）



3区 KS-542検出状況（南から）



3区 KS-543検出状況（南から）

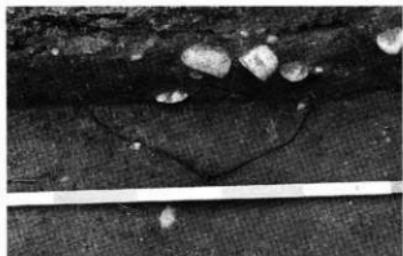


3区 KS-17検出状況（南東から）

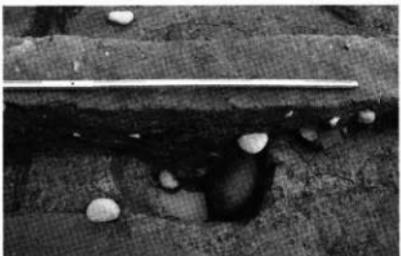


3区 KS-16検出状況（南から）

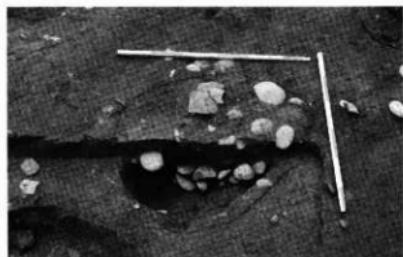
第28図



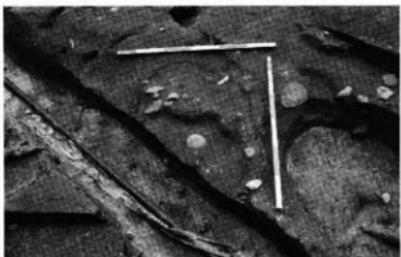
3区 KS-549検出状況（西から）



3区 KS-550検出状況（東から）



3区 KS-18検出状況（南から）



3区 KS-230検出状況（南から）



3区 KS-170検出状況（南から）



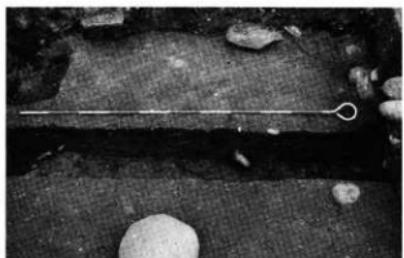
3区 拡張部南壁全景（北東から）



3区 下層造溝検出状況（東から）



3区 KS-581検出状況（南から）



3区 KS-580検出状況（北から）



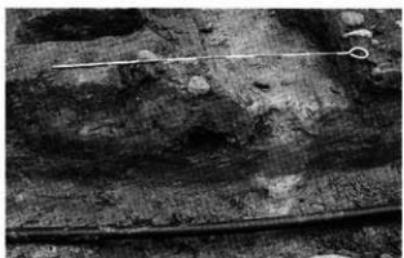
3区 KS-582検出状況（北から）



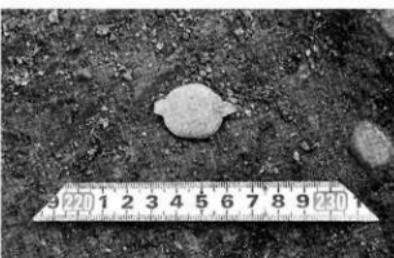
3区 KS-583検出状況（南から）



1・2区 近代轍路検出状況（北東から）



2区 土壌サンプル（C-1）採取地点（北東から）



3区 II層全銅金具（No.4）出土状況



3区 作業風景（北から）



遭難見学会風景（南東から）

第30図

#### 4. 出土遺物

##### (1) 陶磁器他 (第10表)

###### ① 磁器・陶器

磁器は26点、陶器は22点出土した。ほとんどが表土・搅乱・近代以降の盛土層からの出土である。いずれも小片で器種、年代等詳細のわかるものは少ない。I層より出土した大堀相馬産の掛け分け碗(18c)1点を図示した(第31図1)。KS-532の埋土からは中世の常滑産の陶器片1点出土した(第32図2c)。

###### ② 土師質土器

上部質土器は13点出土した。いずれも口径・底径の復元が不可能な小片である。ほとんどがII層から出土した。

##### (2) 金属製品 (第11表)

金属製品は金銅金具、銅製飾金具、銅釘、銭貨、鉄釘、鏡などが出土地している。

###### ① 金銅金具・銅製飾金具

今回の調査では、金銅金具1点、銅製飾金具1点が出土しており、本丸大広間跡間連調査での篠じ金具の全出土点数は132点である。2点とも図示した。第31図2は、鍍金が残り、地金に蹴彫り(先が直線状の鑿を打込み、その横形の打痕の連続を線状に見せる彫金技法)によって花弁の輪郭とみられる線彫りが施されている。中央の芯には魚々子打ち(魚卵状の小さな粒の詰打ち)が施されている。両端には先の鋸い突起が付いている。第31図3は、細い針金状の銅線で加飾しており、中空の突起が三つみられる。鍍金は認められない。

###### ② 銅釘

今回の調査では26点出土しており、本丸大広間跡間連調査での全出土点数は957点である。これまでと同様、頭部形状の違いに基づき分類した。I類(角)1点、II類(丸)2点、III類(平丸)15点、IV類(不整形)7点、X類(形状不明)1点である。I~IV類を種類別に図示した(第31図4~8)。全長は、I類が15mm、II類が11mm、III類が26~30mm、IV類が17~26mmである。IV類は比較的ばらつきが大きいが、20mm以下のものが多い。これは、かつて行った分析結果と同じ傾向を示している。詳しくは、16年度に刊行した「仙台城跡5」出土遺物銅釘の項および考察を参照されたい。銅釘の分類基準についても同報告書に準拠している。

###### ③ 銭貨

5点出土した。明治以降の一銭銅貨3点、五銭銅貨1点、不明1点で、いずれもII層から出土している。

###### ④ 鉄釘

20点出土した。ほとんどがII層から出土している。うち2点を図示した(第32図7・8)。

###### ⑤ 鏡

3点出土した。うち1点を図示した(第32図6)。

第10表 第20次調査出土陶磁器他数量表

遺構・層位	出目	出目	出目	出目	計
複合	2	4	1	9	14
複合	1	2	1	1	4
I	9	3	1	7	10
IIa	2	1	1	1	4
IIb	1	1	1	1	4
IIc	3	12	1	1	15
IId	3	2	1	2	7
近代跡壁上		1		1	1
IIa	1				1
IIb		1			1
III			1	1	1
KS-532埋土2			1	1	1
計	26	22	13	61	

第11表 第20次調査出土金属製品数量表

遺構・層位	金銅金具	銅製飾金具	銅釘					その他 金屬製品	銭貨	鉄釘	鏡	その他 金屬製品	計
			Ia	IIa	IIb	III	IV						
複合								1				3	3
複合	1	1	1	1	1	9	3	1	7	3	9	2	108
I								1					147
IIa													2
IIc													1
IId													13
IIa								2	1	9		1	21
IIb								1		1		1	3
III								7	2	1			1
KS-17W.LL											1		1
KS-531埋土上								1				5	6
計	1	1	1	1	1	16	6	1	13	5	20	3	130

(3) 瓦 (第12表)

瓦は総計1,959点出土し、このうち丸瓦が459点、平瓦が1,417点で併せて全体の96%を占める。また、出土層位別では挽乱や近代以降の盛上層や遺構から出土したものが圧倒的に多い。

①軒丸瓦

19点出土した。瓦当文様の判別可能なものは12点あり、九曜文3点、三巴文2点、珠文三巴文6点、無文1点である（第31図9～11）。

②軒平瓦

軒平瓦は6点出土した。主文様の判別可能なものは3点であり、枯梗文3点、三葉文2点である（第31図12・13）。また、滴水瓦は2点出土した。瓦当文様の判別可能なものは3点あり、菊花文の滴水瓦が出土している（第31図14）。文様が不明の滴水瓦1点出土した（第33図19）。

③軒棟瓦

4点出土した。瓦当文様は三巴文1点、無文3点である。

④棟瓦

25点出土した。冠伏間1点、丸棟伏間2点、角棟伏間2点、鶴斗瓦4点、輪違い7点、面戸瓦4点、菊丸4点、差し込み瓦1点が出土した。輪違い、面戸瓦を各1点図示した（第31図15・16）。

⑤飾瓦

3点出土した。鬼瓦2点、菊瓦1点である。

⑥平板

駒付平板2点、棟付平板10点が出土した。駒付平板、棟付平板を各1点図示した（第31図17・20）。

⑦壇瓦

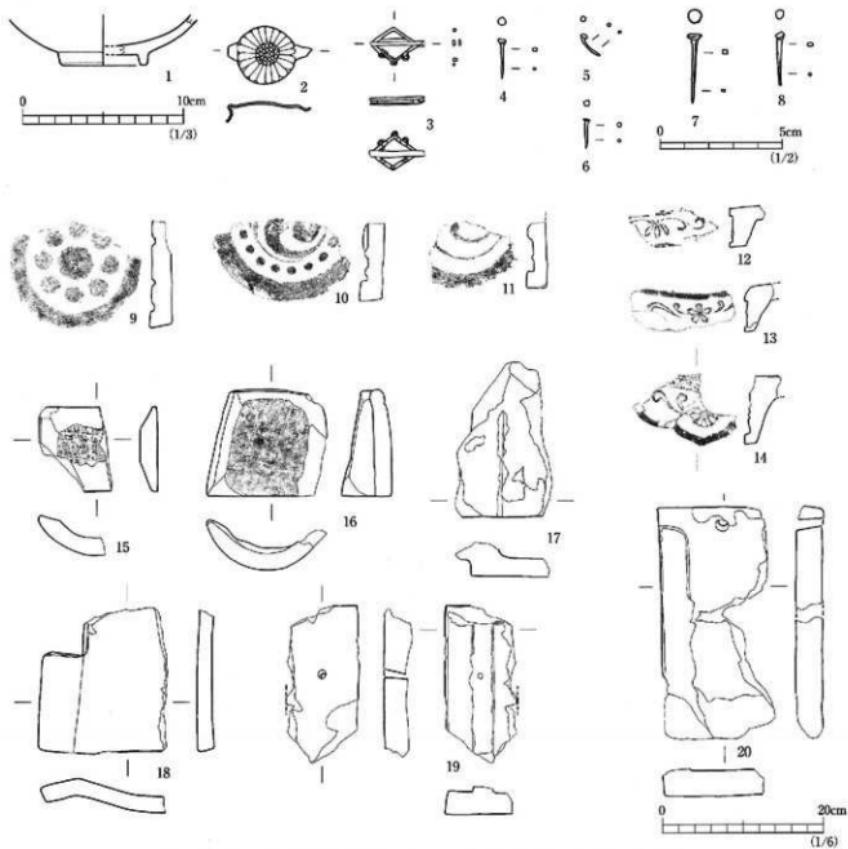
T字瓦1点が出土した（第31図19）。

⑧刻印瓦

刻印のある瓦は2点出土した（第32図29・30）。丸瓦と半瓦各1点である。30はこれまで確認されている明治期の瓦で、「仙台北（欠損）八番丁渡邊瓦工場明治廿六年」の刻印が見られる。

第12表 第20次調査出土瓦数量表

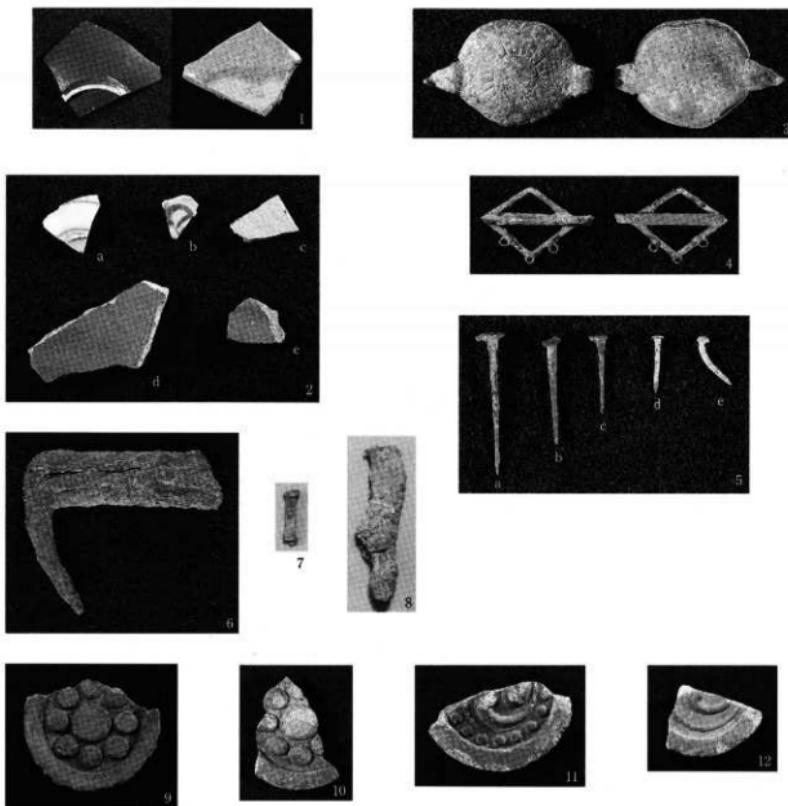
遺構・層位	丸瓦	平瓦	軒丸	軒平	滴水	角棟	丸棟	冠伏間	丸柱伏間	角柱伏間	鶴斗	輪違	面戸	差し込み	鬼瓦	菊瓦	T字瓦	駒付	丁子	不明	計
底床	31	69	2	2	1	1					1	1	1					2		1	112
I	60	154	2								1	1	1			3	2	1		2	217
II	244	984	8	4		2		1	1	3	3	5	2	2				7		6	1271
IIIa	20	30	3																		54
IIIb	50	114	2			1															167
IVd	54	29	2	1		1										1	1			1	90
Va	4	17					1														22
Vb		5																			4
KS-37廻上		1																			1
KS-532廻上		3																			3
KS-533廻上	2	3																			5
KS-530P廻上	4	8																			12
KS-366廻上		1																			1
計	459	1417	49	7	2	4	1	1	2	2	4	7	4	3	1	2	1	2	10	1	91969



第31図 第20次調査出土遺物 (1 : S=1/3 2~8 : S=1/2 9~20 : S=1/6)

第13表 第20次調査出土遺物観察表

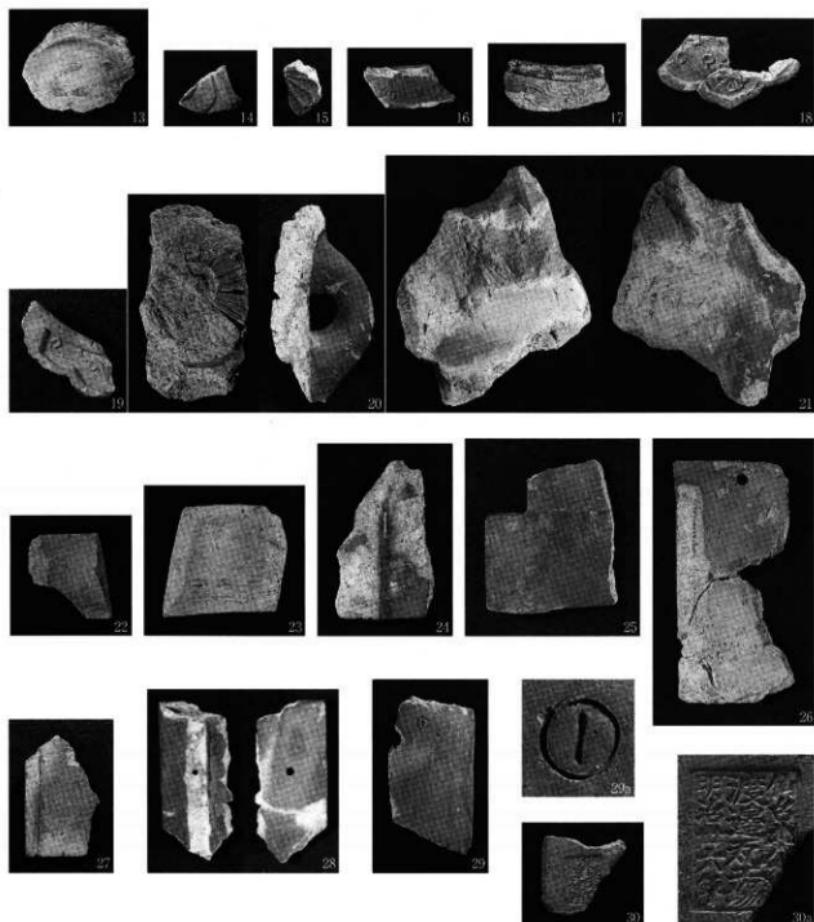
番号	種類	遺物番号	遺物名・部位	法長 (mm・g)	備考	写真
1	陶器	119	I	L1径 (-) 高さ (31) 細径 (56)	印17分17號 大輪鉢高 18c 外面鉢脚 内面底脚 壁有露粉	1
2	金銀合具	4	II	全長34 頭幅4.5 底幅3.5	21分の春花 魚々子打ち	3
3	銅鋳鑄合具	25	II d	全長 (22) 背15 厚さ0.5~1	銅板状	4
4	刮削	1	-	全長15.7 鋸歯幅5.5 刮削部太さ1.2 重量0.14	頭部形状角 I a頭	5c
5	刮削	21	II	全長17.5 鋸歯幅2.4 刮削部太さ1.2 重量0.10	頭部形状丸 II a頭	5e
6	刮削	34	II d	全長11.5 鋸歯幅2.4 刮削部太さ1.2 重量0.07	頭部形状丸 II b頭	5d
7	刮削	63	Ⅲ上面	全長28.5 鋸歯幅 (5.8) 刮削部太さ2.0 重さ0.45	頭部形状丸 II 類似頭	5a
8	刮削	132	II a	全長20.2 鋸歯幅4.3 刮削部太さ1.9 重さ0.26	頭部形状不規則IV頭	5b
9	片瓦 (丸窓)	222	II	瓦当径 (13) 瓦筋幅20 重量 (603.6)		9
10	片瓦 (丸窓-二口)	228	II a	瓦当径 (9.5) 瓦筋幅24 内区幅 (70) 瓦筋35 重量510.6		11
11	片瓦 (二口)	6	II	瓦当径 (8.5) 瓦筋幅20 内区幅 (60) 重量198.7		12
12	片瓦 (二口)	12	II	瓦当径 (8.5) 重量155.5		16
13	片瓦 (桔梗)	143	枝取り穴上面	瓦当幅 (129) 重量236.9		17
14	清水瓦 (舟形)	161	II b	瓦当幅 (99) 重量28.4		18
15	圓瓦	369	I	全長 (83) 高さ21 重量214.2		22
16	筒造	54	II	全長 (122) 高さ21 重量517.4		23
17	楕円平板	234	II	W323 重量622.6		24
18	角純瓦	133	II a	厚さ20 重量76.0		25
19	丁字瓦	192	II	（箱）880 高さ30 斜六往山1 重量503.3		26
20	楕円平板	367	I	全長 (260) 高さ33 斜六往山16 重量1700		26



第32図 第20次調査出土遺物 (1・2:S=1/2 3~5:S=1/1 6~8:S=1/2 9~12:S=1/6)

第14表 20次調査出土遺物観察表

写真 番号	遺物 名	種類	遺物・部位	測量 (mm・g)	備考
2a 83	陶器	II			朱付鏡 肥前 18c?
2b 300	陶器	II			青花直 中間 16c末~17c前
2c 7	陶器	II			灰釉大鉢 (笠原鉢) 濱戸文造
2d 121	陶器	II			黒釉深鉢 美濃
2e 144	陶器	KS52地土2			変形直 常滑 中世 外面溝子ア 内面押印 (同心円状)
6 142	鏡	II			
7 305	銀釦	IIIa	全長 (41.3) 幅11.5 厚3.59 重畠7.65		
8 305	銀釦	IIIa	全長 (53.4) 重畠17.9		
10 233	新丸瓦 (丸瓦)	II	瓦古井 (134) 文様瓦 (1127) 瓦跡幅22.1 重畠40.3		



第33図 第20次調査出土遺物 (S=1/6 29a・30a : S=1/2)

第15表 第20次調査出土遺物観察表

番号	遺物 番号	測量・部位	計量 (mm・g)	備考
13	306	背丸瓦 (側文)	II 瓦当径 (166) 歪縫幅18 重量291.3	
14	22	背丸瓦	II 瓦当径 (74) 重量62.5	
15	254	背丸瓦	II 瓦当径 (66) 重量63.9	
19	67	筒手瓦	深底322.3	
20	27	飾弓瓦	I 裏幅12.00	側文
21	28	曲弓瓦	II 裏幅31.90	
27	235	平瓦	II 全長 (147) 幅 (89) 厚 5.25 重量402.7	本切有
29	333	瓦瓦	II 全長 (187) 幅 (107) 厚 5.23 重量611.2	網印
30	164	平瓦	深底 (92) 幅 (101) 厚 5.23 重量207.3	刻印「肱台北八番」(欠頭) 流通瓦工場明治廿六年

## 5. 理化学分析

### 放射性炭素年代測定

放射性炭素年代測定は、株式会社加速器分析研究所に委託した。

第20次調査 2区搅乱南壁Ⅲ層中より採取した土壤サンプル1点についてAMSによる放射性炭素年代測定を行った。2区搅乱の南壁Ⅲ層はその堆積状況から近世整地層の下層であると判断したが、近世の人为的堆積層かそれ以前の自然堆積層かを明らかにするため、考古学的手法のみならずその年代決定にはあらゆる手段を用いるべきとの判断から実施したものである。

#### 1 測定対象試料

測定対象試料は、2区搅乱南壁Ⅲ層の土壤中の木片（No.C-1 : IAAA-82100）の1点である。

#### 2 化学処理工程

- ①メス・ピンセットを使い、根・上等の表面的な不純物を取り除く。乾燥後、譜がけを行ない、さらに細かな不純物を取り除く。
- ②酸処理 (HCl) により内面的な不純物を取り除く。
- ③試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500°Cで30分、850°Cで2時間加熱する。
- ④液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用して、真空ラインで二酸化炭素 (CO<sub>2</sub>) を精製する。
- ⑤精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水蒸気で還元）し、グラファイトを作製する。
- ⑥グラファイトを内径1mmのカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

#### 3 測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx II）を標準試料とする。この標準試料とバッケグラウンド試料の測定も同時に実施する。

#### 4 算出方法

- ①年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polash 1977）。
- ②14C年代（Libby Age : yrBP）は、過去の大気中14C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として測る年代である。この値は、δ<sup>13</sup>Cによって補正された値である。14C年代と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、14C年代の誤差（±1σ）は、試料の14C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- ③δ<sup>13</sup>Cは、試料炭素の<sup>13</sup>C濃度（<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C）を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰）で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>Cを測定した場合には表中に（AMS）と注記する。
- ④pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の14C濃度の割合である。
- ⑤曆年較正年代とは、年代が既知の試料の14C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の14C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。曆年較正年代は、14C年代に対応する較正曲線上の曆年年代範囲であり、1標準偏差（1σ = 68.2%）あるいは2標準偏差（2σ = 95.4%）で表示される。曆年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない14C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データ

タの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、曆年較正年代の計算に、Int Cal04データベース (Reimer et al 2004) を用い、OxCal4.0較正プログラム (Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001) を使用した。

## 5 測定結果

大広間跡2区擾乱南壁のⅢ層の土壤 (No.C-1) の<sup>14</sup>C年代は $2300 \pm 30$ yrBPである。曆年較正年代 ( $\sigma$ ) は、402 ~365BCである。

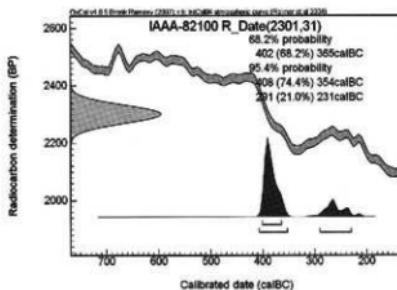
測定対象は土壤であり、盛土が構築された年代を直接的に示すものではないため、調査所見と照合して解釈する必要がある。試料の炭素含有率は0.6%であり、有機物の豊富な土壤とは言えない。二次的な炭素の混入がなければ、土壤自体の由来、つまり土壤が本来帰属した地層の年代を示すと考えられる。近世の盛土であったとしても、盛土を構成する土壤自体は、弥生時代に形成された地層からもたらされたと解釈される。

測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理 方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
					Libby Age (yrBP)	pMC (%)	
IAAA-82100	No.C-1	大広間跡2区擾乱南壁Ⅲ層	土壤	HCl	-24.74 ± 0.78	2,300 ± 30	75.09 ± 0.30

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		曆年較正用 (yrBP)	$1\sigma$ 曆年代範囲	$2\sigma$ 曆年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-82100	2,300 ± 30	75.13 ± 0.27	2,301 ± 31	402BC-365BC (68.2%)	408BC-354BC (74.4%) 291BC-231BC (21.0%)

[参考値]



第34図 曆年較正年代グラフ

## 参考文献

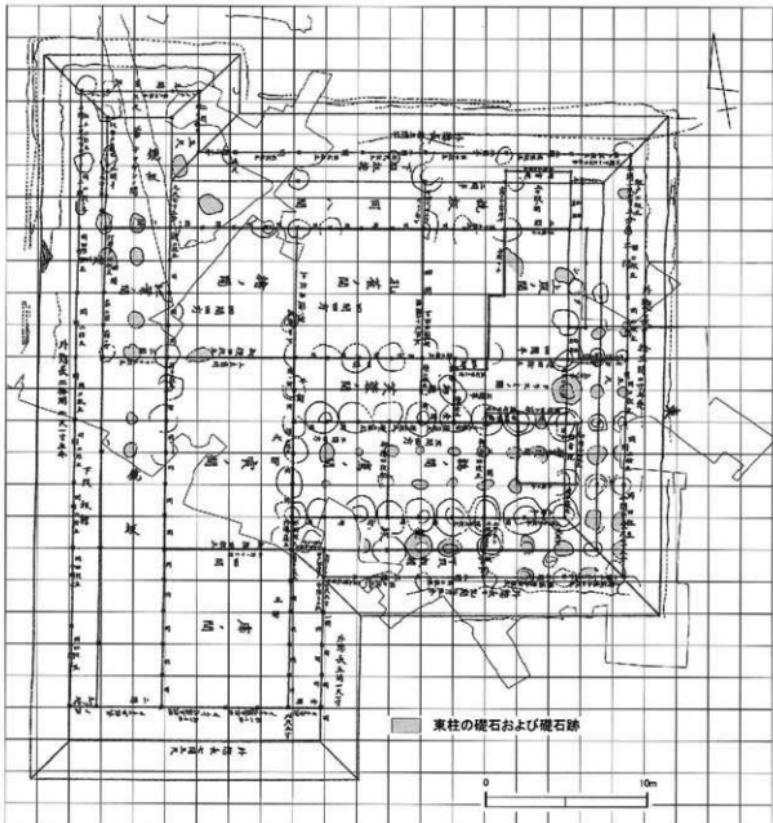
- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of <sup>14</sup>C data. *Radiocarbon* 19, 355-363  
 Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program. *Radiocarbon* 37 (2), 425-430  
 Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal. *Radiocarbon* 43 (2A), 355-363  
 Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates. *Radiocarbon* 43 (2A), 381-389  
 Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. *Radiocarbon* 46, 1029-1058

## 6.まとめ

第20次調査では、以下①～⑥の成果が得られた。

① 今回の調査区は大広間の南半部で、「裏上段の間」から「鶴の間」・「鷹の間」・「虎の間」にあたる場所である。大広間にかかる礎石および礎石跡を新たに45基検出した。「虎の間」にあたる場所では、東辺側の礎石跡7基(6間分)を検出し、さらに、西辺で4基、北辺で3基検出した。「虎の間」は、部屋の規模が絵図によって「東西4間、南北5間(40疊)」と「東西4間、南北6間(48疊)」の2種類が描かれている。実際の部屋の規模について、調査で確認する必要があった。今回の調査によって東西4間、南北6間になることが確認された。このことから同様の規模を描いた「御本丸大広間地絵図」が調査成果と一致し、大広間の間取りや配置を検討する上で重要な成果が得られた。また、市有地外である「鹿の間」部分を除き、大広間のは全容を調査したことになる。今後は、これまでの調査成果に基づいて大広間の構造などについて検討していく。

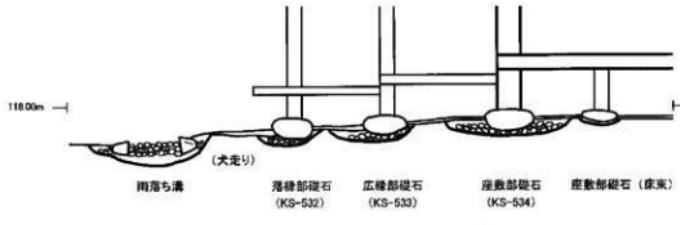
② これまでの調査で確認された礎石跡より小さい東柱の礎石および礎石跡を21基検出した(第35図参照)。東柱



第35図 大広間跡造構平面図と「御本丸大広間地絵図」の合成図 (1/300) 方眼メッシュは6尺5寸 (197cm)

は座敷部東辺付近を除き、1間おきに置かれていることがわかった。東柱の礎石抜取り穴の平面形は梢円形のものが多い。規模は径約40~90cm、深さ10~27cmで、形状や規模にばらつきがある。礎石は3つの形態に大別され、KS-20にみられる掘り方を伴わない素掘りのもの、KS-523にみられる穴を掘り内側に粘土を入れたもの、KS-527にみられる少量の根固め石が入ったものである。礎石設置後は、礎石の周囲を被覆する整地が行われていたと考えられる。今回の調査で大広間が建っていた当時のまま残っていたと観察される東柱の礎石、KS-538・551の2基を検出した。礎石上端の標高レベルは座敷部の礎石であるKS-538が116.010m、広縁部の礎石であるKS-551が115.794mで、比較するとKS-551の方が約30cm低い。このことは、後述する座敷部から雨落ち溝跡に向かって緩やかな勾配があることと関連する可能性が考えられる。

③ 3区の東部で大広間廃絶後、礎石抜取り時までのⅢ表土と考えられるⅢa層を検出した。KS-519・520・532・533・541・542・549・550・556の礎石抜取り穴の検出面である。この層は、直下の整地層であるⅢb1層を叩いて硬くする仕上げをした後に、二百数十年を経て大広間が廃絶されて礎石抜取られる時までに形成されたと考えられる。さらにこの部分では整地層自体の残りが良いため、座敷部から雨落ち溝跡に向かって緩やかな勾配を確認することができた。KS-534（座敷部礎石跡の掘り方）からKS-533（広縁部礎石跡）、KS-532（落縁部礎石跡）、雨落ち溝跡にかけての約3mの勾配は約3°を計る（第36図参照）。



第36図 大広間跡東部断面模式図(1/80)

④ 3区東側の拡張部、KS-532（落縁部礎石跡）と雨落ち溝跡の間の軒下部分で上面が非常に硬く締まっているⅢb1層を検出した。この硬化層は層厚が最大6cm、幅約90cmの褐色シルトを主体とする層で、混入物は見られなかった。整地土を叩いて硬くするための作業（犬走りの構築）が行われていたと考えられる。この層は、以前の調査では確認されていないが、大広間の軒下部分には同様の層が存在した可能性がある。

⑤ 昨年度の第17次調査で確認された砂礫層（第17・20次調査でのⅢd層）を確認した。分布範囲は大広間跡南西部から北東部へ帯状に伸び、東西約27m、南北約13m、幅約10mである。北東部では、雨落ち溝跡の内側で途切れている（第37図参照）。

砂礫層は、径2~5cmの礫と粗砂から成る層である。1区で1×0.3m、厚さ約2cmの範囲で、この層のサンプルを採取した。その結果、総重量14.8kgのうち砂が9.1kg、礫は5.7kgで、砂と礫の比率は6:4である。このことから砂が主体の整地層であることが見える。2区の砂礫層東辺部では、礫はほとんどなく、砂は細砂が堆積していた。1区の調査では、サンプル採取地点の砂礫層直下に、極めて薄い茶褐色有機質土層を検出した。

砂礫層の性格については、二つの可能性が考えられる。一つは、これまでの調査において大広間跡外側で検出された石敷き遺構と関連する遺構の可能性である。第12次調査では大広間北側の雨落ち溝跡から1.5~3.5mの位置で礎石4基と石敷きを検出した。第15次調査では雨落ち溝跡北東角の北30cmの位置で礎石（KS-432）1基と周囲に石敷きを検出している。ともに大広間内部の整地層直下から検出されており、大広間に先行する近世遺構として報告している。このことから、第17・20次調査で確認された砂礫層については、大広間に先行する建物に伴う石敷き遺構の可能性、もしくは今回調査を行った大広間建築に伴う整地の際に、先行する建物に伴う石敷きを除去した際に、一部残存したものが砂礫層として

検出されたという考え方である。砂砾層と石敷き遺構の特徴を比較すると、砂砾層が砂主体で砾が少なく、瓦片などの遺物が伴わない。一方で石敷き遺構は砾の密度が高く、円錐以外に長軸が50cmほどの角砾や瓦片が混じるなど、特徴に違いがある。現段階では大広間内側で確認された砂砾層と石敷き遺構は区別する必要がある。

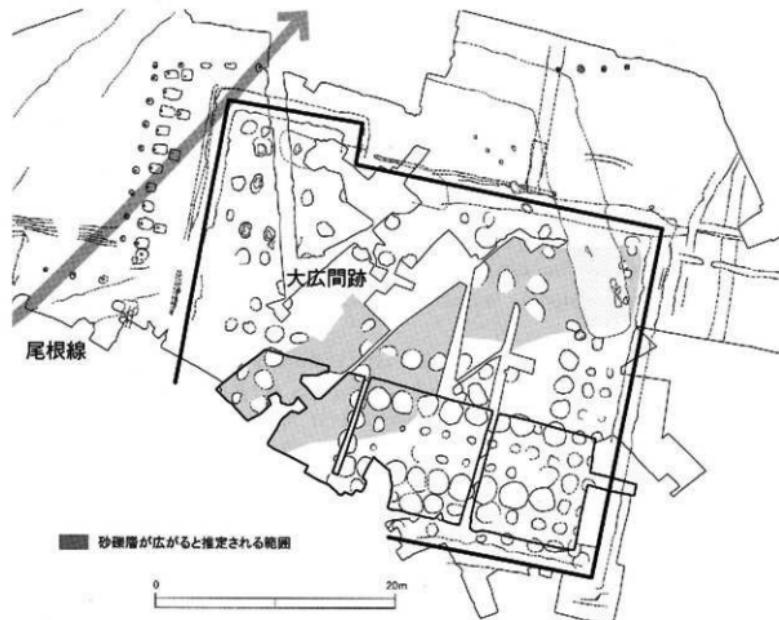
もう一つの考え方方は大広間建築時の整地に関わる地業の可能性である。本丸平場の地下水処理や大広間の地盤沈下防止などの用途・機能として、整地の際に砂砾を敷いたという位置付けである。砂砾層の分布範囲と本丸平場の尾根筋ラインが概ね平行していることが理由として挙げられる。また、砂砾層が雨落ち溝跡の内側で途切れていることから、大広間に中にしか存在しない層である可能性がある。

遺構の保存のため、大広間整地層下層での面的な調査は制約があり、砂砾層がいずれの性格かを断定することは難しい。これまでの成果をもとに大広間に先行する建物に伴う石敷き遺構もしくは大広間建築時の整地に関わる地業の2つの可能性を考えておき、結論は今後の調査と研究に待ちたい。

⑥ 大広間跡内部の整地層直下より、礎石と考えられる遺構（KS-581）を1基検出した。礎石上面レベルを見ると、大広間跡南側の礎石群に比べ約20cm低く、大広間の整地層より下層で検出していることから、大広間に先行する建物に関わる礎石の可能性が考えられる。

⑦ 遺物は、磁器、陶器、土師質土器、銅釘、瓦などが出土した。大広間の建物に関連する遺物として金銅金具1点、銅製鉤金具1点、銅釘26点出土した。

⑧ 放射性炭素年代測定では、補正14C年代値で $2300 \pm 30$ yrBPの結果を得た。また、これらの年代値を曆年較正し、概ね紀元前2世紀から3世紀の結果が示された。これは土塼が本来帰属した地層の年代を示すと考えられる。近世の盛土であったとしても、盛土を構成する土壤自体は、弥生時代に形成された地層からもたらされたと解釈される。



第37図 砂砾層（III d層）分布図（1/400） 太線が第20次調査区

## V 第21次調査

### 1. 調査目的及び調査経過

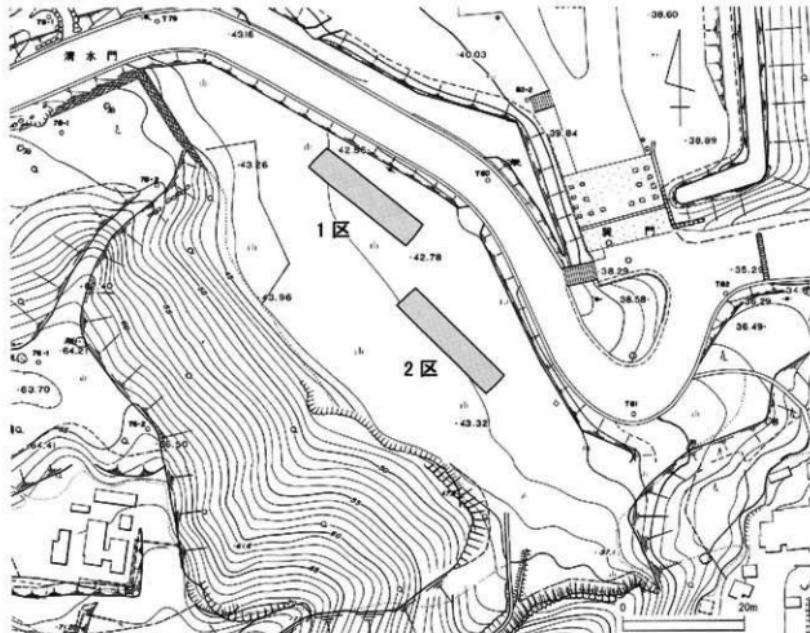
第21次調査は、清水門付近の造酒屋敷跡を対象として、平成20年（2008）8月26日から同年10月29日まで遺構確認のための発掘調査を実施した。調査面積は160m<sup>2</sup>である。

調査目的は、清水門の南側に位置し、仙台藩の御用酒屋であった権森家の屋敷跡や酒蔵跡など、造酒屋敷跡の位置および規模の確認（1区・2区）である。権森家は、初代仙台藩主伊達政宗が、親しい幕臣である柳生宗矩の紹介で、慶長13年（1608）に大和国（現在の奈良県）から招かれ、城内に酒蔵と住宅を与えられて酒造にあたった。その後、明治9年（1876）に廃業するまでの約270年にわたり酒造業を営んだ。

調査区の設定や調査前の現況写真撮影後、8月26日にフェンスを設置し、重機による表土の除去作業を開始した。9月1日から人力による表土除去及び遺構面の検出作業を開始した。

造酒屋敷跡の調査（1区・2区）では、造酒屋敷に伴うと考えられる礎石跡、集石遺構、炉跡、溝跡などを検出した。遺物は、近世の整地層と考えられるⅢ層上面から18世紀代を中心とする磁器、陶器の他、土師質土器、瓦質土器、瓦、古銭などが出土した。

第21次調査は、平成20年3月14日の第19回仙台城跡調査指導委員会において、調査箇所や目的、方法について了承を得て、第20次調査終了後に実施した。調査の進展に伴い、10月10日に実施した第21回仙台城跡調査指導委員会において調査の進め方についての現地指導を受けた。その後、調査区の埋め戻しの作業を行い、10月29日に調査箇所を原状に復した。



第38図 第21次調査区配置図 (1/800)

## 2. 旧地形及び基本層序

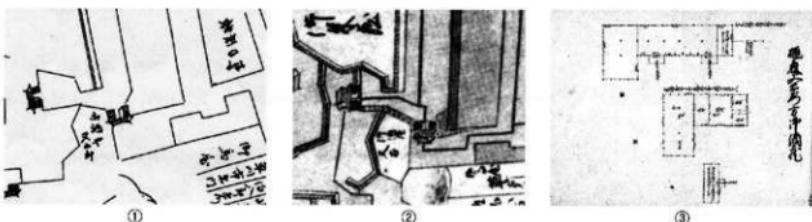
造酒屋敷跡は、追廻から本丸へ至る登城路の南側、青葉山丘陵の裾部にあたる標高約43mの平場に位置する。北側の三の丸跡がある下町役丘面との間には約3m、東側の巽門跡との間には約5mの比高差がある。平場の南側には青葉山丘陵の斜面が長沼（三の丸堀跡）方向まで伸びていることから、

仙台城の築城時に斜面を盛土して造成された平場であったと推定される。

以下、各区毎に基本層の概要について述べる。



第39図 調査前状況



①仙台城下絵図 「御酒屋又五郎」 寛文8・9年（1668・69） 第二高等學校所蔵 模写図 昭和11年（1937）模写

②仙台城下絵図 「御酒屋 又右」 寛文9年（1669） 宮城県図書館蔵

③仙台藩内神社仏閣等作事方役所修繕ニ属スル場所調 酒蔵部分 寛文～元禄年間（1661～1704） 宮城県図書館蔵

第40図 絵図からみた造酒屋敷

### (1) 1区

1区の基本層は4層に大別した（第16、17表）。I層は近代から現代にかけての盛土層で19層に細分した。I層上面で検出した暗渠状遺構から一分金が出土した。II層はKS-593段切遺構の埋土上面の盛土層で2層に細分した。近代以降の盛土層である。III層は近世の盛土層で3層に細分した。IIIa～IIIc層はKS-593段切遺構を構築する際の盛土層である。IV層は、KS-593が構築される以前の整地層で、IV層上面でKS-596を検出した。また、IV層上面から17世紀後半以降の肥前陶器が1点出土した。

### (2) 2区

2区の基本層は3層に大別した（第18、19表）。I層は現代の盛土層である。II層は近代以降の盛土層で3層に細分した。III層は近世の盛土層で10層に細分した。IIIa層は近世の整地面でKS-597をはじめとする遺構の検出面である。遺構に切り合い関係があるため、生活面が複数の時期にまたがる。遺物は17世紀から18世紀にかけての陶磁器や土師質土器などが出土した。19世紀以降の遺物がほとんど見られず、III層の一部は近代以降に削平を受けた可能性が推測される。IIIb～IIIi層は、下層で見られる段差を平坦にするために盛土された近世以降の整地層と考えられる。

### 3. 検出遺構

#### (1) 1区

##### 【近世の遺構】

・KS-593段切遺構 調査区南部で検出した。検出面はⅢa層上面であるが、直上に2時期の整地層が見られ、近代以降も使われていたと考えられる。確認できた段の規模は東西2.2m以上、南北3.9m以上、高さは35cmである。

遺構の規模は明らかではないが、調査区の大部分を占め、推定で東西15.7m以上、南北14.5m以上である。南側は盛土により構築され、北側が一段低い造成面となっている。また、段と平場の境には上端幅約30cmの溝を検出した。北側の造成面には平場を構築する際の掘り方（掘り方d）と近世の生活面と考えられる整地層（整地上c）を確認した。KS-594・595の検出面である。掘り方より瓦片が出土した。整地上cの上面に炭の層（整地土b）が調査区南側にのみ堆積している。炭の層の上面には長軸3~15cmの花崗岩片を多量に含む層（整地土a）が堆積し、調査区北壁まで広がる。調査区北側では花崗岩片が敷かれたような状態で検出された。また、遺構の範囲外ではあるが、Ⅲa層上面で焼成と思われる捕鉢片が出土した。造成は近代になって人為的に埋め立てられている。

・KS-594溝跡 調査区南部で平面のみ検出した。検出面はKS-593の整地土c上面である。東西方向に延びる溝跡である。長さは2.8m以上、上端幅は30cmである。なお、KS-595との間で18世紀後半の肥前磁器染付鉢片1点が出土した。

・KS-595土坑 調査区南部で平面のみ検出した。検出面はKS-593の整地土c上面である。平面形は不整円形である。規模は東西2.75cm以上、南北2.30cm以上である。KS-592に切られる。

・KS-596 調査区南部で平面のみ検出した。検出面はⅣ層上面である。平面形は円形である。規模は東西4.0cm以上、南北3.0cm以上である。なお、北側のⅣ層上面で17世紀後半以降の肥前陶器青緑釉皿片1点が出土した。

##### 【近代の遺構】

・KS-589土手跡 調査区北部で検出した。検出面はKS-593整地土a上面である。南北方向に延びる土手跡である。長さは4.4m以上、上端幅は30~100cm、下端幅は2.1~3.5m、高さは約40cmである。KS-593の整地土aの上に花崗岩片を多く含む盛土により構築されている。土手跡の西側にKS-590溝跡があり、湧水量が多いことから、東側に湧水が入らないようにするために造られたものであると推測される。

・KS-590溝跡 調査区北部で検出した。検出面はⅠp層上面である。南北方向に延びる溝跡である。長さは2m以上、上端幅は1.3~1.75m、深さは28cm以上である。西側では溝底に土坑状の落ち込みがみられる。

・KS-591溝跡 調査区北部で検出した。検出面はKS-593埋土1上面である。南北方向に延びる溝跡である。長さは4.5m以上、上端幅は60~160cm、深さは約60cm以上である。なお、断面では埋土2からの掘り込みがみられ、溝がある程度埋まってから掘り直され、2時期にわたって使われていたことがわかった。

・KS-592溝跡 調査区南部で検出した。検出面はKS-593埋土2上面とKS-593整地土b上面であり、2時期の掘り込み面が確認された。南北方向に延びる溝跡である。長さは4.7m以上、上端幅は2~4m、深さは約1.25mである。埋土中に植物遺存体と河原石を多く含む層がみられ、新しい時期の溝の底面であったと考えられる。古い時期の溝の底面には径8~18cmの河原石が敷かれている。また、溝の南壁では杭を1本検出した。

#### (2) 2区

##### 【近世から近代にかけての遺構】

##### 〈Ⅲa層上面検出遺構〉

・KS-597礎石 調査区北部で平面のみ検出した。平面形は方形である。加工の見られない自然石で、長軸42cm、

短軸49cmである。礎石の掘り方は確認できなかった。KS-607より新しい。

・KS-598礎石 調査区北部で平面のみ検出した。平面形は不整円形である。加工の見られない自然石で、長軸41cm、短軸39cmである。礎石の掘り方は東西79cm、南北64cmである。KS-602より新しい。

・KS-599礎石 調査区中央で平面のみ検出した。平面形は不整円形である。加工の見られない自然石で、長軸51cm、短軸32cmである。KS-604集石遺構の中で検出し、礎石の掘り方は確認できなかった。

・KS-600礎石 調査区中央で平面のみ検出した。平面形は方形である。加工の見られない自然石で、長軸60cm、短軸38cmである。礎石の掘り方は確認できなかった。KS-606・640より新しい。

・KS-601礎石 調査区南部で平面のみ検出した。平面形は方形である。加工の見られない自然石で、長軸37cm、短軸29cm以上である。礎石の掘り方は確認できなかった。他の礎石と離れた位置ではあるが、米蔵跡が予想される地点であることから、礎石として扱うことにした。

・KS-602炉跡 調査区北部で平面のみ検出した。平面形は円形である。焼け面の範囲は東西69cm以上、南北78cmである。KS-598より古い。

・KS-603炉跡 調査区北部で平面のみ検出した。平面形は不整形である。焼け面の範囲は東西73cm、南北49cmである。

・KS-604集石遺構 集石は、調査区中央で、東西4.2m、南北3.65mの範囲から検出した。礎の大きさは、径10~60cmほどの自然石が主体を占める。礎の間から17~18世紀代の陶磁器片や土師質土器などが出土した。KS-606と一連の遺構である可能性が考えられる。KS-605より新しい。

・KS-605石列 調査区中央で平面のみ検出した、南北方向に延びる石列である。長さ7.2m以上である。自然石11石と石の抜取り穴とみられるKS-648を検出した。KS-604・614より古い。

・KS-606木桶跡 調査区中央で平面のみ検出した、南北方向に延びる木桶跡である。長さ4.2m以上、上端幅は40~60cmである。木桶は覆土されており、その上には礎などがみられる。U字形で、上部が開口している形状である。KS-610の断ち割り断面で木桶の板材を確認した。材質は不明である。KS-604と一連の遺構である可能性が考えられる。KS-610・640より新しい。

・KS-607土坑 調査区北部で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西74cm以上、南北111cm以上である。KS-597より古い。

・KS-608土坑 調査区北部で平面のみ検出した。平面形は不整形である。規模は東西153cm、南北225cmである。KS-627・628より古く、KS-613より新しい。

・KS-609土坑 調査区北部で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西102cm以上、南北98cmである。上面には径5~20cmの礎が多数みられ、南東方向にも広がる。

・KS-610土坑 調査区中央で平面のみ検出した。平面形は不整円形である。規模は東西56cm以上、南北88cmである。一部断ち割りをし、東壁で木桶の板材を確認した。深さが約10cmである。KS-606より古い。

・KS-611土坑 調査区南部で平面のみ検出した。平面形は方形である。規模は東西265cm以上、南北310cmである。北壁と西壁で並ぶように径10~20cmの河原石がみられる。上部が削平されたためか、残存状況はよくない。KS-616より新しい。

・KS-612土坑 調査区南部で平面のみ検出した。平面形は不整円形である。規模は東西40cm以上、南北190cm以上である。

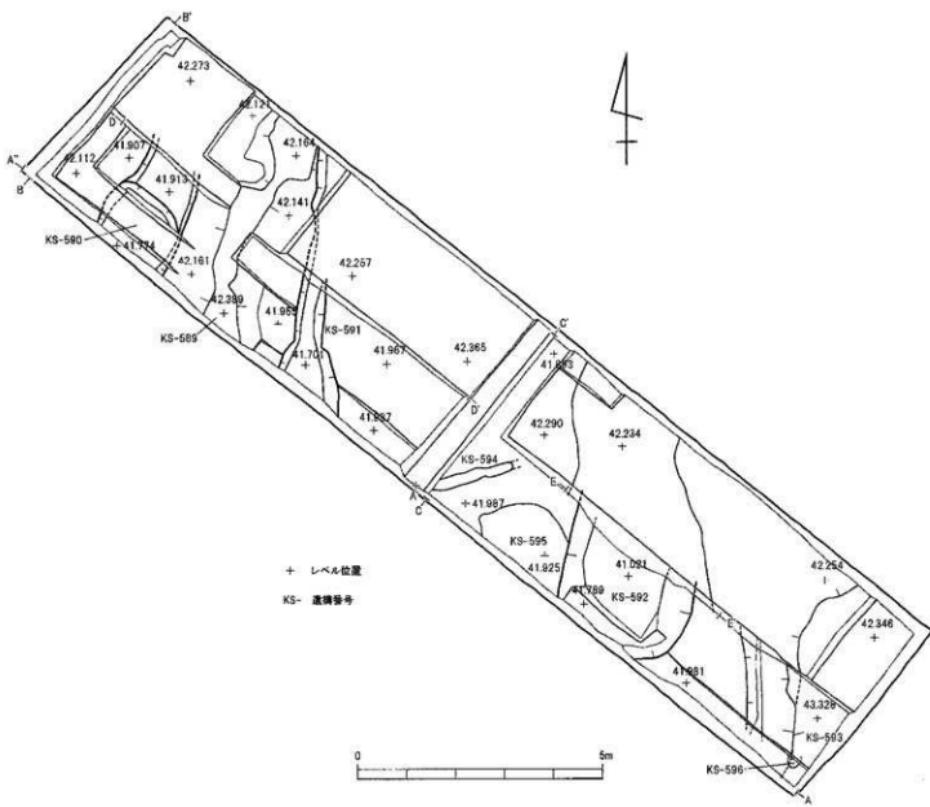
・KS-613溝跡 調査区北部で平面のみ検出したT字型に延びる溝跡である。長さは東西方向が88cm以上、南北方向が78cm以上である。東西方向はKS-608に切られる。規模は東西方向の上端幅が62cm、南北方向の上端幅が22cmである。KS-608より古い。

- ・KS-614溝跡 調査区中央で平面のみ検出した、南北方向に延びる溝跡である。長さ147cm以上でKS-605・615に切られる。規模は上端幅が28cmで、ほぼ真北方向に延びる。KS-615より古い。
- ・KS-615溝跡 調査区中央で平面のみ検出した、南北方向に延びる溝跡である。長さ170cm以上でKS-605・614を切る。規模は上端幅が27cmで、ほぼ真北方向に延びる。KS-605・614より新しい。
- ・KS-616溝跡 調査区南部で平面のみ検出した、東西方向に延びる溝跡である。径10~30cmの河原石がみられるが、上面がKS-611や搅乱に切られ、残存状況はよくない。長さ約72m以上、上端幅が90~160cmである。KS-611より古い。
- ・KS-618 調査区北部で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西114cm、南北114cmである。一部断ち割りをし、東西86cm、南北50cm以上の柱穴と考えられる穴を確認した。
- ・KS-619 調査区北部で平面のみ検出した。平面形は不整円形である。規模は東西67cm、南北54cmである。
- ・KS-620 調査区北部で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西63cm以上、南北60cm以上である。
- ・KS-621 調査区北部で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西73cm、南北38cmである。
- ・KS-622 調査区北部で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西29cm、南北49cm以上である。
- ・KS-623 調査区北部で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西19cm以上、南北53cm以上である。
- ・KS-624 調査区北部で平面のみ検出した。平面形は不整円形である。規模は東西150cm以上、南北115cmである。一部断ち割りをし、東西90cm、南北45cm以上の礎石の抜取りか柱穴と考えられる穴を確認した。
- ・KS-625 調査区北部で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西38cm、南北34cmである。
- ・KS-626 調査区北部で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西29cm、南北29cm以上である。
- ・KS-627 調査区北部で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西27cm、南北25cmである。KS-608より新しい。
- ・KS-628 調査区北部で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西33cm、南北35cmである。
- ・KS-629 調査区北部で平面のみ検出した。平面形は不整円形である。規模は東西15cm以上、南北31cm以上である。
- ・KS-630 調査区北部で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西23cm、南北26cmである。
- ・KS-631 調査区北部で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西20cm以上、南北28cmである。
- ・KS-632 調査区北部で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西36cm、南北33cmである。
- ・KS-633 調査区北部で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西43cm、南北39cmである。埋土からガラス片1点が出土した。
- ・KS-634 調査区北部で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西21cm、南北23cmである。
- ・KS-635 調査区北部で平面のみ検出した。平面形は不整円形である。規模は東西26cm以上、南北18cm以上である。埋土から一分金1点と18世紀後半の肥前磁器染付碗片1点が出土した。
- ・KS-636 調査区中央で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西32cm以上、南北26cm以上である。KS-637より古い。
- ・KS-637 調査区中央で平面のみ検出した。平面形は不整円形である。規模は東西12cm以上、南北28cm以上である。KS-636より新しい。
- ・KS-638 調査区中央で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西22cm、南北20cmである。
- ・KS-639 調査区中央で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西22cm以上、南北24cmである。
- ・KS-640 調査区中央で平面のみ検出した。平面形は不整円形である。規模は東西38cm以上、南北34cmである。KS-600・606より古い。

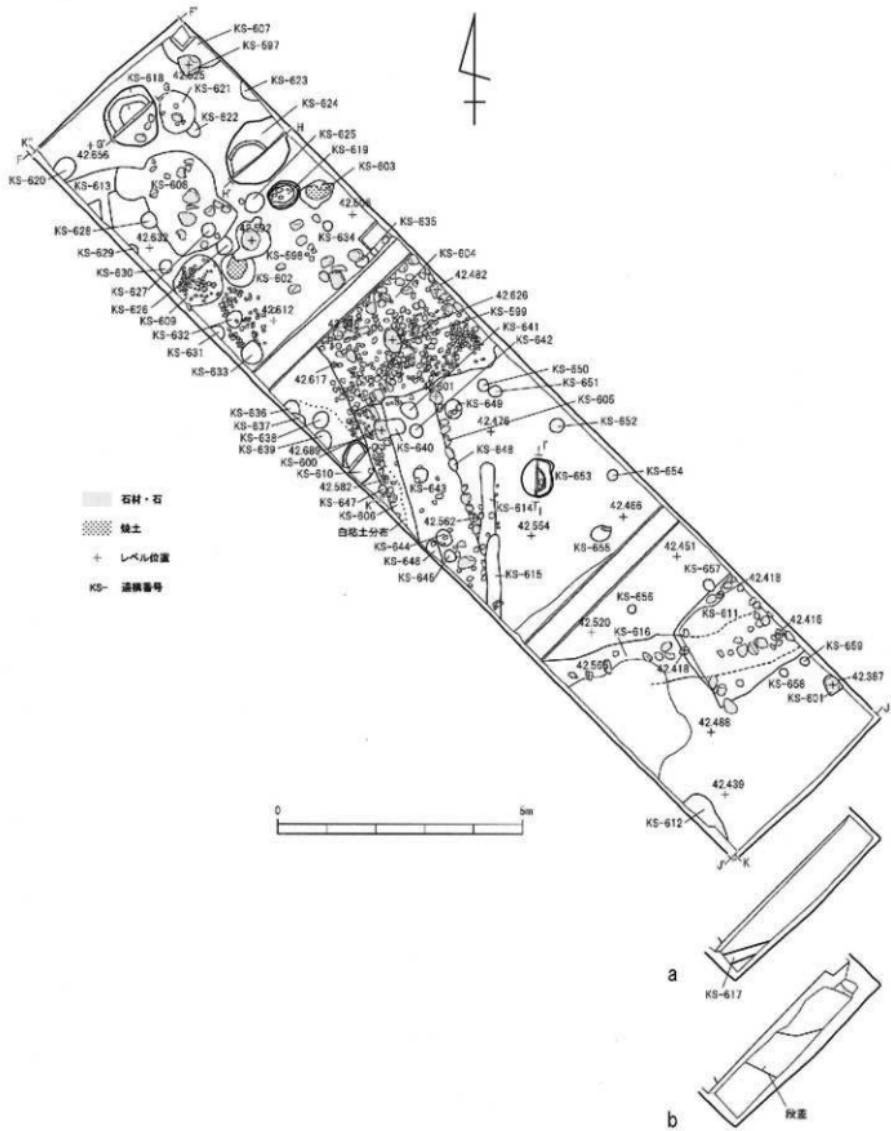
- ・KS-641 調査区中央で平面のみ検出した。平面形は不整円形である。規模は東西31cm、南北36cmである。
- ・KS-642 調査区中央で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西26cm、南北33cmである。
- ・KS-643 調査区中央で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西27cm、南北30cmである。
- ・KS-644 調査区中央で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西25cm、南北29cmである。
- ・KS-645 調査区中央で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西20cm、南北20cmである。
- ・KS-646 調査区中央で平面のみ検出した。平面形は不整円形である。規模は東西21cm以上、南北38cm以上である。
- ・KS-647 調査区中央で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西15cm、南北15cmである。
- ・KS-648 調査区中央で平面のみ検出した。平面形は不整円形である。規模は東西19cm、南北27cmである。KS-605石列に伴う石の抜取り穴とみられる。
- ・KS-649 調査区中央で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西36cm、南北38cmである。
- ・KS-650 調査区中央で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西21cm、南北22cmである。
- ・KS-651 調査区中央で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西26cm、南北23cmである。
- ・KS-652 調査区中央で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西32cm、南北26cmである。
- ・KS-653 調査区中央で平面のみ検出した。平面形は不整円形である。規模は東西63cm、南北79cmである。一部断ち割りをし、深さ20cmで、径44cmの円形の柱痕跡を確認した。
- ・KS-654 調査区中央で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西21cm、南北23cmである。
- ・KS-655 調査区中央で平面のみ検出した。平面形は不整円形である。規模は東西40cm、南北33cmである。
- ・KS-656 調査区南部で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西17cm、南北15cmである。
- ・KS-657 調査区南部で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西21cm、南北24cmである。
- ・KS-658 調査区南部で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西17cm、南北18cmである。
- ・KS-659 調査区南部で平面のみ検出した。平面形は円形である。規模は東西16cm、南北17cmである。
- ・KS-660 調査区南端で断面のみ検出した。規模は幅174cm、深さ17cmである。

#### 〈Ⅲe層上面検出遺構〉

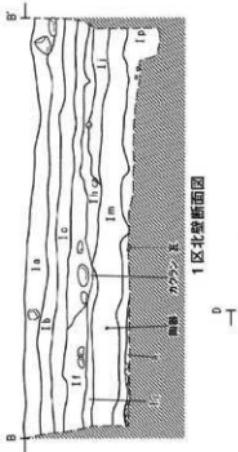
- ・KS-617溝跡 調査区南部のトレンチで検出した（第42図a）。検出面はⅢe層上面である。東西方向に延びる溝跡である。長さ約1m以上である。規模は上端幅が32~46cm、深さ8cmである。埋土中から瓦片が出土した。



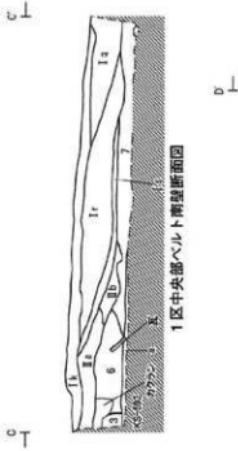
第41図 第21次調査1区IIIa層上面遺構平面図 (1/100)



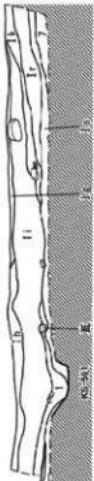




1区北壁断面図



1区中央部ベルト南壁断面図



1区北底サブトレーンチ東側断面図

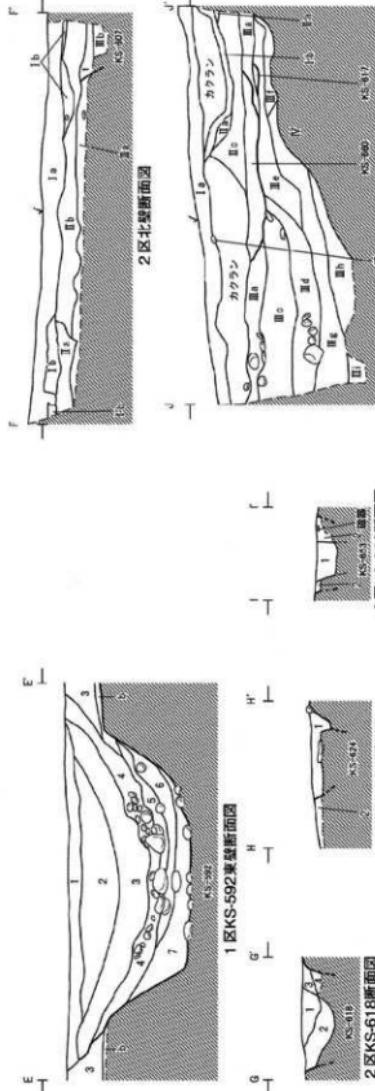
#### 第44図 第21次調査 1区土層注記表

地盤区分	層番	層号	岩相	土質		付記
				+地盤No.	-地盤	
高木層	Ia	10784/2	褐色	シルト	無	無
	Ib	10784/1	黑色	砂質シルト	無	無 付3-10mmの河原石を多量含む。ガラスF、マニードルFを含む。
	Ic	72574/2	黑色	シルト	無	無 付2-5cmの河原石を多量含む。ガラスF、マニードルFを含む。
	Id	10784/2	黑色	シルト	無	無 付2-5cmの河原石を多量含む。ガラスF、マニードルFを含む。
	Ie	25757/3	黑色	シルト	有	無 無色シルト・コロク (10mm) を多量含む。付1-5mmの河原石、瓦片を含む。
	If	10784/3	土黄色	シルト	無	無 無色シルト・コロク (10mm) を多量含む。付1-5mmの河原石、瓦片を含む。
	Ig	10784/2	褐色	シルト	無	無 無色シルト・コロク (10mm) を多量含む。付1-5mmの河原石、瓦片を含む。
	Ij	25757/2	黑色	砂質シルト	無	無 無色シルト・コロク (10mm) を多量含む。付1-5mmの河原石、瓦片を含む。
	Ik	10784/2	褐色	シルト	無	無 無色シルト・コロク (10mm) を多量含む。付1-5mmの河原石、瓦片を含む。
	Im	10784/2	褐色	砂質シルト	無	無 無色シルト・コロク (10mm) の風化を少度含む。付3-5mmの河原石、瓦片を含む。
	In	25757/2	褐色	砂質シルト	無	無 無色シルト・コロク (10mm) の風化を少度含む。付3-5mmの河原石、瓦片を含む。
	Io	10784/1	土黄色	シルト・風化土	有	無 無色シルト・コロク (10mm) の風化を少度含む。付3-5mmの河原石、瓦片を含む。
	Io	25757/2	褐色	シルト	有	無 無色シルト・コロク (10mm) の風化を少度含む。付3-5mmの河原石、瓦片を含む。
	Ir	10784/2	褐色	砂質シルト	無	無 無色シルト・コロク (10mm) の風化を少度含む。付3-5mmの河原石、瓦片を含む。
	Is	25757/2	褐色	砂質シルト	無	無 無色シルト・コロク (10mm) の風化を少度含む。付3-5mmの河原石、瓦片を含む。
	It	10784/3	褐色	砂質シルト	無	無 無色シルト・コロク (10mm) の風化を少度含む。付3-5mmの河原石、瓦片を含む。
	1b	10784/2	褐色	砂質シルト	有	無 無色シルト・コロク (10mm) の風化を少度含む。付1-10cmの河原石、瓦片を含む。
KS-503	地下6	25757/3	黑色	粘土質シルト	有	無 無色粘土質シルト・コロク (10mm) の風化を少度含む。付3-5mmの河原石、瓦片を含む。
	地下7	10784/2	褐色	砂	有	無 無色粘土質シルト・コロク (10mm) の風化を少度含む。付3-5mmの河原石、瓦片を含む。
KS-504	地下1	25757/2	褐色	粘土質シルト	有	無 無色粘土質シルト・コロク (10mm) の風化を少度含む。付3-5mmの河原石、瓦片を含む。
KS-509	地下1a	10784/2	褐色	粘土質シルト	有	無 無色粘土質シルト・コロク (10mm) の風化を少度含む。付3-5mmの河原石、瓦片を含む。
	地下1b	25757/3	褐色	粘土質シルト	有	無 無色粘土質シルト・コロク (10mm) の風化を少度含む。付3-5mmの河原石、瓦片を含む。

#### 第17図 第21次調査 1区土層注記表

第17図 第21次調査 1区土層注記表 (1/50・SL=43m)

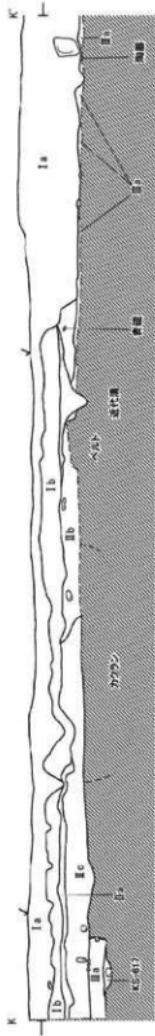




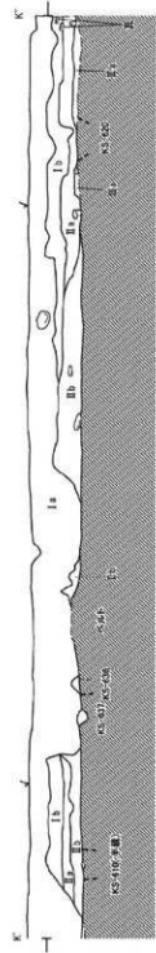
第45図 第21次調査 1・2区土壌断面図  
1区KS-592東壁断面図  
2区KS-624断面図  
3区KS-618断面図  
4区KS-653断面図 (1/50・SI=43m)

第21次調査 1・2区土壌注記表

調査区	植物番号	地質・岩号	土質	耕作		上耕
				耕作量	耕作方法	
1	H-1	KY343	土色	なし	なし	なし
	H-2	KY342	灰青褐色	なし	なし	なし
	H-3	25353.2	褐色	なし	なし	なし
	H-4	25353.2	褐色	なし	なし	なし
	H-5	25353.3	褐色	なし	なし	なし
	H-6	25353.2	褐色	なし	なし	なし
	H-7	197161	灰色	なし	なし	なし
2	I-1	25162.2	褐灰褐色	なし	なし	なし
	I-2	25162.2	褐灰褐色	なし	なし	なし
	I-3	25162.2	褐灰褐色	なし	なし	なし
	I-4	25162.2	褐灰褐色	なし	なし	なし
	I-5	25162.3	褐灰褐色	なし	なし	なし
	I-6	25162.2	褐灰褐色	なし	なし	なし
	I-7	25162.2	褐灰褐色	なし	なし	なし
3	J-1	74655.1	紺色	なし	なし	なし
	J-2	KY342	灰青褐色	なし	なし	なし
	J-3	19724.1	褐褐色	なし	なし	なし
	J-4	19724.3	褐褐色	なし	なし	なし
	J-5	19724.3	褐褐色	なし	なし	なし
	J-6	19724.2	褐褐色	なし	なし	なし
	J-7	19724.2	褐褐色	なし	なし	なし
4	K-1	19722	褐色	なし	なし	なし
	K-2	25753.1	褐褐色	なし	なし	なし
	K-3	25753.2	褐褐色	なし	なし	なし
	K-4	19724.2	褐褐色	なし	なし	なし
	K-5	19724.2	褐褐色	なし	なし	なし
	K-6	19724.2	褐褐色	なし	なし	なし
	K-7	19724.2	褐褐色	なし	なし	なし



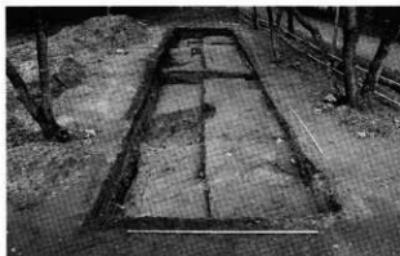
2区西壁断面図 a



第46図 第21次調査 2区断面図 [1/50・SL=43m]  
2区西壁断面図 b

第19表 第21次調査 2区土層注記表

測定区	番号	地質・岩相	土壌			参考
			上地	中地	下地	
2	Ia	10YR5/2 黑褐色	シルト	粘質	粘土	表面に3~30mmの粗粒石を含む。
	Ib	25Y6/2 黑褐色	シルト	粘	粘	柱1~5cmの粗粒石を含む。
	IIa	10YR2/2 黑褐色	シルト	粘	粘	柱2~20mmの粗粒石を含む。
	IIb	25Y4/1 黑灰色	シルト質砂	粘	粘	有機物を含む。
	IIc	25Y4/2 黑灰色	砂質シルト	粘	粘	有機物を含む。
	IIa	25Y5/2 黑灰色	砂	粘	粘	有機物を含む。
K510	Ia	25Y4/1 黑灰色	シルト	粘	粘	柱1~5cmの粗粒石を含む。



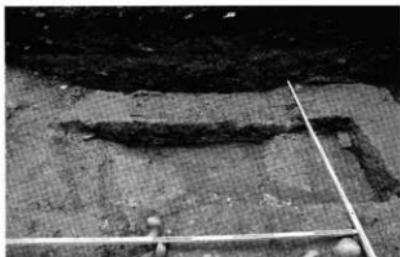
1区 全景（南東から）



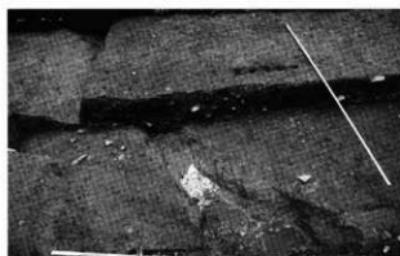
1区 KS-589検出状況（北東から）



1区 KS-589断ち割り断面（東から）



1区 KS-590検出状況（北東から）



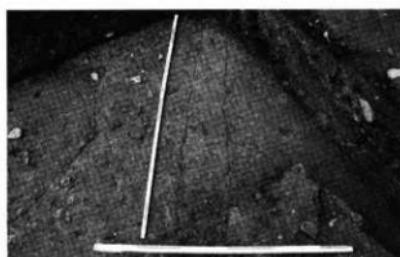
1区 KS-591検出状況（南から）



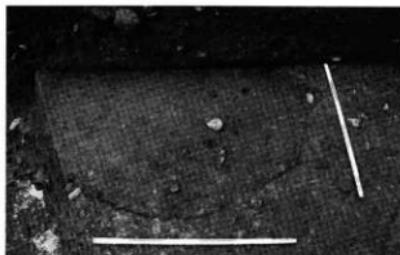
1区 KS-592検出状況（南西から）



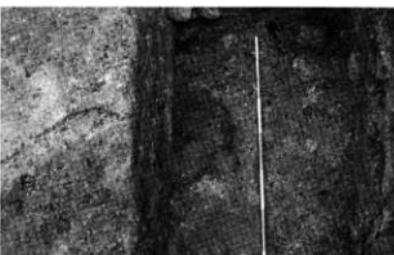
1区 KS-593検出状況（北西から）



1区 KS-594検出状況（東から）



1区 KS-595検出状況（東から）



1区 KS-596検出状況（北西から）



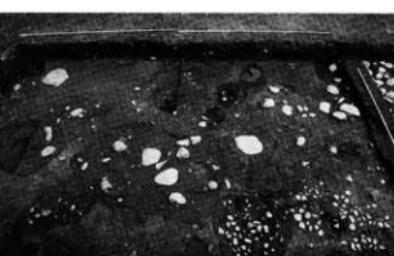
1区 I層一分金（No.7）出土状況



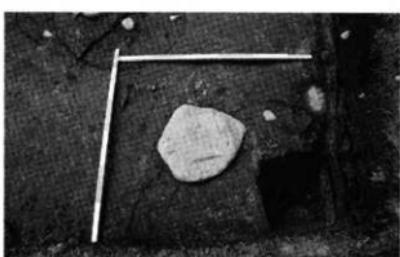
1区 KS-593整地土c磁器器（No.106）出土状況



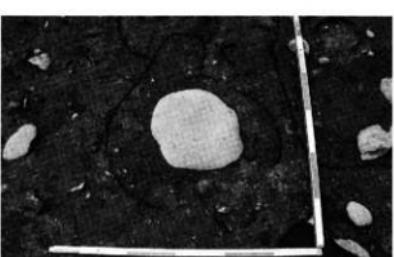
2区 全景（北西から）



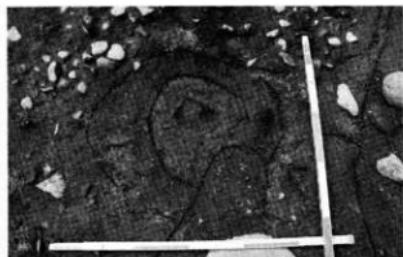
2区 北部遺構検出状況（南西から）



2区 KS-597検出状況（北東から）



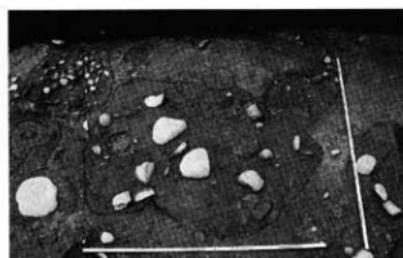
2区 KS-598検出状況（北東から）



2区 KS-602検出状況（北東から）



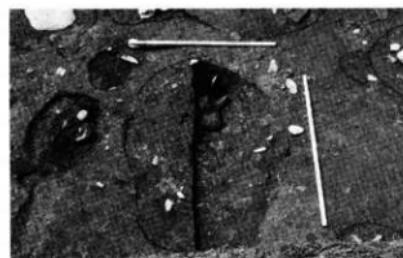
2区 KS-603・619検出状況（北東から）



2区 KS-608・627・628検出状況（北東から）



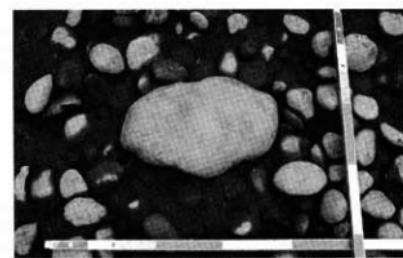
2区 KS-618・621・622検出状況（北東から）



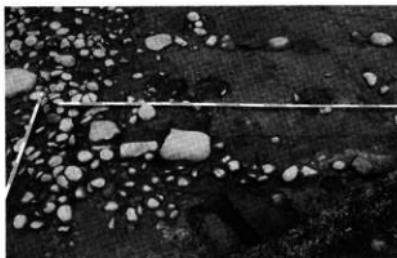
2区 KS-624検出状況（北東から）



2区 中央部遺構検出状況（南西から）



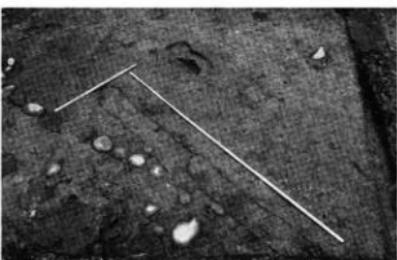
2区 KS-599検出状況（東から）



2区 KS-600・606・610検出状況（南西から）



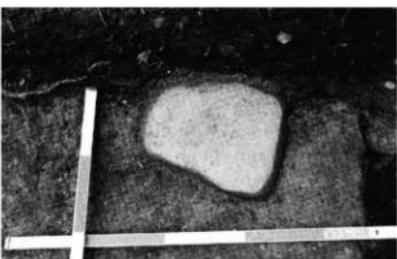
2区 KS-604検出状況（北東から）



2区 KS-614・615検出状況（南西から）



2区 南部礎構検出状況（南西から）



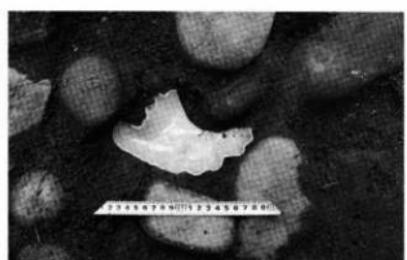
2区 KS-601検出状況（南西から）



2区 KS-611・616検出状況（北東から）



2区 KS-635埋土一分金（No.118）出土状況



2区 KS-604上面磁器皿（No.92）出土状況



2区 作業風景（南東から）

第50図

#### 4. 出土遺物

各遺物の出土点数については、区・造構・層位別の数量表（第20～24表）を作成し、報告書掲載遺物については観察表（第25～41表）を付した。なお、陶磁器の点数は、接合・分類作業を行い同一個体と判断されるものを1点とし、それ以外は全て破片数として算出した。

##### (1) 磁器（第20表）

磁器は470点出土した。1区では、I・II層からの出土が多い。出土した近世磁器についてみると17世紀中ごろから19世紀中ごろまでのものが多い。産地は肥前が圧倒的多く、瀬戸美濃や波佐見が僅かにみられる。器種は碗、皿、鉢、瓶などである。KS-593の整地上e上面から18世紀後半の肥前磁器染付鉢片1点が出土した。（第57図17）。

2区では、III層から多くの近世磁器が出土した。それぞれ17世紀中ごろ～18世紀後半を主体とする資料である。産地は肥前がほとんどで、僅かに波佐見がみられる。器種は、碗、皿、小鉢などである。2区のI層から、19世紀後半ヨーロッパ産のカップ片が出土した（第58図26）。

##### (2) 陶器（第20表）

陶器は576点出土した。1区では、I・II層からの出土が多い。出土した近世陶器についてみると17世紀後半から19世紀前半ごろまでのものが多い。産地は大堀相馬が多く、他に小野相馬、肥前（唐津を含む）、京・信楽系、堤などがみられる。器種は、碗、皿、鉢、擂鉢、壺、瓶類、土瓶、仏飯器、小杯、豆甕などがある。近世のIII層上面では堤焼と思われる擂鉢片が出土した。IV層上面から17世紀後半以降の肥前陶器青緑釉皿片1点が出土した。

2区では磁器と同様にII層から多数出土した。産地は、大堀相馬、肥前（唐津含む）、瀬戸美濃、岸系、堤などである。器種は、皿、鉢、擂鉢、瓶類、灯明皿、仏飯器などがみられる。

##### (3) 土師質土器（第20表）

土師質土器は96点出土した。皿が多い。ほとんどが法量復元のできない小片であるため、II径等に関して全体的な傾向を知ることは困難である。口径の計測または復元できたものは、燈明皿4点、皿4点、鉢1点、蓋1点、焼壙壺1点である。すべて図示した（第55図1～11）。

##### (4) 瓦質土器（第20表）

瓦質土器は7点出土した。すべて破片資料である。1区 I層から器台1点が出土した。2区では火鉢3点、鉢類2点、不明1点がI層とII層から出土した。火鉢2点を図示した（第60図87）。

第20表 第21次調査出土陶磁器他数量表

区	造構・層位	磁器	陶器	玉串	瓦質土器	シングル	計
	曲筋	15	317	36	1		352
I		198	24	3			74
II		47					47
KS-592壁上1		1					1
KS-592壁上2		15	2				17
KS-592壁上3		2	2	2			6
KS-592壁上7		2	1				3
KS-593壁土		3	8				13
KS-593壁土							1
KS-593壁土					2		2
KS-593壁土				2			3
KS-593壁土方			1				1
KS-593壁土方			1				1
I段小口		265	338	47	1	2	602
曲筋			1				1
圓孔		3	5	4	1		15
I		78	19	5	3		105
II		48	70	5			123
III		47	110	30	2		189
KS-604		1	2	1			4
KS-605		1					1
KS-606		1					1
KS-610壁り方				1			1
KS-610壁上				1			1
KS-618壁土		1	5	1			7
KS-619壁土		1					1
KS-621壁土				1			2
KS-624壁土			2	1			3
KS-633壁土			1				1
KS-635壁土		2					2
KS-649壁土			2				2
KS-650壁上		1					1
2段小口		185	218	49	61	6	556
計		470	576	96	7	2	1151

(5) レンガ (第20表)

レンガ2点出土した。ともにI区KS-593の整地上b(炭の層)からの出土である。

(6) 瓦 (第21表)

瓦は総計1,184点出土し、このうち丸瓦が237点、平瓦が677点で併せて全体の77%を占める。1・2区とも、多くは近代以降の層から出土している。丸瓦、平瓦を中心に軒丸瓦、軒平瓦、棟瓦、伏間瓦、輪違い、平板類など多様な瓦が出土している。

①軒丸瓦 4点出土した。瓦当文様の判別可能なものは28点である。文様構成は、1区が桐文1点(第55図12)、九曜文2点、三巴文15点、珠文三巴文8点である。2区は三巴文1点、珠文三巴文1点である。すべてI・II層からの出土である。

②軒平瓦 23点出土した。瓦当文様の判別可能なものは13点である。文様構成は、1区が菊花文3点、桔梗文3点、花菱文2点、梅文1点(第56図1)である。すべてI・II層からの出土である。2区は菊花文1点、桔梗文1点、花菱文1点である。III層からの出土が多い。I層から桔梗文1点が出土した(第56図15)。

③棟瓦 17点出土した。丸棟瓦15点、角棟瓦1点、不明1点である。うち1点図示した(第56図6)。

④棟瓦 主に棟に使用される瓦を棟瓦と総称する。26点出土した。内訳は、1区が伏間瓦5点、輪違い7点、面瓦21点である。すべて近代以降の層から出土している。2区は、面瓦2点が搅乱とIII層から出土した。伏則瓦1点(第60図102)、面戸瓦2点(第56図3・第60図97)、輪違い1点(第60図4)を図示した。

⑤飾り瓦 1区から詳細不明の1点が出土した(第60図104)。

⑥駒瓦 1区から駒駆39点、駒棟瓦5点が出土した。うち1点図示した(第60図103)。

⑦壇瓦 123点出土した。これは、平板、水切り、棟付平板、駒付平板の総数である。2点を除き、すべて1区から出土した。平板1点(第56図7)、水切4点、棟付平板3点、駒付平板6点が出土した。すべて近代以降の層から出土している。

⑧その他 この他、種別不明の瓦が2点出土した。うち1点図示した(第60図105)。

第21表 第21次調査出土瓦数量表

区	遺構・層位	丸瓦	平瓦	軒丸	軒平	棟瓦	伏間瓦	水切	軒端平	輪違	窓口	飾り	跡跡	鉄板	榜	半倒壁	水切	棟付平板	駒付平板	不明	計
	表揮																				2
I		167	239	11	8	5	1		1	1	1	15	2	27		2	1				417
		15	56	5	3					1	1	3	5	1			2	1			93
KS-593層上1		2	7			1															13
KS-592層+1		13	36	1		7	1	1	1	3	4		21								89
KS-593層上2		4	14								1	5	2		2						31
KS-592層+3		3	8	1		2							7								23
I	KS-593層上7	1	9																		11
	KS-593層土	68	247	13	5	3	3		2	5		11	2	33				2	1		265
	KS-593層地La	3	9							2			10								24
	KS-593層駒付d	1	2																		3
I区小計		219	623	32	18	17	5	1	7	11	1	39	5	107	1	4	3	6	2		1101
	表揮			1																	1
	掘丸	1			1																4
	I	7	24	1																	32
	II	5	11	1	2																19
	III	2	14		2																21
	KS-6180層+	1	1																		2
	KS-621層上	2																			2
	B	1	1																		2
2		18	54	2	5	0	0	0	2	0	0	6	2	0	0	0	0	0	0	83	
	2区小計		237	677	34	23	17	5	1	7	1	39	5	109	1	4	3	6	2		1184

(7) 金属製品（第22表）

32点出土した。内訳は煙管5点、ボタン2点、薬莢2点、鉄釘4点、銭貨10点、その他9点である。煙管は吸口3点、羅字（胴部）1点、火皿1点である。火皿1点を図示した（第56図12）。銭貨は一分金2点、寛永通宝6点、近代銅貨2点である。一分金は、1区I層の暗黒状遺構と2区KS-635の堆土から1点ずつ出土した（第56図9・10）。2区で出土したものには乾の字がみられ、宝永7年（1710）から正徳4年（1714）に鋳造された宝永一分金である。共伴遺物として17世紀末から18世紀初めの肥前磁器染付皿が出土している。寛永通宝は1区ではI・II層から古寛永3点、新寛永1点出土した。2区ではIII層上面から古寛永1点、新寛永2点出土した。新寛永2点は重なった状態で出土した。古寛永2点を図示した（第56図11・第60図111）。2区I層から二銭銅貨と一銭銅貨が1点ずつ出土した。1区IV層上面で鉄滓らしきものが2点出土した。

(8) ガラス・石製品（第23表）

ガラス68点、石製品4点出土した。ガラスはI・II層からの出土が多い。KS-593の整地a（花崗岩片を多量に含む層）、整地土b（炭の層）からも出土した。石製品は水晶1点、砥石1点、その他の石製品2点である。

(9) 木製品（第24表）

5点出土した。漆器の破片1点以外は、用途不明である。

第22表 第21次調査出土金属製品数量表

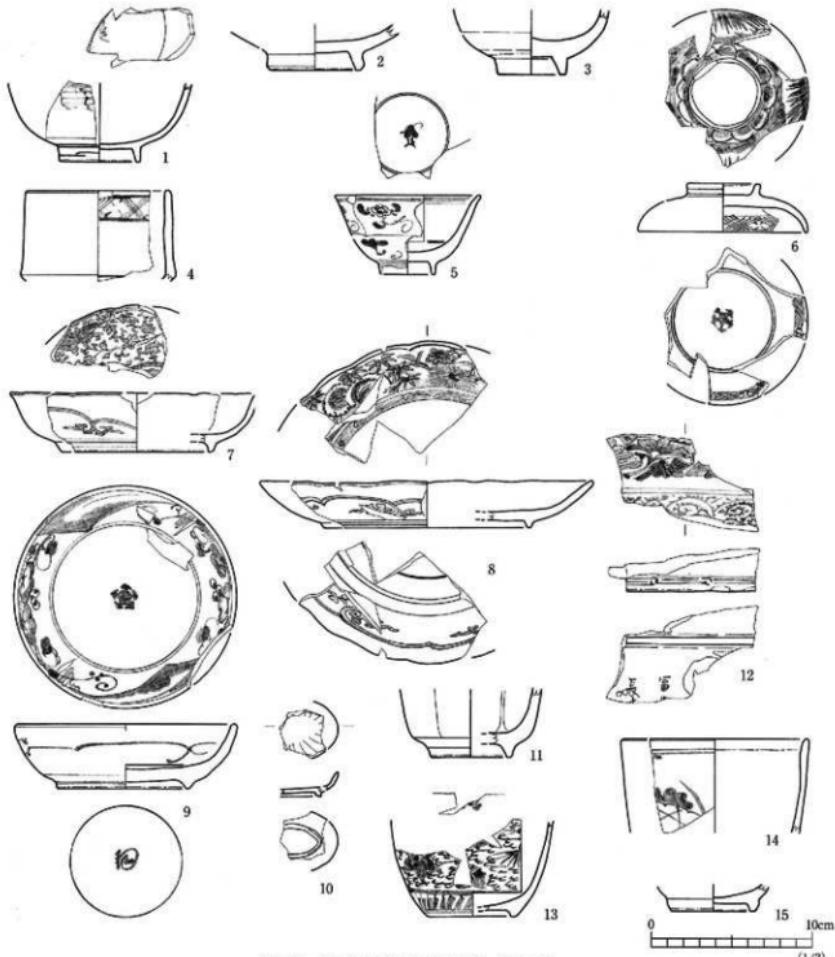
区	遺構・層位	銀器	鍍金	ボタン	薬莢	鉄釘	銭貨	その他	計
1	I	1	2	2		1	3	4	12
	II		1				1		2
	KS-669堆土2							1	1
	KS-593堆土a						1		1
	KS-593堆土b							2	2
	N							2	2
2	I区小町	3	2	0	2	5	9	9	21
	煙草			1					1
	II						2		2
	III	2	1	1	1	2			6
	KS-625堆土1						1		1
	KS-635堆土1						1		1
	2区小町	2	0	2	2	5	0		11
	計	5	2	2	4	10	9		32

第23表 第21次調査出土ガラス・石製品数量表

区	遺構・層位	ガラス	水晶	砥石	その他	計
1	I	53				53
	II		5			5
	KS-593堆地a	1				1
	KS-593堆地b	4				4
	I区小町	63	0	0	0	63
	煙草				3	3
2	I	1				1
	II	2				2
	III	1	1			2
	KS-616堆土1	1				1
	KS-633堆土1				1	1
2区小町	2区小町	5	1	1	2	9
	計	68	1	1	2	72

第24表 第21次調査出土木製品数量表

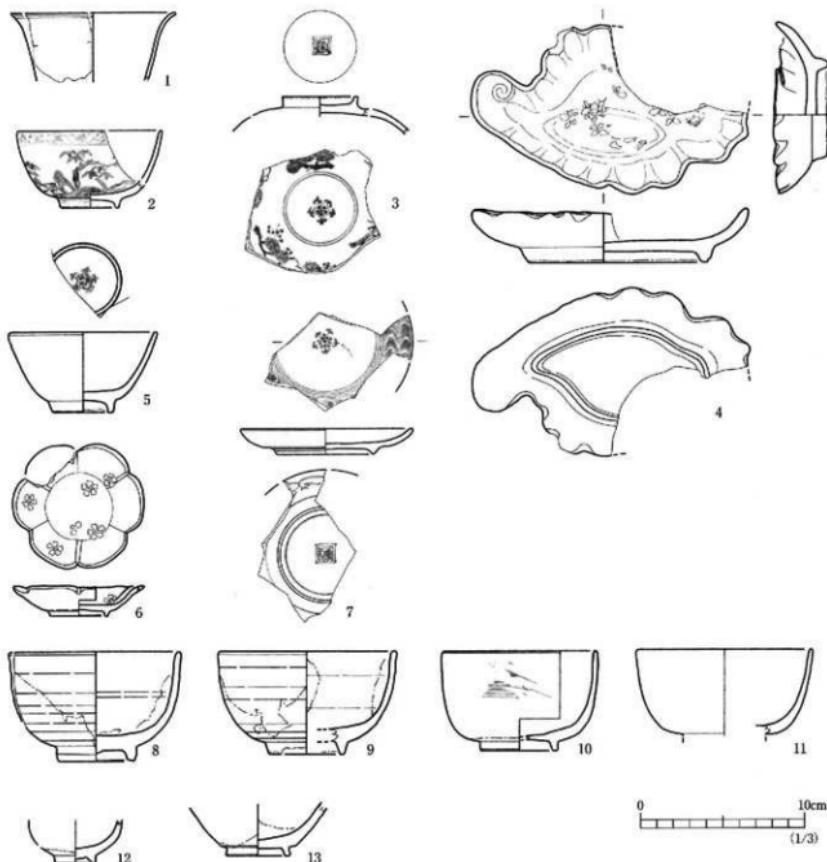
区	遺構・層位	漆器	その他	計
1	I	2		2
	KS-592堆土3		1	1
	1区小町	0	3	3
2	II		1	1
	III		1	1
	2区小町	1	1	2
計	II	1	4	5
	計	1	4	5



第51図 第21次調査1区出土磁器 (S=1/3)

第25表 第21次調査1区出土磁器観察表

番号	区	通番・層位	種類	生産地	器種	製作年代	口径 (mm)	底径 (mm)	厚さ (mm)	文様等	備考	写真
1 263	1	I	束付	肥前	碗	17世	-	(50)	(48)	唐草文？ 見込に文様有	油槌手底有	1
2 258	1	I	束付	肥前	碗	18世～中	-	(60)	(29)	外西(矛頭) 内面(透明白)		2
3 279	1	II	青磁	肥前	碗	17世	-	(42)	(40)	内面透明白(透け分子)		3
4 124	1	I	青磁束付	肥前	碗形	18世	90	-	(56)	外腹青磁輪 内面四方脚文(見込無縫)		4
5 357	1	I	束付	肥川(筑波)	湯呑	19世	(90)	(34)	(45)	乳足文、見込文有		5
6 279	1	II	束付	肥前	碗	18世	(104)	-	(30)	足込 三瓣花(コンニャク印模) 四方脚文		6
7 258	1	I	束付	肥前	輪花瓶	17世～18世前	(156)	(64)	30	輪花平底 瓶足文		7
8 352	1	I	束付	肥前	瓶	18世	(200)	(128)	29	里に枝文文 外面 條文		8
9 262	1	I	束付	波良見	瓶	18世後～19世初	136	82	(40)	綱文+葉文 文込コシニャク印模 五瓣花 高台内 溝横部 裏文被 瓶足文		9
10 329	1	I	白釉	肥前	輪花瓶	18世前	-	-	15	輪内空心形	内面側内 高台貼り有	10
11 327	1	I	青釉	肥前	角瓶	18世～19世初	-	(50)	(43)		六角形	11
12 262	1	I	束付	肥前	瓶	18世	-	-	(27)	足込 轮花文 伸脚 脚窓 幕台幕 文？	目附1	12
13 334	1	I	束付	肥前	瓶	18世後	-	(52)	(59)	六瓣花文 瓶底付近透明白 文筒底 足込 手握き五瓣花 高台内脚有		13
14 324	1	I	束付	肥前	輪花瓶	18世	(116)	-	(58)	草文	口唇部漏油	14
15 258	1	I	青釉	肥前	瓶	18世後	-	(32)	(17)	内面輪脚		15



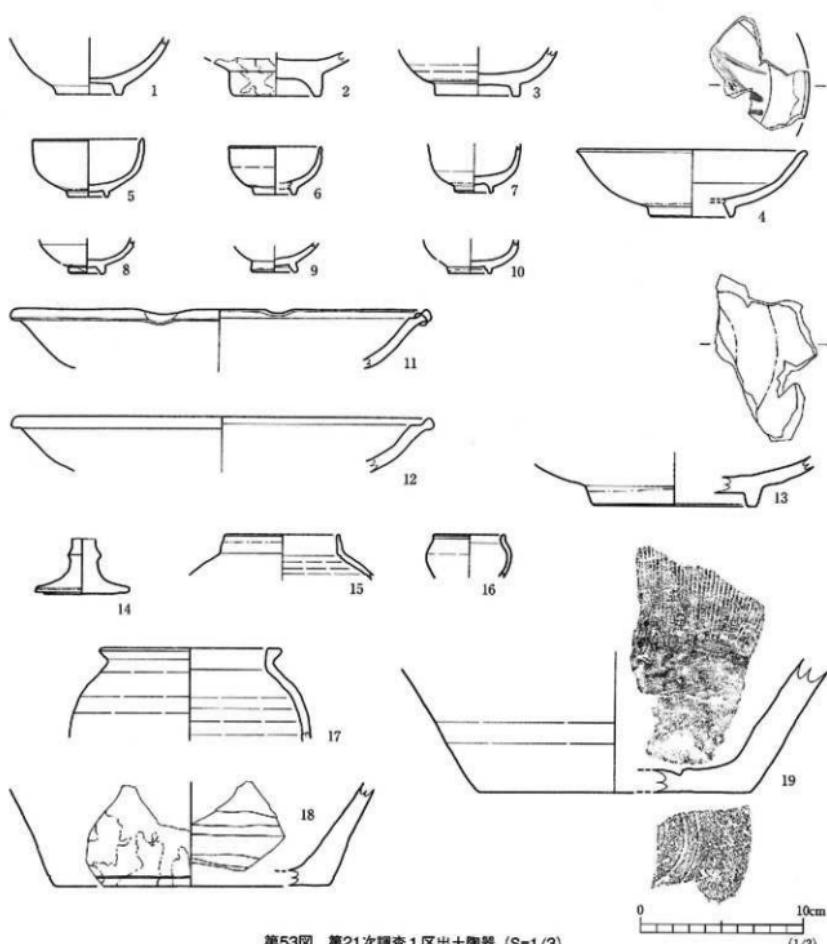
第52図 第21次調査2区出土磁器・陶器1 (S=1/3)

第26表 第21次調査2区出土磁器観察表

番号	遺物 名	区	造錬・焼成	施 装	生産地	器 形	製作年代	口径 (mm)	底径 (mm)	厚さ (mm)	文 標 等	備 考	写真
1 41 2	■a		南村	肥前	小野	—	100	—	(44)		漆繪茶碗有	18	
2 119 2	KS-635埋土		南村	肥前	鏡	18世	(88)	36	18	楓葉文(家+樹木) 四方唐文 裏面平花文		19	
3 301 2	II		青磁集村	肥前	鏡	18世	(106)	—	(22)	藍村鏡 長官唐文 高台内 二重舟形模様有 見込 手捺き五瓣花		20	
4 32 2	KS-604上廻		百福	佐世瓦	変形瓶	17世中	169× 107	110×60	33	青釉白繪草花文		21	
5 40 2	■a		青磁集村	肥前	鏡	18世	(90)	(36)	50	五瓣花文		22	
6 114 2	■a		白磁	肥前	花瓶	17世末~18世初	79	34	19	白頭白繪模花文輪花組 直打上絞付 攲文? 四重脚縁 見込手捺き五瓣花		23	
7 117 2	KS-635埋土		白付	肥前	盤	17世末~18世初	(105)	(60)	16	高台内二重舟形模様有	口縁		

第27表 第21次調査2区出土陶器1観察表

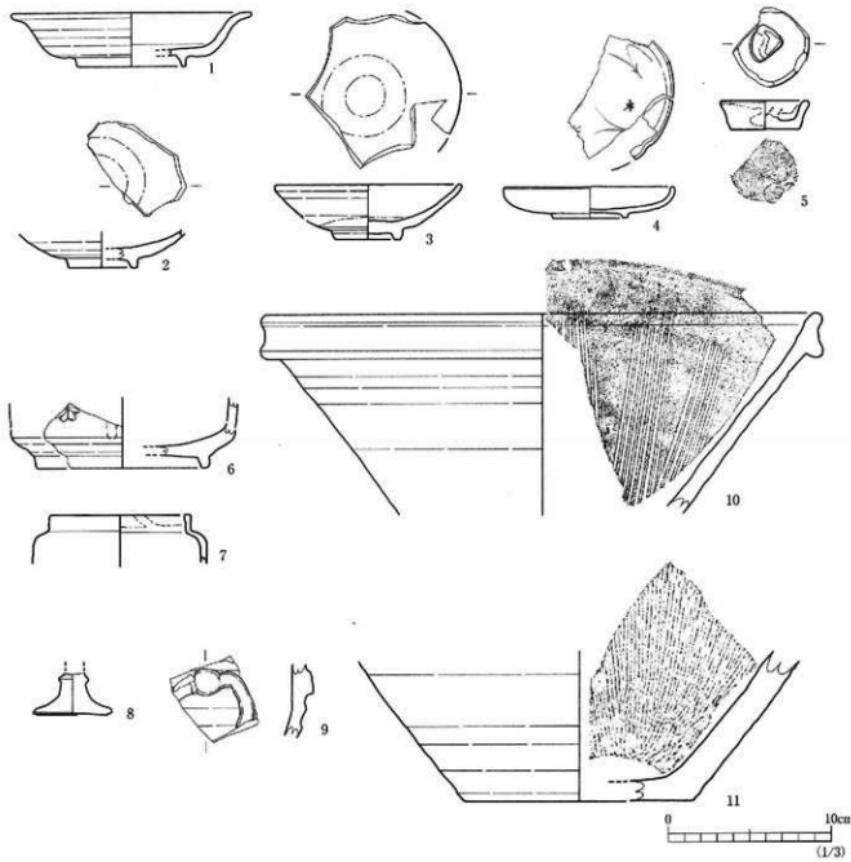
番号	遺物 名	区	造錬・焼成	生産地	器 形	製作年代	口径 (mm)	底径 (mm)	厚さ (mm)	文 標 等	備 考	写真
8 34 2	■a		肥前	鏡	17世後	(104)	46	68	白地	白化粧土の抜け剥け	52	
9 42 2	■a		肥前	鏡	17世後	(110)	(46)	64	白地	白化粧土の抜け剥け	53	
10 51 2	■a		肥前	鏡	17世末~18世初	(96)	(48)	62	白化粧丸鏡	京焼鏡用器	54	
11 53 2	■a		肥前	鏡	17世末~18世初	(106)	—	(52)	白化粧丸鏡?	京焼鏡用器	55	
12 50 2	■a		大窯相馬	小鉢	18世	—	(24)	22	白釉		56	
13 279 2	■a		大窯相馬	刷毛形鏡	18世	—	(40)	(33)	灰釉	片身替り 深し剥け 滑け分け	57	



第53図 第21次調査1区出土陶器 (S=1/3)

第28表 第21次調査1区出土陶器観察表

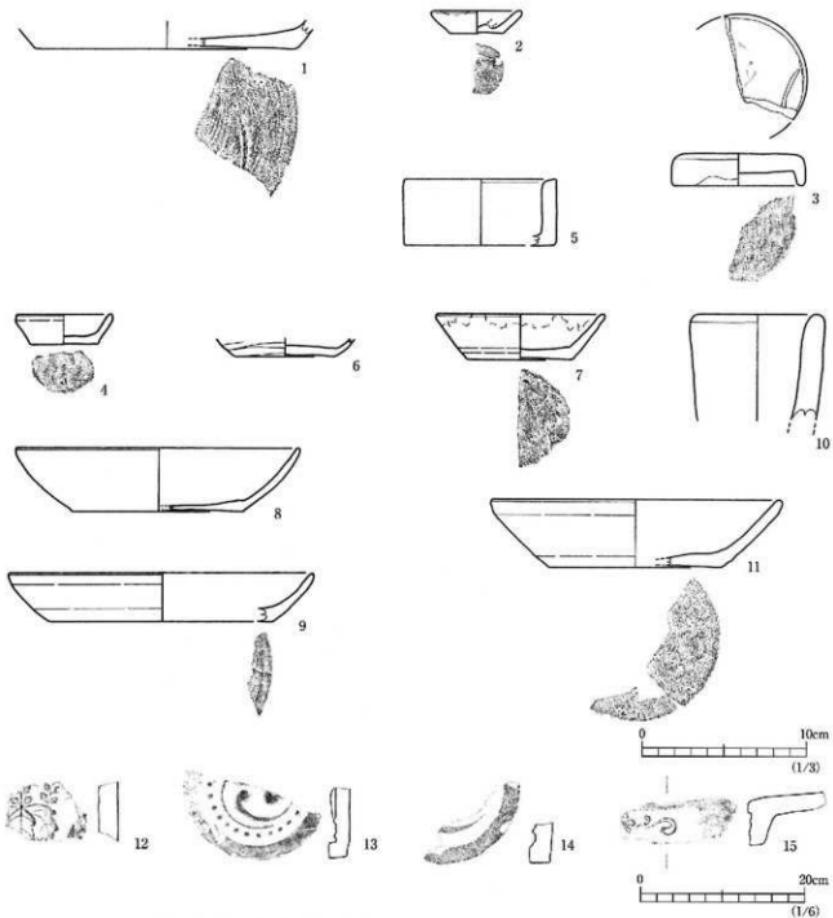
番号	出場 場所	区	遺跡・層位	生産地	器種	製作年代	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	特徴・文様等	番号	写真
1 263	1	I	大野田馬	輪	18c	-	(40)	(35)	灰釉	28		
2 263	1	I	大野田馬	輪	17c後	-	64	(27)	灰釉輪脚板	29		
3 431	1	ICS-602敷地土	肥前	輪	18c	-	(52)	(20)	灰釉	30		
4 228	1	I	大野田馬	輪杯盤	19c前～中	(140)	(52)	41	白滑輪鉢盤	31		
5 228	1	I	大野田馬	小杯	18c?	(68)	26	36		32		
6 323	1	I	大野田馬	小杯	18c前～19c前	(36)	(26)	30	白釉船	33		
7 311	1	I	大野田馬	小杯	18c前～19c前	-	24	(30)	白釉船	34		
8 263	1	I	-	小杯	18c前～19c前	-	22	(22)		35		
9 323	1	I	大野田馬	小杯	18c前～19c前	-	(28)	(18)	灰釉	36		
10 263	1	I	大野田馬	小杯	18c前～19c前	-	26	(21)	白滑船	37		
11 263	1	I	小野田馬	大皿	18c後	(255)	-	(36)	灰釉波音色釉(灰釉系)	38		
12 323	1	I	小野田馬	大皿	18c後	(256)	-	(33)	灰釉波音色釉(灰釉系)	39		
13 323	1	I	小野田馬	大皿	18c後	-	(100)	(32)	灰釉波音色釉(灰釉系)	40		
14 263	1	I	大野田馬	仏頭盤	18c	-	57	(34)	灰釉	41		
15 259	1	I	大野田馬	土瓶	19c前	(70)	-	(28)	白滑瓶	42		
16 311	1	I	大野田馬	豆甌	19c前	(44)	-	(26)	灰釉(特殊)	43		
17 125	1	I	-	小盤	-	-	(110)	-	波紋	44		
18 454	1	I	曾根古	甌	-	-	-	-		45		
19 418	1	II	甌	杯形	18c～19c	-	(166)	(83)	灰釉			



第54図 第21次調査2区出土陶器2 (S=1/3)

第29表 第21次調査2区出土陶器2観察表

番号	器物 番号	区	遺構・部位	生産地	器 物	製作年代	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	輪郭・文様等	目 標	写真
1	495	2	B	窓戸先邊	縦長瓶	17c	144	66	33	黄石味	-	61
2	111	2	夏a	更滑	瓶	17c後-18c前	-	(42)	(23)	青釉味、内面削除輪、外腹灰褐色か?	見出蛇の目模様	62
3	8	2	夏a	更滑	瓶	17c後-18c前	(114)	40	34	青釉味、内面削除輪、外腹灰褐色か?	見出蛇の目模様	63
4	593	2	B	大堀前馬	縦長瓶	18c前	(101)	(66)	19	灰褐色輪(灰角文?)	-	64
5	475	2	B	浮室馬	證明皿	17c	(54)	(60)	18	無	灰筋に斜溝直出し、凹凸系切り	65
6	519	2	I	不明	粗花文瓶	18c?	-	(106)	(43)	無輪、全周旋輪(菱付も)	-	66
7	513	2	B	窓戸先邊	行注ぎ?	18c前	(85)	-	(30)	灰輪、内外曲旋輪	-	67
8	484	2	B	大堀前馬	仏頭器	18c	-	48	(26)	灰輪	底部磨擦	68
9	22	2	夏a	不明	耳付き瓶生	近鉢	-	-	(44)	灰輪	-	69
10	16	2	三中	不明	瓶鋺	18c前	(240)	-	(123)	灰輪	裏目8条革目、外腹灰褐色馬	70
11	529	2	I	優	罐鋺	18c前	-	(138)	(92)	灰輪	-	71



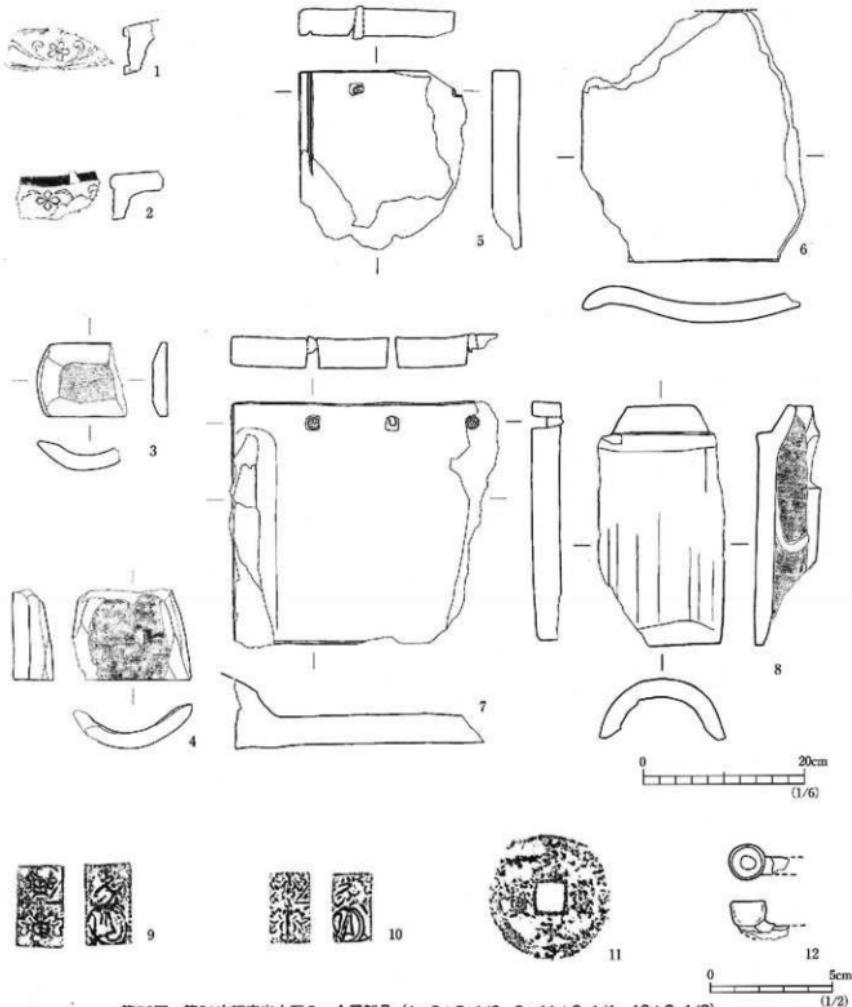
第355図 第21次調査出土土師質土器・瓦 1 (1~11: S=1/3 12~15: S=1/6)

第30表 第21次調査出土土師質土器観察表

番号	器物 番号	種類	母核	区	遺跡・層位	口径 (mm)	底径 (mm)	厚さ (mm)	参考	写真
1 200	土師質土器	短形皿	1	I	-	(160)	(17)	内側足部一部に溝横付帯 内外曲面クロナザ 底部周縁系切り	76	
2 264	土師質土器	短形皿	1	I	(56)	(20)	14	油焼付帯 足部有 内外面クロナザ 底部周縁系切り	77	
3 416	土師質土器	蓋	1	II	(80)	-	20	内面有目皿 外面甲組墨書き 線彫刻 18cmか?	78	
4 49	土師質土器	短形皿	2	IIIa	(58)	(42)	19	内外面クロナザ 油焼付帯 底面周縁系切り	79	
5 333	土師質土器	蓋	1	I	(92)	(90)	41	堅物し成形皿 内面ミガキ 底面ナザ	80	
6 45	土師質土器	蓋	2	IIIa	-	62	(11)	クロロ成形皿 外面底面ミガキ	81	
7 39	土師質土器	盃形皿	2	IIIa	(102)	(56)	28	口唇部に油焼付帯 内外面リクンナザ 成形系切り	82	
8 17	土師質土器	蓋	2	IIIa	(172)	(101)	39	クロロ成形 内外縁ミガキ	83	
9 33	土師質土器	蓋	2	K5-606	(184)	(139)	30	内外面クロナザ 底面周縁系切り	84	
10 372	土師質土器	短形皿	2	IIIa	(80)	-	(65)	粘土巣巣合せ付か? 内面底面ミガキ 17cm~18cm	85	
11 88	土師質土器	III	2	KS-601上層	(170)	(104)	42	内外面クロナザ 底面周縁系切り	86	

第31表 第21次調査出土瓦1観察表

番号	器物 番号	種類	区	遺跡・層位	文様	計測値 (mm)	重量 (g)	参考	写真
12 343	円丸瓦	I	I	解	瓦当形 (164)	周縁幅20.1	3029		88
13 175	円丸瓦	I	II	北文二四	瓦当形 (166)	周縁幅19.7	3075		89
14 11	円丸瓦	I	III	三巴	瓦当形 (145)	周縁幅21	2452		90
15 506	円平瓦	-	表法	粘板	瓦当幅 (147)	-	434		92



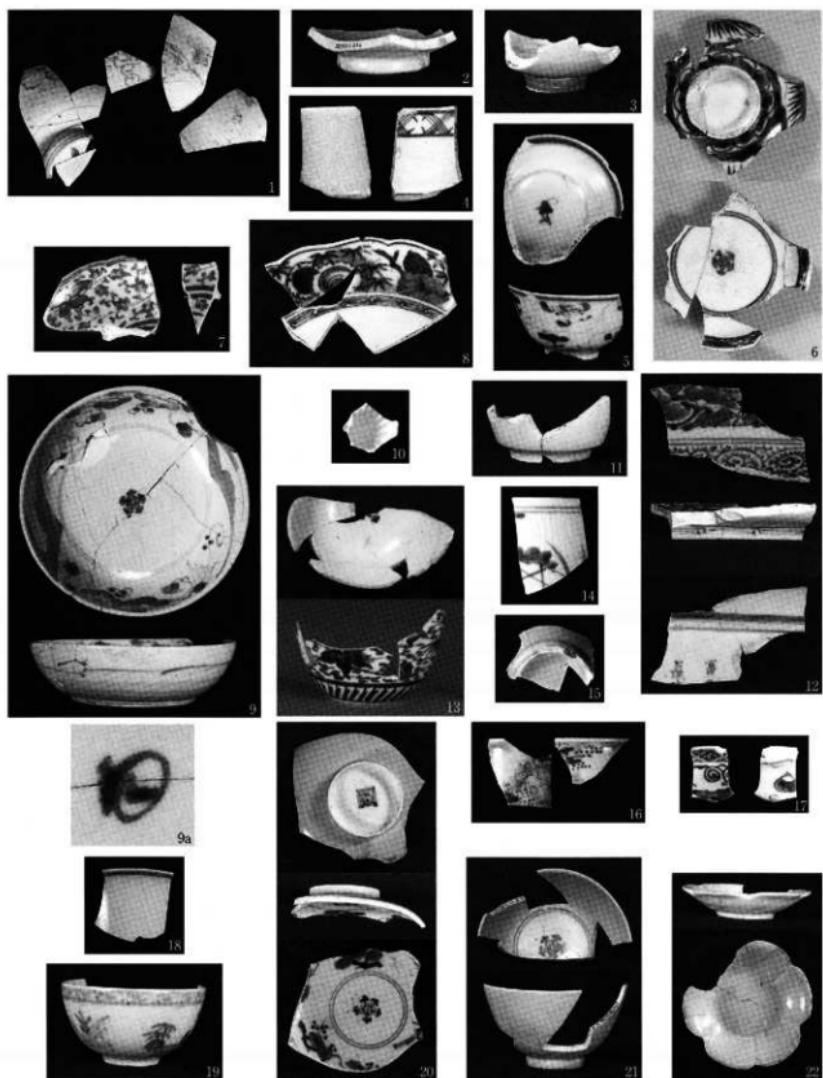
第56図 第21次調査出土瓦2・金属製品 (1~8:S=1/6 9~11:S=1/1 12:S=1/2)

第32表 第21次調査出土瓦2観察表

番号 番号	遺物 名	区 域	遺構・層位	文様	計測値 (mm)	重量 (g)	備考	写真
1 298	井平瓦	1	I	無	瓦当幅 (138)	191.4		92
2 340	井平瓦	2	II	瓦当・頭部 瓦当幅 (124)		322.2		93
3 299	西瓦	1	I	無	全長 (91) 厚 2.8	115.3		94
4 298	輪造い	1	II	無	全長 (110) 厚 2.0	457.5		95
5 4	平版	1	I	厚 2.4		1960	水道・貯糞存	96
6 191	瓦瓦	1	II	無	全長 308 厚 2.1	2800		97
7 197	軒付平版	1	II	全長 (305) 厚 2.5	5000	封瓦存		98
8 121	丸瓦	1	KS 592 地下	無	全長 298 厚 2.1	1900		99

第33表 第21次調査出土金属製品観察表

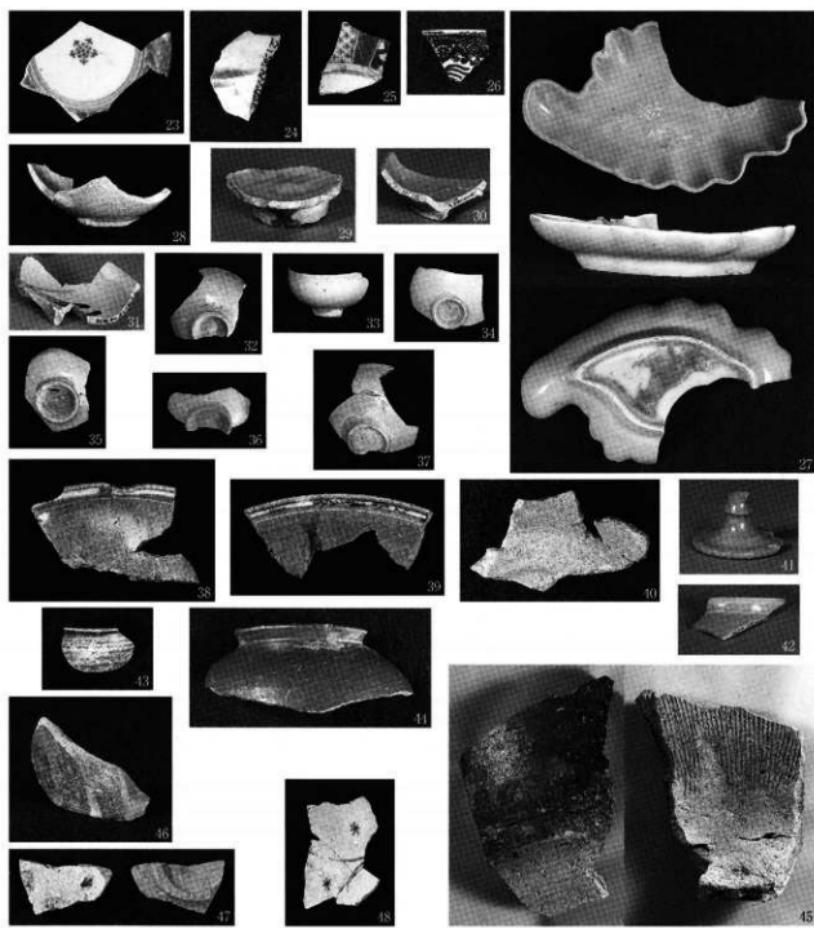
番号	遺物 名	種類	区 域	遺構・層位	法 量 (mm)	重 量 (g)	備 考	写 真
9 7	古鏡	1	I	全径 17 扇 9		4.41	一分金 (空鏡)	107
10 116	古鏡	2	IIa	全径 15 扇 8		2.34	一分金 (空本・数字一分)	108
11 31	古鏡	2	IIa	外径 25.0 中径 6.7		2.33	把水酒甌 (古鏡)	109
12 199	經營 (筆筒)	2	IIa	全径 (24) 火薬印 14		2.61		110



第57図 第21次調査出土磁器 1 (S=1/3 9a : S=1/1)

第34表 第21次調査出土磁器 1 観察表

序号	遺物番号	区	遺構・居住	種類	生産地	器種	製作年代	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	文様等	備考
16	394	1	I	釉付	肥前	小杯	17c後～18c前	-	-	-	青文	
17	106	1	KS-5935敷地土z	釉付	肥前	盆	18c後か	-	-	-	四方神文 瓢箪など	



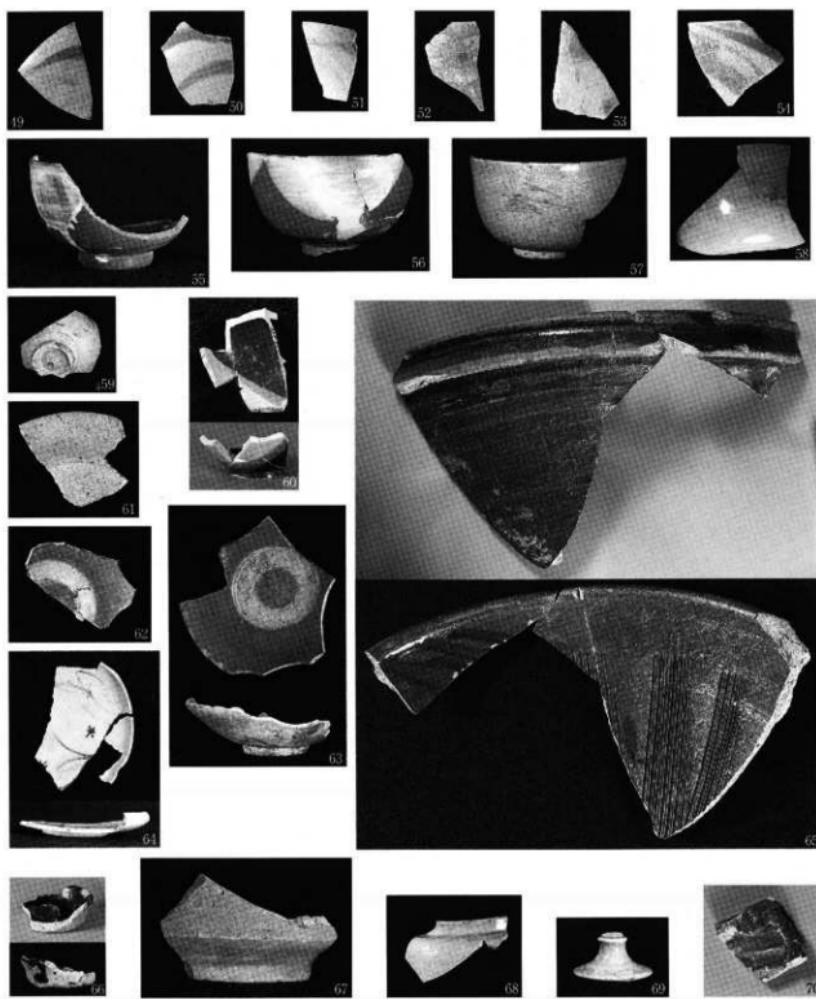
第58図 第21次調査出土磁器2・陶器1 (S=1/3 24 : S=1/1)

第35表 第21次調査出土磁器2観察表

年月 番号	遺物 区	遺構・層位	性質	生産地	器種	製作年代	口径 (mm)	底径 (mm)	厚さ (mm)	文様等	備考
24 485 2	II	色絵	盤	人形か?	17c~18c	-	-	-	-		
25 551 2	II	朱村	把柄	庄重紋	18c末~19c初	-	-	-	-	磁器の文様有り	梵字
26 585 2	I	朱村	ヨーロッパ	カップ	19c後	-	-	-	-	青磁	朱質磁器

第36表 第21次調査出土陶器1観察表

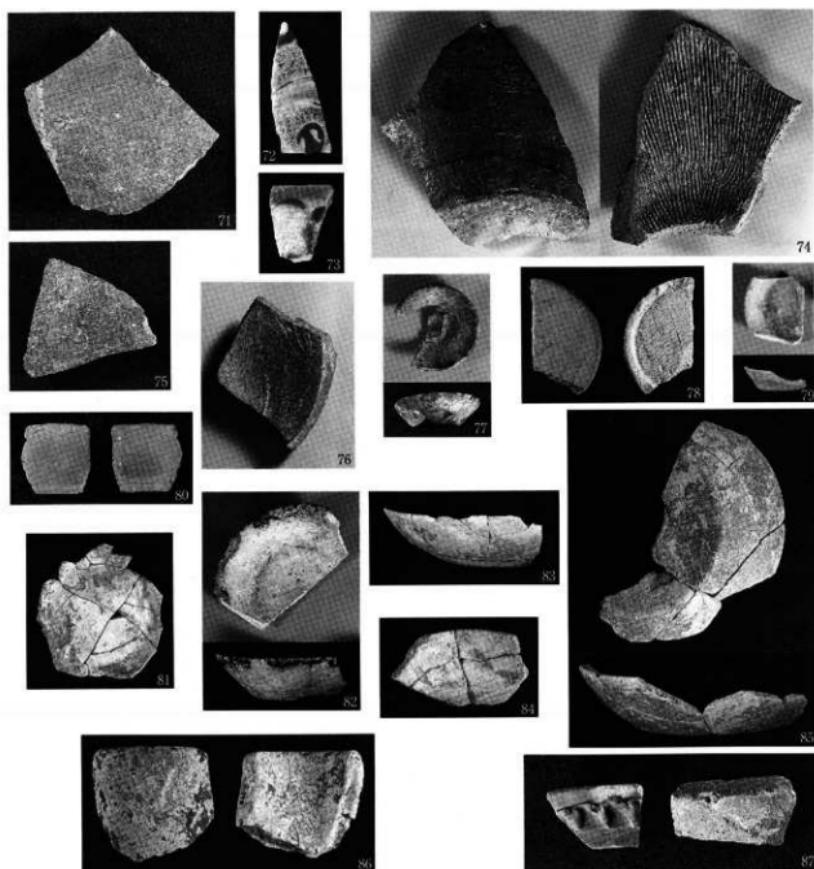
年月 番号	遺物 区	遺構・層位	性質	生産地	器種	製作年代	口径 (mm)	底径 (mm)	厚さ (mm)	文様等	備考
47 331 1	I	I	溝漆	底	17c前	-	-	-	-	無石綿 鉄鉢	見込みに日漆 新土日 灰色の約土
48 138 1	I	I	大蛇相馬	底	19c後	-	-	-	-	松葉文 長鉢	



第59図 第21次調査出土陶器2 (S=1/3 49~52 : S=1/2 53・54 : S=1/1)

第37表 第21次調査出土陶器2観察表

写真 番号	遺物 名	区	遺構・部位	年齢期	器 種	製作年代	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	釉者・文様等	備 考
49 271	I	II	底・側面	新	碗	18c	-	-	-	色絵平文	
50 411	I	I	底・側面	新	碗	18c	-	-	-	色絵平文	
51 323	I	T	底・側面	新	碗	18c	-	-	-	色絵平文	
52 323	I	T	底・側面	新	碗	18c	-	-	-	色絵平文	
53 140	I	T	底・側面	新	碗	18c	-	-	-	色絵平文	
54 421	I	I	底・側面	新	碗	18c	-	-	-	色絵平文	



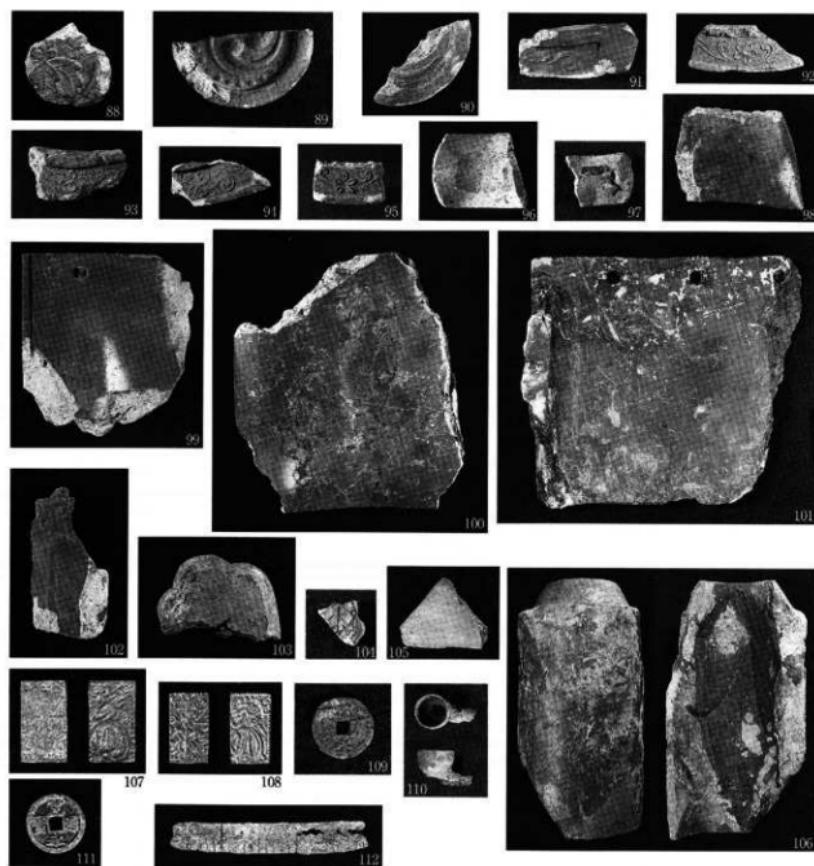
第39図 第21次調査出土陶器3・土質質土器・瓦質土器 (S=1/3 72・73: S=1/1)

第38表 第21次調査出土陶器3観察表

写真 番号	遺物 番号	区	遺構・部位	生産地	器種	製作年代	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	釉系・文様等	備考
71	430	1	Ⅲ	不明	大甌	江戸時代	—	—	—		統括陶器
75	430	1	Ⅲ	不明	大甌	江戸時代	—	—	—		統括陶器
72	513	2	Ⅲ	室・火葬	碗	18c	—	—	—	色絵	
73	306	2	KS-424	室・火葬	碗	18c	—	—	—	色絵	

第39表 第21次調査出土瓦質土器観察表

写真 番号	種類	器種	区	遺構・部位	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	備考
87	瓦質土器	火葬	2	Ⅰ	—	—	—	江戸時代
87	瓦質土器	火葬	2	Ⅰ	—	—	—	江戸時代



第61図 第21次調査出土瓦 (S=1/6)・金属製品 (S=1/2 107・108: S=1/1)

第40表 第21次調査出土瓦観察表

年次	遺物 番号	種類	区	遺跡・居住	文様	計測値 (mm)	重量 (g)	備考
94	253	野字瓦	2	II	菊花	-	123	
95	541	野字瓦	2	Ⅲa	船波	-	179.1	
97	64	圓字瓦	1	I	-	廣590 厚 (113)	213.4	
102	219	伏闇瓦	1	I	-	-	343.4	
103	286	騎馬	1	III	-	-	940.9	
104	81	四字瓦	1	I	小字 (59) 線 (51)	長さ (59) 幅 (51)	50.3	
105	193	その他	1	II	-	-	155	

第41表 第21次調査出土金属製品観察表

年次	遺物 番号	種類	区	遺跡・居住	計測値 (mm)	重量 (g)	備考
111	2	古鏡	1	I	外径24.8 径25.2	334	東北諸王 (古奈本)
112	399	金尺	1	KS-593整地土	長さ (82) 寸 (13)	374	

## 5.まとめ

第21次調査では、以下①～⑥の成果が得られた。

① 1区の調査ではKS-593段切遺構を検出した。段切遺構の造成面からKS-594溝跡やKS-595土坑が検出され、出土遺物などから江戸時代の可能性が高い。宮城県図書館に所蔵されている「仙台藩内神社仏閣等作事方役所修繕ニ属スル場所調」の「酒藏」部分に三棟の建物と井戸が描かれている（第40図 絵図からみた造酒屋敷参照）。上から主屋、作業場、米蔵と考えられる。今回の調査成果から段切遺構は造酒屋敷の主屋（樋森家の住宅）と考えられる建物に合うように平場を造成したと推測される。南部で確認された段差は2区のある南側に統合しており、作業場や米蔵は段の上面に建てられていたと考えられる。段切遺構の造成面については、次年度の調査で主屋と考えられる建物跡の確認と併せて進めていく予定である。

② 段切遺構の造成面に複数の整地層（調査区北部で花崗岩片を敷いた状態で検出した整地土aや調査区南部で炭が堆積した整地土b）を確認した。明治時代以降、建物が解体された後も整地土aの上面で検出したKS-589土手跡やKS-590溝跡を構築しながら使用されたと考えられる。また、KS-592溝跡は2時期の掘り込みが確認した。整地土b上面で検出した古い段階の溝は調査区北部の土手や溝と構築されたのが同時期の可能性がある。さらに段切遺構を埋め立てた後に新しい段階の溝を掘り直して再利用されたことが考えられる。

③ 2区の調査ではⅢ層上面で礎石、炉跡、集石遺構、木構などを検出した。調査区北部から中央部にかけての一連の遺構群については、位置的に作業場（酒の醸造を行う建物）に関わる遺構の可能性があると推測される。KS-597～600の礎石やKS-618・624などの柱穴は建物基礎の一部である。KS-602・603炉跡は酒の原料を加工するため用いられた可能性がある。KS-604集石遺構やKS-606木構は作業に伴う給排水に関わる遺構と考えられる。KS-604から北側にかけて陶磁器等の遺物の出土が多いのは建物の内部である可能性を示す。この遺構群には切り合い関係があるため、複数の時期的な変遷があることが考えられる。Ⅲ層上面からは19世紀以降の遺物がほとんど見られず、Ⅲ層の一部は近代以降に削平を受けたと考えられる。

④ 2区南部で検出したKS-601礎石は位置的に米蔵（酒の原料である米を貯蔵する建物）に関わる遺構の可能性があると推測される。

⑤ 1区のIV層上面からKS-596を検出し、北側のIV層上面では17世紀後半以降の肥前陶器青緑釉皿片1点が出土している。段切遺構の検出面では18世紀後半の肥前磁器染付鉢片1点が出土した。このことからIV層は段切遺構よりも古い時期の生活面であると考えられる。また、2区南部で深掘りを行ったトレンチにおいて、Ⅲ層下層に西側が高く、東側に傾斜する段差を確認した。これについても下層にⅢ層上面検出の遺構よりも古い時期の生活面があった可能性が考えられる。

⑥ 遺物としては、近世の整地層と考えられるⅢ層上面から18世紀代を中心とする磁器、陶器の他、土師質土器、瓦質土器、瓦、古錢などが出土した。

## VI 第22次調査

### 1. 調査の経緯

第22次調査として本丸北西壁石垣E面の石垣測量を実施した。昨年度実施した第19次調査のC面及びD面の北側で詰門跡に延びるE面は、詰門跡から西門跡にかけて位置する石垣の中でも最も広い立面積を持つ面である。

平成20年12月10日から12月19日にかけて石垣の除草作業を行った。目立つ草木の除去のみのため、石材表面や天端には苔や草が残り、形状が不明瞭な部分もある。測量はレーザーを用い、12月24日と1月12日に基準点設置、12月24日と1月21日に測量とオルソ画像用の写真撮影を実施した。レーザーは、地上からのみ照射した。なお、石垣の観察には仙台城跡調査指導委員である北垣聰一郎氏のご教示を得た。

### 2. 測量結果の概要

#### E面

・天端の長さ：約61.1m、下端の長さ：約60.8m、D・E面入隔部：約7.25m、E・F面出隔部：約5.98m。

・E・F面出隔部から両側に約20m付近までは切石を使った横目地の通る布積で、勾配は63～64度である。E・F面出隔部は算木積みで、勾配は約73度であり、天端付近は約75度である。



第62図 石垣測量調査位置図（○は測量範囲）



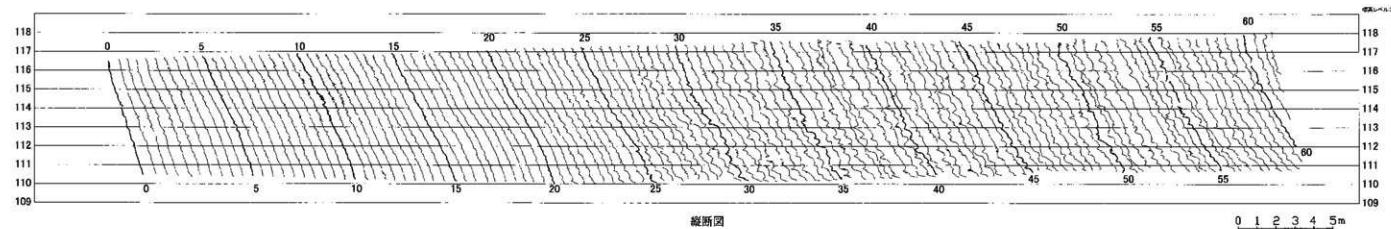
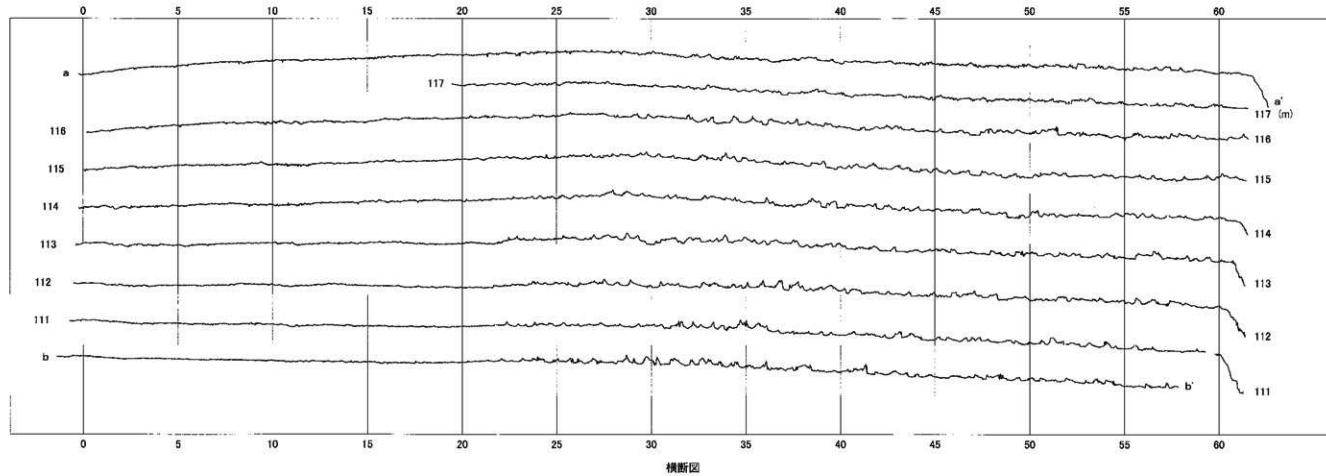
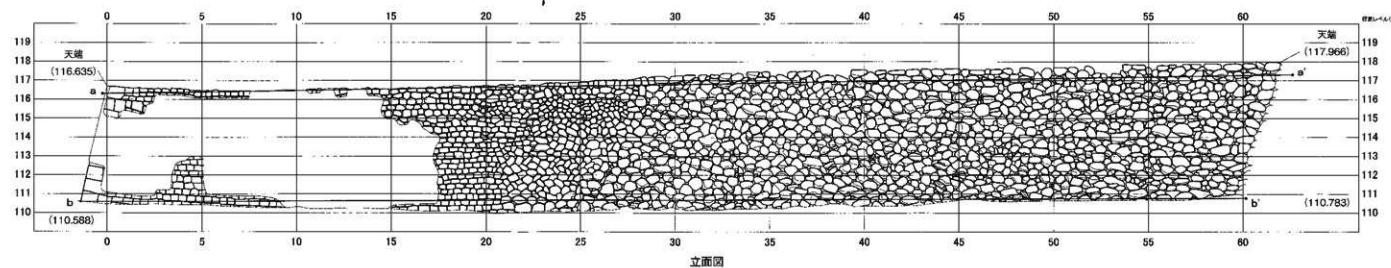
第63図 石垣測量調査位置詳細図

E・F面出隔部から20～30m付近で落とし積みによる積み直しを行った箇所がある。昭和14年（1939）頃の「宮城縣護國神社御造営敷地図」（宮城県公文書館蔵）にE面の一部が崩れた状況が描かれており、その後の石垣修復箇所にあたると考えられる。25～30m付近からD面にかけては自然石を使った野面積みで、勾配は60～70度である。

・35m付近からD面にかけての下層部分（110～113m）はノリ勾配であり、礎石の長軸が正面に向いて水平化していることから、古い時期の石垣である可能性が考えられる。中・上層部分（113～118m）では縱石積みが2箇所で見られ、積み直しと考えられる。また、下層部分よりも上部が内傾しており、輪取りではない。

・中層（113m付近）より上の石垣には孕み出しと陥没が見られる。

・D・E面入隔部付近の天端の高さが約7mあるが、E・F面出隔部の天端は5.98mと布積の石垣の方が天端が低くなっている。



第64図 仙台城本丸跡北西壁石垣E面立面図・横断図 S=1/200

0 1 2 3 4 5m



E面 全景（北から）



E面 全景（南西から）



E・F面 出頭部（北から）



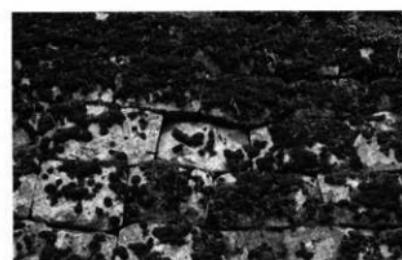
D・E面 入頭部（西から）



E面 切石積み・野面積み（南西から）



E面 切石積み・野面積み（西から）



E面 繕石陥没状況（西から）



レーザー測量風景（南西から）

## VII 総括

本年度は仙台城跡遺構確認調査の第2期5ヵ年計画の3年目であり、本丸大広間内部南半の遺構確認調査（第20次）、造酒屋敷跡の遺構確認調査（第21次）、本丸北西壁の石垣測量調査（第22次）を行った。

これまで大広間跡の調査では、その位置や規模、柱間（6尺5寸基準）等を確認している。

昨年度の第17次調査は、大広間跡内部北半における遺構確認を目的として実施した。調査区は「上々段の間」、「上段の間」、「孔雀の間」、「檜の間」などにあたる場所である。大広間にかかる礎石跡および礎石を新たに17基検出した。検出された礎石跡について、礎石間の距離を測定した結果、「6尺5寸」が柱間寸法の基準となっていることを再確認した。また、調査成果と『御本丸大広間地絵図』が、礎石跡の検出位置と絵図が示している柱位置が概ね一致していることが検証された。大広間の整地層下に砂礫を主体とする層を検出した。大広間に先行する建物に伴う石敷き造構もしくは、大広間建築時の整地に関わる地業かが検討課題となった。

今年度の第20次調査は、大広間跡内部南半における遺構確認を目的として実施した。今回の調査区は「裏上段の間」から「鶴の間」、「鷹の間」、「虎の間」にあたる場所である。大広間にかかる礎石および礎石跡を新たに45基検出した。そのうち、これまでの調査で確認された礎石跡より小さい東柱の礎石および礎石跡を21基検出した。大広間の間取りや各部屋の配置を検討する上で重要な成果が得られた。市有地外である「鹿の間」部分を除き、大広間のはば全容を調査したことになり、8次にわたる大広間跡の調査は一応の終了となる。今後は、必要に応じて補足調査等を行い、これまでの調査成果に基づいて大広間の構造などについて検討する予定である。昨年度に引き続き、大広間の整地層下に砂礫を主体とする層を検出した。大広間跡の外側で検出された石敷き造構とは特徴が異なり、雨落ち溝跡の外側にまで広がらないことから、大広間の中でしか見られない層であると考えられる。ただし、下層の調査が十分ではないことから、大広間に先行する建物に伴う石敷き造構もしくは、大広間建築時の整地に関わる地業の両面の可能性を考えておく。整地層下において、礎石と考えられる遺構が1基検出されていることから、大広間に先行する遺構群については今後とも検討していく必要がある。

第21次調査は、造酒屋敷跡（1区・2区）に関する遺構の確認を目的として実施した。1区では段切遺構を検出した。今回の調査成果から段切遺構は、造酒屋敷の主屋と考えられる建物に合うように平場を造成したと推測される。南部で確認された段差は2区のある南側に統合しており、作業場や米蔵は段の上面に建てられていたと考えられる。段切遺構の造成面に複数の整地層を確認した。明治以降に建物が解体された後も土手や溝を構築しながら使用されたと考えられる。主屋の位置や規模については、次年度以降の調査で確認する必要がある。2区では礎石、炉跡、集石遺構、木棧などを検出した。一連の遺構群については、作業場に関わる遺構であると推測される。この遺構群には切り合い関係があるため、複数の時期的な変遷があることが考えられる。調査区南部で検出したKS-601礎石は米蔵に関わる遺構であると推測される。作業場や米蔵の規模や配置については今後の検討課題である。

第22次調査は、本丸北西壁石垣E面で石垣測量調査を実施した。本丸詰門から西門にかけて石垣が残されており、その観察によって仙台城本丸跡における石積み技法の変遷を解明し得ると考えられる。今後も、石垣の現状の記録化を進めていくことが必要である。

## 参考文献

- 小倉強 「松島瑞巌寺と仙台城大広間」『仙台郷土研究』第2卷 第12号昭和7年（1932）
- 小林清治編 「仙台城と仙台領の城・要害（日本城郭史研究叢書2）」昭和57年（1982）
- 小林清治 「伊達政宗」昭和34年（1959）
- 佐藤巧 「仙台城居館の変遷とその構成・機能」『近世武士住宅』昭和54年（1979）
- 西和夫 「建築技術史の謎を解く（続・工匠たちの知恵と工夫）」昭和61年（1986）
- 西和夫 「図解古建築入門」平成3年（1991）
- 仙台市教育委員会 「仙台城」昭和42年（1967）
- 仙台市教育委員会 「仙台城三ノ丸跡」昭和60年（1985）
- 仙台市教育委員会 「仙台城址の自然」平成2年（1990）
- 東北大隈文化財調査研究センター 「年報1～20」昭和60～平成18年（1985～2006）
- 「仙台城跡石垣修復等調査指導委員会第1～9回資料」平成9～12年（1997～2000）
- 仙台市建設局 「仙台城石垣修復工事専門委員会 第1～15回資料」平成13～16年（2001～2004）
- 仙台市教育委員会 「仙台城跡調査指導委員会 第1～22回資料」平成13～21年（2001～2009）
- 仙台市教育委員会 「仙台城跡1～8」平成13年～20年（2001～2008）
- 仙台市教育委員会 「若林城跡」平成20年（2008）
- 『東州仙台城絵図』正保2・3年（1645・1646）（齋藤報恩会蔵）
- 「仙台城下絵図」寛文4年（1664）（宮城県図書館蔵）
- 「仙台城及び江戸上屋敷主要建物姿絵図」（仙台市博物館蔵・千田家資料）
- 「御本丸大広間地絵図」（齋藤報恩会蔵）
- 「青葉城御本丸之図」（仙台市博物館蔵）
- 「御本丸御家作御絵図」明治元年（1868）（宮城県図書館蔵）
- 「仙台城旧御本丸御屏風絵図」明治26年（1893）遠藤允信追記（仙台市博物館蔵）
- 「伊達家記録」（真山公治家記録）
- 「仙台古文圖」慶長7年（1602）（伊達家御繪主 高梨家文書 平成5年（1993）所収）
- 「御本丸拝見覚書」安永4年（1775）安倍彦右衛門記（仙台市史 昭和4年（1929）所収）
- 「仙台藩刻内神社仏閣等作事方役所修繕ニ属スル場所調」寛文～元禄年間（1661～1704）（宮城県図書館蔵）
- 矢野顕誠 「仙台藩祖尊王事蹟」明治32年（1899）
- 伊達邦宗 「伊達家史叢談卷之五」大正10年（1921）復刻版『伊達家史叢談』今野印刷 平成13年（2001）
- 第二部團司令部 「仙台城沿革」第二部團司令部 大正15年（1926）
- 小倉強 「仙台城大広間絵図に就て」『仙台郷土研究 第十二卷第十一号』仙台郷土研究会 昭和17年（1942）
- 高倉淳ほか5名 「仙台・地図で見る仙台 第一回」今野印刷 平成6年（1994）
- 仙台市博物館 「仙台城～しろ、まち、ひと～」平成13年（2001）
- 吉岡一男ほか6名 「絵図・地図で見る仙台 第二輯」今野印刷 平成17年（2005）
- 仙台市史編さん委員会 「仙台市史 特別編7 城館」仙台市 平成18年（2006）
- 平井聖・鈴木解雄 「日本建築の観賞基礎知識－寺院造から現代住宅まで－」平成9年（1997）
- 大和智 「城と御殿（日本の美術 第405号）」平成12年（2000）
- 佐藤理 「昭和・平成の大修復全記録「桂離宮の建築」」平成11年（1999）
- 早坂芳雄 「宮城県酒造史 別篇」宮城県酒造組合 昭和37年（1962）

## 報告書抄録

ふりがな	せんだいじょうあと						
書名	仙台城跡9						
副書名	-平成20年度調査報告書-						
卷次	9						
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第348集						
編著者名	佐藤 洋・在川宏志						
編集機関	仙台市教育委員会						
所在地	〒980-8671 仙台市青葉区国分町3丁目7-1 TEL 022-214-8544						
発行年月日	2009年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	調査地点	コード	調査期間	調査面積	調査原因	
			市町村				遺跡番号
			04100				01033
	北緯 東経						
せんだいじょうあと 仙台城跡	宮城県仙台市 青葉区 川内地内	大広間跡 (8次) [第20次調査]	38°15'12" 140°51'22"	2008.5.12 ~ 2008.8.1	248m <sup>2</sup>	重要遺跡の 遺構確認 調査	
		造酒屋敷跡 (1次) [第21次調査]	38°15'17" 140°51'26"	2008.8.26 ~ 2008.10.29	160m <sup>2</sup>		
		本丸北西櫓石垣 (2次) [第22次調査]	38°15'12" 140°51'18"	2008.12.24 ~ 2009.1.21	448m <sup>2</sup> (立面)		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
仙台城跡	城館跡	江戸時代	礎石跡・ 雨落ち溝跡、 炉跡、 集石遺構	陶磁器・ 瓦・金属製品	第20次調査では、大広間跡内部の礎石跡を確認し、大広間の間取りや各部屋の配当が明らかになった。また大広間に先行すると考えられる遺構を検出した。 第21次調査では、造酒屋敷に伴うと考えられる礎石や溝跡、炉跡、集石遺構などを検出した。		

仙台市文化財調査報告書第348集

## 仙 台 城 跡 9

— 平成20年度 調査報告書 —

2009年3月

発行 仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市青葉区国分町三丁目7-1

文化財課 022(214)8544

印 刷 株式会社 東 北 プ リ ン ト

仙台市青葉区立町24-24

TEL 263-1166

